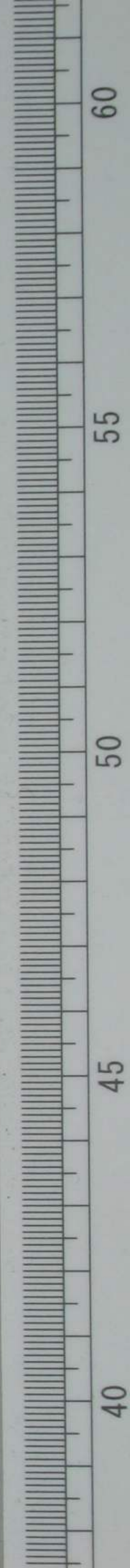


著 城 春 島 市

華漫煙擁

版 社 望 展 物 書

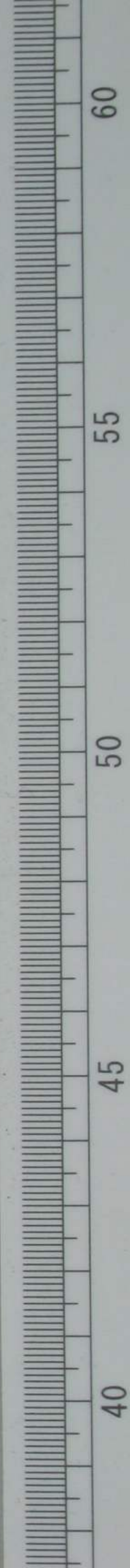
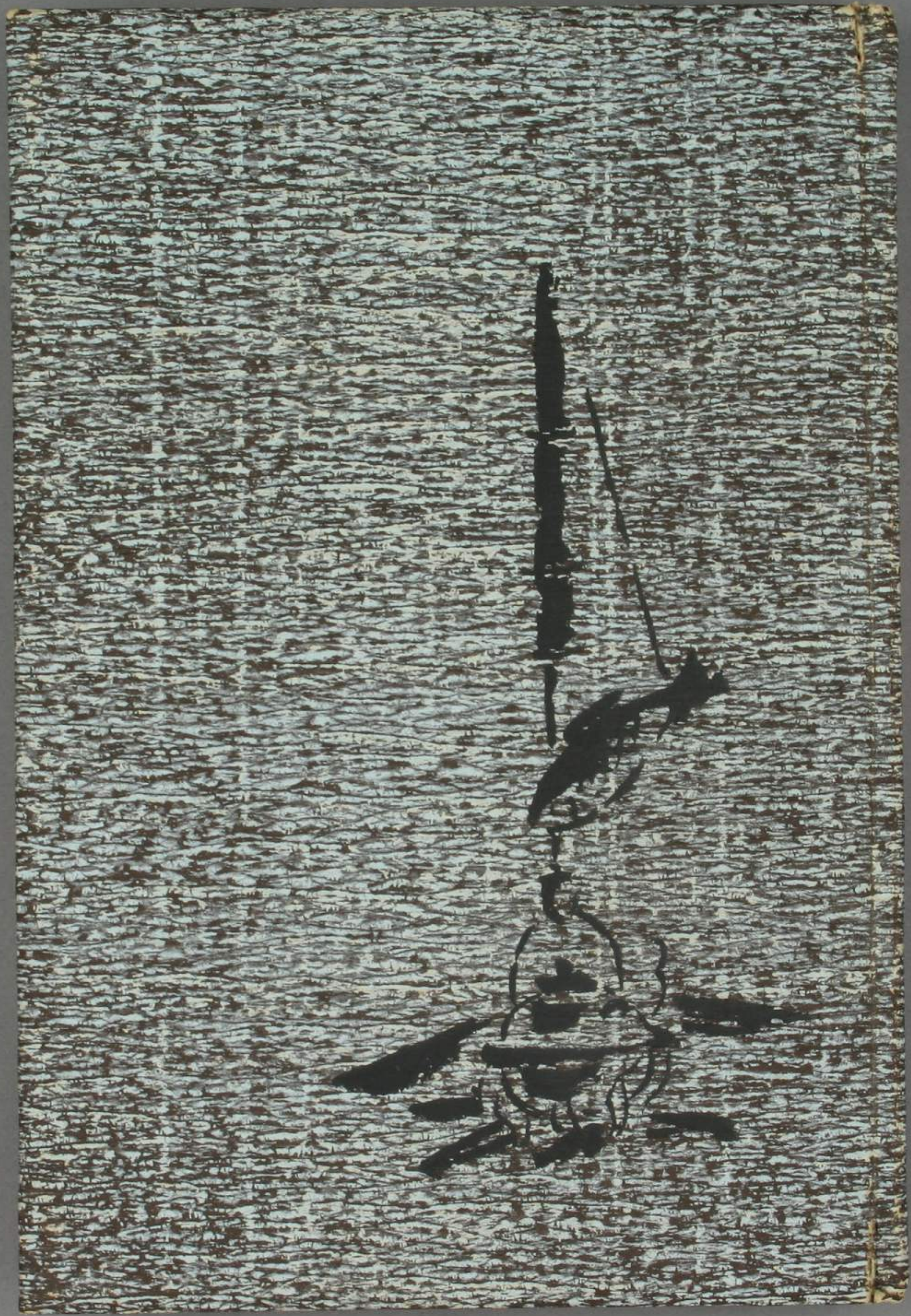
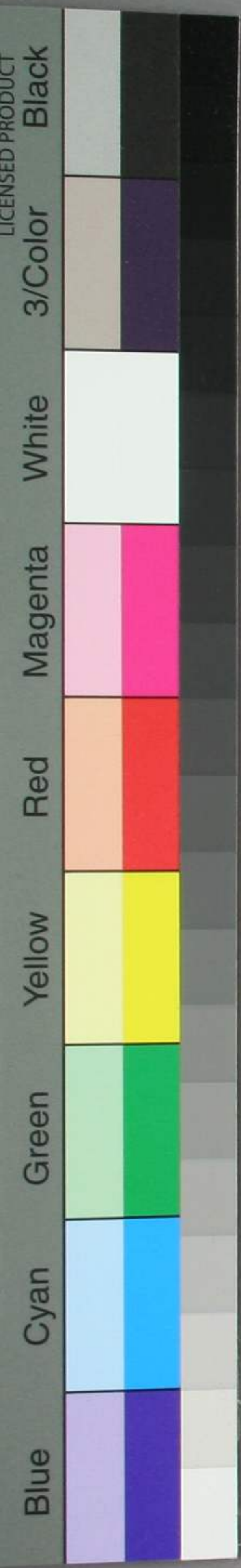


擁爐漫筆

市島春城著

書物展望社版

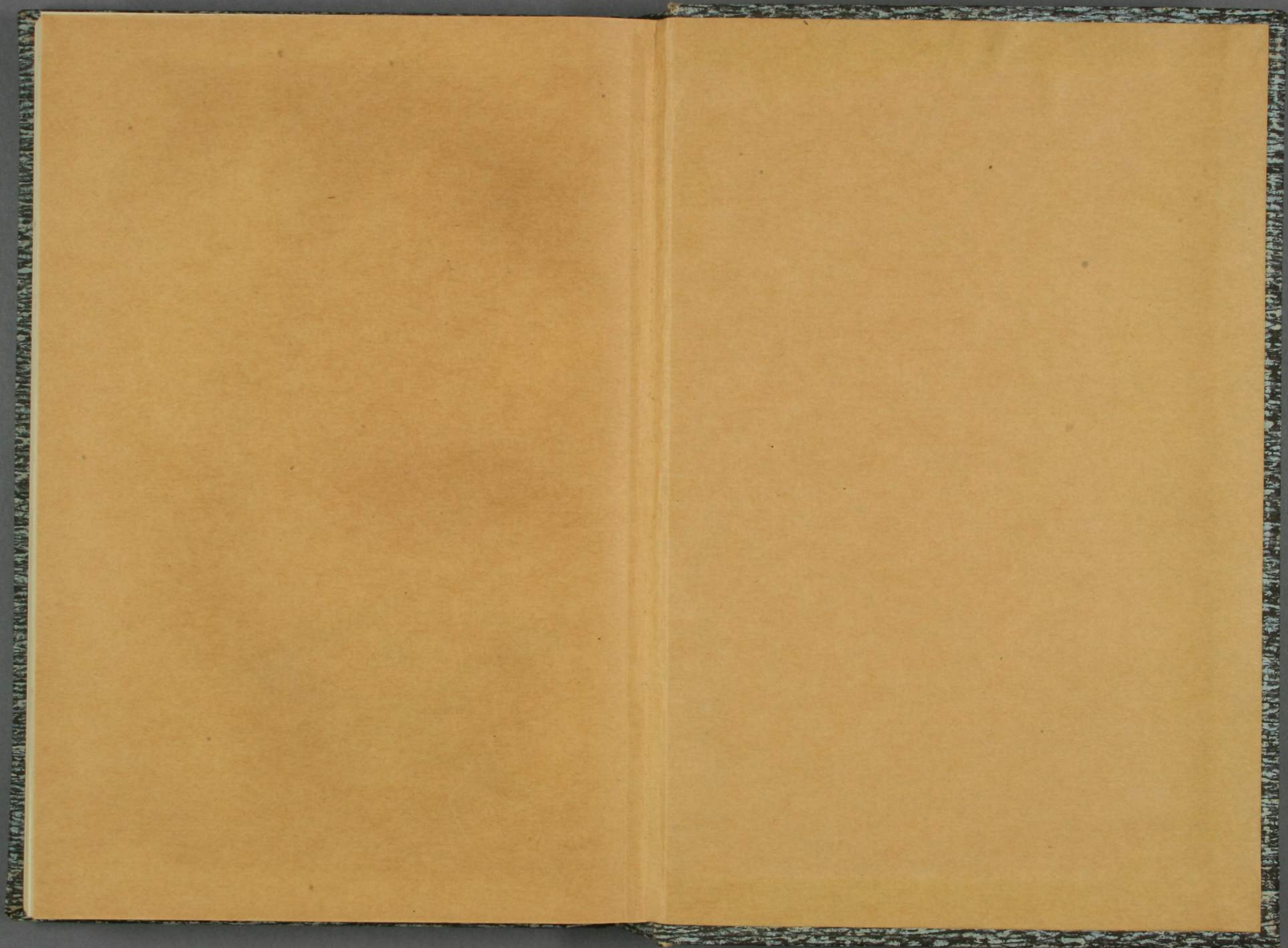
¥2.00



擁爐漫筆

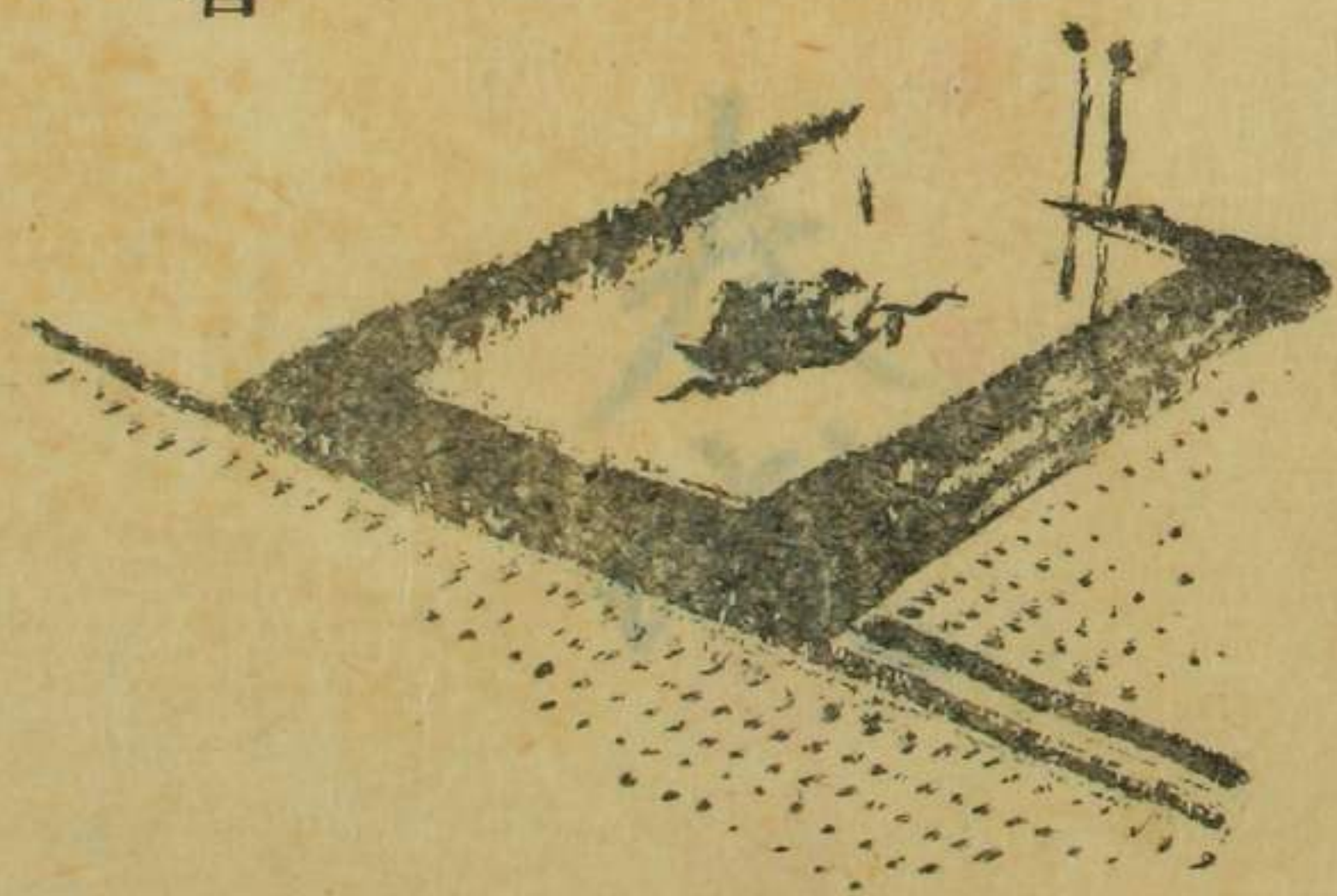
市島春城著





雜爐漫筆

市島春城著



擁爐漫筆

愛藏版

春成



擁爐漫筆

市島香齋書



序に代へて隨筆を作庭に喩ふ

自分は幾冊かの隨筆を編輯したが、其編輯中いつも同じことを感ずる。最初は雜然たる記事をやたらに書き集める。長短精粗さまざまのものがある。漸くにして目次を作り、類を分ち次第を立て、見ると、或部分は較々體をなし、ある部分は全く體をなさないで、加除を要することが起る。又全局から見、いつも不満を感ずるのは、一冊の中心となるべきものが無かつたり、興味をそゝる記事が乏しかつたりすること、略々全體が纏つても、この爲めに苦心することが毎々ある。苦心して書いたものや長篇などが、必ずしも中心となる記事ではないが、多少苦心したものを收めね

二
ば氣が濟まない。さうかと云ふて己の好む所に偏すると、讀者の倦厭を醸しはせぬかと躊躇をする。コンナ事で七八分編輯が出来てもいつまでもまごつく。元來材料があり餘つて其内から選擇するでなく、隨筆は其名の如く隨時の筆のすさびで、特に隨筆なる一書の爲め、わざと筆を把るのでないから、此點は普通の著述と趣を異にする。首尾も中心も、それ相應のものを故ら筆するのでなく、按排で其次第を立てるのだから、そこに特別の面倒がある。若しそれ秀逸の材料を摺撫し、自家の地歩をどこかに占めるごとき用意に至つては、人の知らないところに苦心がある。

私は曾て、隨筆の編輯を、家屋の建築に比して見たことがある。大小長短様々の材料を組み合せて一冊となすことは、建築に似寄つてもあるが、隨筆の性質として、材料が餘り散漫であつて、或ひは肝腎の棟梁の材を闕いたり、建築上是非なくてはならぬものが揃はなかつたりする。但し建築

にも茶室の様な小規模のものがあり、バラツクの物置などもあるから、強ひて建築に喩へられないでもないが、大厦殿堂はさて置き、普通常識の家屋の建築に喩へ難い不備が隨筆にはある。思ふに隨筆は、寧ろ作庭に喩ふべきであらう。作庭には家屋の如く或定數の材料を要しない。棟梁の巨材を要するでもなく、松の一樹もあれば曲りなりに庭が出来る。作庭には家屋のやうに揃つた材料を要しないから、自在であつて何でも役立つ。石などでも必ずしも多きを要さない。花卉などの小材料はどこにでも受入れられる。つまり庭園はあり合せの材料で作得る所に、隨筆と一致する所がある。

併し有り合せのもので作つた庭には、いつも不満を感じ、あの所に常盤木がほしい、あそこに石がなくてはならぬ、あそこには花木が有り過ぎて厭味などと、兎角過不及に就て不満を感じることを免れないが、隨筆が

出来上つて読んで見ると、矢張りこれと同じ感じがする。此點に於ても、不幸にして作庭と一致する所がある。偶々感ずる所を録して序に代へる。

昭和十一年二月

著者識

擁爐漫筆 目次

擁爐漫談	一
國歌	三
軍器製造	五
ヒットラーに學ぶべきもの	七
小野梓氏の胸像を観て	九
伊能忠敬の事	二
大谷句佛氏を訪ふ	三
寺崎廣業と語る	五

熱海と成島柳北翁	二七
高橋草坪と浦上春琴	二〇
頼三樹三郎の書簡	二三
名工橋本市藏の事	二四
越後五智如來の作者	二七
工匠の愛着心	二六
日本庭園の外人評	三〇
新認識の一風景	三三
秋の風色	三四
料理の要訣	三六
登山と食物	三九
俎上藝術	四三

手づくねの陶器	四
布流谷石	四六
ガラスの今昔	四八
三百圓貯金案	五三
帯	五七
厠	六〇
銷夏漫録から	六七
明治時代の暢氣さ	六九
卷石道人	六九
湯治場と川柳	七〇
一茶と餅	七一

樂聖と癡兵	猫の俳句	夏の俳句	桃の花	柳の緑花	宣教師と豊太閣	ナポレオンの母	支那人の附會癡	文人とエロ	自分のオアシス	珠算	空穂
.....
八七	八五	八三	八一	八〇	七九	七八	七六	七五	七四	七三	七二

案山子傳	花彩島	捕螢の笑話	陶工木米の戯號	天王寺屋	廉潔の二藏相	汽車中の珍景	人間的	ゴルデン・バット	ビスマークとヒットラー	玄關子	スタンプの流行
.....
一〇三	一〇二	一〇一	一〇〇	一〇〇	九八	九七	九六	九五	九三	九一	八八

菓子屋の一見識	105
山陽の狎妓閨怨詩畫卷	105
季節と掛物	107
書齋の塵	109
讀書の境地	111
鷗外の『北條霞亭』を読む	115
『續良寛さま』を読む	120
金剛場陀羅尼經に就て	123
郷男の印癖と松石山房	126
名家私印の保存に就て	130
柔道と鍼灸	135

竹田の書簡を読んで	140
猶太民族世界を呑まんとす	144
昔の起重法	147
安田椎園邸に於ける讀書會	149
歐羅巴物語	156
神田の文化町	166
紀行	181
高野詣	183
北遊紀程	190
上篇	190
下篇	200

アイヌを訪ふの記	二二七
丹那のトンネル	二二五

身邊雜記

郷土自慢	二二五
吾家の發祥地	二二七
市島入道に就ての書簡	二二六
吾家の回漕業	二二七
余の養生説	二二九
隠退不可説	二二三
余の酒史	二二八
余と煙草	二二五

書畫賣立目錄に就て	二九〇
田舎隨筆の材料	二九二

擁爐漫筆目次終

擁煙漫談

扉字 著者
扉畫 奧 絃 粹
表紙畫 戶田門時雨

國歌

我國にはさまざまの戦役に作られた軍歌があつて、中には國歌として取扱つてよいものもある、しかし國歌として廣く唄はれてゐるものは「君が代」である。此歌は日本固有の和歌から發したもので、決してわるい歌ではないが、元首を謳ふ歌の部に屬してゐる。元首を歌ふ謠も國歌であるけれども、もつと幾つもあると思ふ。どこの國でも國歌は決して一つに限らない。日本にも國家を表徴し、日本の抱負を唄ふには「君が代」よりも剛健の歌が欲しい。日本では三十一文字の固有の詠歌があるので、兎角それに泥む氣味があり、その爲めに廣く理解されないヤマト言葉が挿入されたりするが、今後國歌を撰むとなれば、それを超越したものが欲しい。従來國歌となると、いつも歌ヨミが参加するが、餘り感心しない。日本の歌ヨミの歌は、何と云ふても女性的で剛健の氣を缺いてゐる。國歌は國際的のものだから、世界の何れの國の人でも歌ひ得るもので無ければならぬ。現に英米佛獨などの國歌は、

世界に流布してゐる。その流布してゐる某々の譜に倣つて作るも一案であらう。又國歌にもさまざまあつて、強ち國家の進運や國の抱負などを歌ふのみが國歌唯一の本分でない。西洋あたりの國歌の中には随分洒落たものもある。國民の氣風をあらはす爲めには屈托しない愉快の氣分の漲るものもあつてよい。それは多衆宴樂の場合などに打興して歌ふのには肩の張らないものがよい。崇嚴本位に出來た國歌を享樂場に唄うことは場所柄決して適當でない。随つていくつか國歌がまだあつてよいと思ふ。唯だ國歌は一たび定まると百代のものとなる。法律は改正も出來るが、國歌は改めることが出來ないから、選定は嚴格であらねばならぬ。撰者は百代迄名譽を傳ふるものだから、一生一代の事業と考へねばならぬ。扱て懸賞などで募つて見ると案外の方面から佳作が出るものである。その作者の如何なる階級の人であるかに論なく、適當な方法で演奏して見て多數の聴手が喝采するのを見れば、大體間違はない。人に感動を與へないやうな作は、如何に文句が立派でも語調が流暢でも、それは佳作でない。心得のある耳に聽かせることが最もよい判者である。

軍 器 製 造

戦争の起るのには、もとより種々の原因もあるが、兵器の充實といふことも、確かに戦争の起る一原因である。孔子が欵器で盈復の理を説いたやうに、盈れば必ず傾くから、その排出の口が出來ねばならぬ。獨逸が世界を相手にして大戦を行つたのも、兵器が充實した爲めとも云ひ得る。兵器製造に獨立してゐる國、例へば日本の國などは有事の日に備へて、常に兵器を作つてゐる。外國から兵器を購ふことをせないから、外國の兵器製造會社も日本を顧客と思つてゐないが、彼等の最も大顧客は自ら兵器を作り得ぬいろ／＼の國々である。例へば支那の如きは奉天に造兵廠があつたのが滿洲に歸して、今は外國より兵器を購はねばならぬことになつた。即ち支那は兵器製造會社の大得意である。支那に騒亂がなくなれば、製造會社は得意がなくなるから、騒亂の成るだけ長く持續する事を禱るのも自然の勢である。支那の騒亂を無くするため軍器の輸入を禁ずる申合をした事もあるが、日本のみがマジメにそ

れを守つたのみで、他の國々は内々に、或は公然と軍艦で運んだものもある。日本の廢銃を買集めて支那に賣つた國もある。全體軍器の製造會社は非常の大資本家で其力は其本國の政治を左右するほどのものであるから、多くの國々はそれに動かされてゐる、此等の會社は戰爭が無ければ仕事がないから、往々にして戰爭を煽起す。兵器を缺けば革命も起り得ないが、己が會社の利益の爲めに之に兵器を供給する。兵器ばかりでなく、軍資をも供給する。そして其の反亂が段々擴大して世界全體の大戦となるやうに企圖する。だから戰爭の起る原因を單純に國際的の衝突だの貿易の利害關係からだなどと一概に考へるのは皮相の觀察で、兵器製造會社に起されることがしばしばある。彼等は戰爭があれば大儲けをする、平和となれば全く儲からない。平和は彼等の敵である。營業的兵器製造家がある限りはどんな國でも戰爭に参加が出来る。随つて一朝どこかに戰爭が始まると忽ち擴大して大戦となる。戰爭を根絶せんとは兵器製造の私營を廢することが大切であるが、事實これが行はれないのは、其會社の威力が餘りに大であるからだ。此等大會社は顧客に向つて、大なるコムミッションを與へるは勿論、贅澤を極めた待遇をするから多くはそれに魅されて擒となる。實は斯くす

ることも道理である、兵器を一々弓矢の如く嚴査の上でなければ受取らぬと云はれては、其試験のためだけでも莫大の費用がかかる。それに較べれば、賄賂に近いコムミッションなどは知れたものである。一たび軍器の註文に出かけたものが直ちに大成金になるのも此故であつて、吾國にも其實例がいくらかもある。

ヒットラーに學ぶべきもの

ヒットラー總統は戦後の故國を擔つて立つ人としては如何にもふさはしい首腦である。國の爲めに可と信するものは遠慮なく剛膽にドン／＼やつて、人の視聽を驚かすのは如何にも痛快である。昔ならば姦雄のやり方と評するかも知れないが、彼のは愛國の至誠から發してゐる。議會を蹂躪したり、猶太人を放逐したり、聯盟を脱退したりして、勝手なことをやつてゐるが、國內に人氣があるのは、愛國の發動であるからだ。彼は或る日本人と對話中、日本を評して、日本の國體は美で日本の歴史も立派だが、缺點は過去を誇るのみで、國政は舉

がらぬと云ふたと云ふが、まことに頂門の一針である。ヒットラーから見たら、日本の政治家は皆坐睡でもしてゐるかに見えるであらう。議會政治の中毒で、黨争の爲めあらゆるものが犠牲となつて、動きがつかぬ、唯々行掛りに引づられて行くのみである。今國難の非常時に方り、誰かヒットラーの勇に倣つて蹶起國難に當るものぞ。吾等のヒットラーに服するのは、其勇敢果斷なる英雄的態度にあらずして、その經綸の雄大なる點にあり、戰敗國の獨乙を回復するに、何が最も大切であるかと云へば、剛健なる國民を造就するに在る。彼の經綸の根本はこゝに在つて、何寄りも教育に重きを置いてゐる。日本の文部省などは行政の末班に居り、豫算のお餘りを頂戴してゐるが、獨乙に於ては、陸海軍に次ぐものは教育であつて之に國費を投ずることを惜まぬ。教育の方針も人格教育が主であつて、教育は二の次である。人格の點數が百の内六七十點も占めてゐる。尙、力を入れてゐるのは學生の健康であつて、各學級に醫者が必らず付き添ふてゐると云ふ。剛健なる國民を造就せんとすればこれではなくてはならぬ。日本の如く教育にのみ重きを置き、機械的に詰めこむのでは技師は出來ても、人物は出來ない。獨乙は人格が劣り不健康である學生を排斥してゐるから、立派な人物

が輩出する道理である。これで無ければ強國とすることを得ない。ヒットラーが一方愛國心を鼓吹し、愛國の爲めには何物をも犠牲にすることを率直に宣し、一方人格養成に没頭してゐるから、獨乙の近い將來は畏るべきものであらう。近く獨乙を訪れて歸朝した人の話の内、獨乙の兵式操練の一端を聞くと、戰爭に参加した將校が十數の士官を會し、指導將校は濡れたる砂を以つて山河の形を作り、その攻防を銘々をして言はしめ、甲論乙駁、全部終つた後、將校が講評をなすと云ふ、其指導の實際的であることも、亦學ぶべきではあるまいか。獨乙は戰敗國で償金の仕拂に窮し、疲弊してゐるかに見ゆれども、内實はなか／＼意氣旺盛で、佛國に復讐する兵備も案外に出來て居るとも云ふ。伊太利のムソリーニと肝膽相照してゐるので、軍器は伊太利に隠してあるとも云ふ。獨乙の蹶起復讐戰を敢てするも遠きにあらざるべき歟。

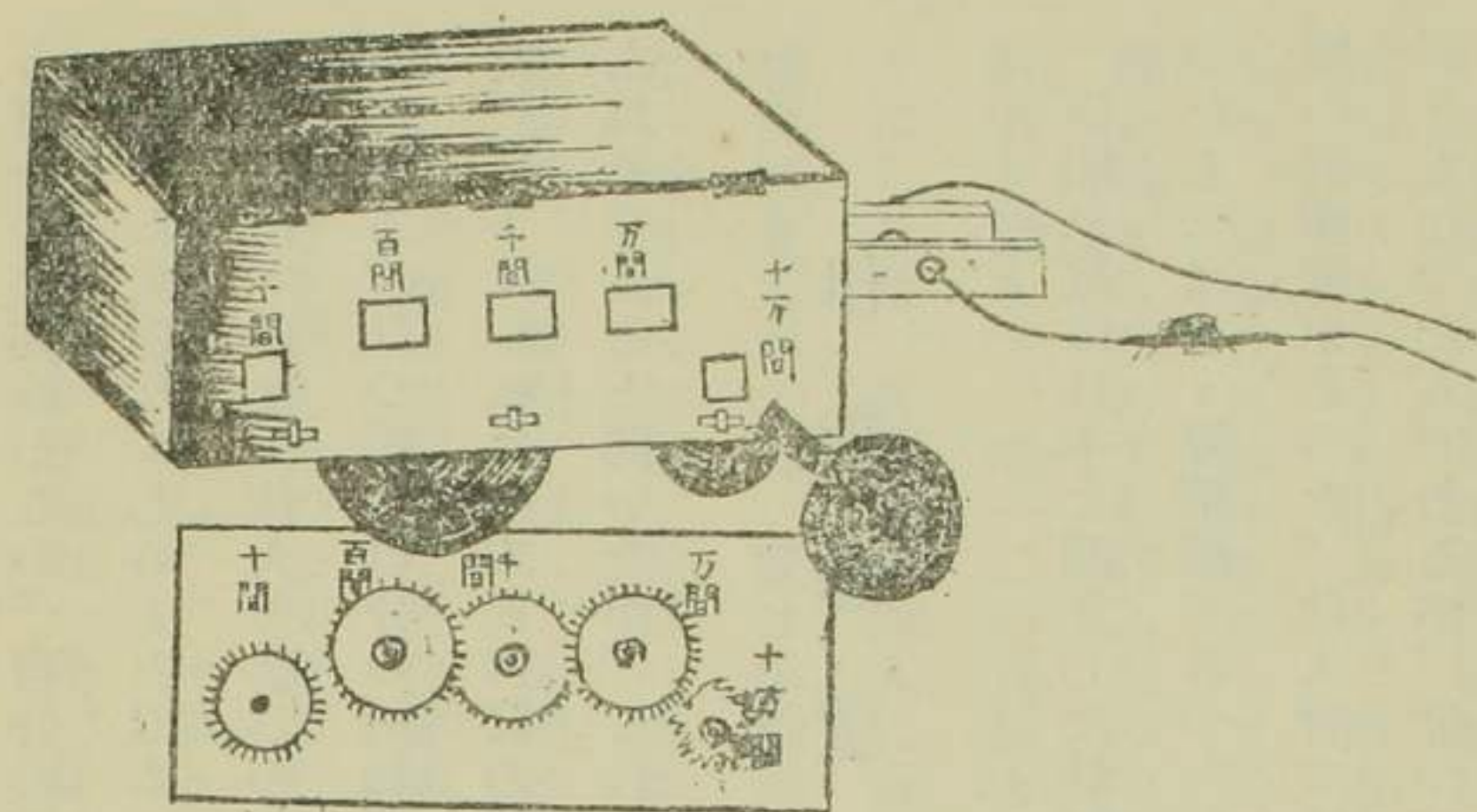
小野梓氏の胸像を觀て

今夏富山房の坂本社長に伴はれて、製作中の小野梓君の胸像を見んと、世田ヶ谷の山本白雲氏のアトリーを訪ふた。坂本氏は近く小野君の五十年忌に際し、君の銅像を早稲田に獻ぜんと、山本氏に製作を托してゐるので、今は小野君を識るものは幾許もない所から、予の批評を徴するため予を伴ふたのである。山本氏は土佐出身で小野君と郷國を同ふすれども、小野君を識らず、唯一二の寫眞と早大所藏の油繪に依り原型を作りつゝあるのだ。私はアトリーに入る時、久方振り故人に會するの氣がして緊張した。私は胸像に對して默拜すると共に感慨無量であつた。像は洋服姿の胸像で、大體よく出來てゐた。徐ろに觀るに較々寫眞と似ない所もあつたが、私は一概に寫眞に據るを不可とした。寫眞は小野君が肺患に罹つた後の撮影で、身體漸く衰へ、面貌に幽鬱の趣がある。像は寧ろ健康時を思はしむるものがあつて欲しい。殊に眼鏡内に潜む雙眸に神采のあるのを私は喜んだ。頬は少しく豐滿に過ぎ、顔は聊か短きを覺えたので注意すると、山本氏は即座に手入れをした。あご髯は疎髯であるべきに較々濃に過ぎるので、此事を云ふと、鑄像には疎髯を作り得ずと聞き、自分は已むを得ずとしたが、聊か手を加へた。實は銅像を批評することは甚だむづかしいもので、有體に云ふ

と自分には其能がない。自分の銅像に對する註文は似せるに専らなる爲め、缺點を現はすよりも寧ろ美貌ならしめよと云ふに在つて、山本氏にも此事を語つて小野君の性格を参考に述べた。山本氏は土佐人であるのみならず小野君の故郷の宿毛の人であるので、頗る故人に縁因がある。且つ氏は自分の舊知高村光雲翁の門人であることを知つて、翁に就ても談を交へた。アトリーには一丈五六尺の伊藤博文公の巨像の原型があつたが、これは新議事堂に置かん爲めであると聞いたが、これも佳作であつた。

伊能忠敬の事

伊能忠敬は日本を測量した最初の人で、後に洋式の測量と比較しても、毫末の相違が無かつたと云はるゝ程精確であつたのは驚かざるを得ない。私の知人に五十嵐敬止と云ふ千葉縣の資産家があつた。此人曾ては多額納税議員として貴族院に議席を有し、又勸業銀行の理事ともなつた人であるが、曾つて相携へて越後へ旅行した時、車中種々の話から、此人が伊



能忠敬の親戚である事を知った。敬止の妹は伊能家の今の主人に嫁してゐる關係からして、伊能忠敬の遺物は多く五十嵐家に保存され、測量地圖の原稿は長持に一杯あり、他にもいろいろの遺物のある中に自動的の里程測量器がある、これは忠敬自身の工夫に係るもので、歩行する時引きすつてあるけば、自然幾里幾丁歩るいたことが知れるやうに構造されてゐると語つたが、其器械の構造は大略上圖の如きものである。伊能忠敬の家は累代醬油の醸造家で富饒の家であつたから、忠敬は立派な學者であり、其家で出版した孝經には忠敬の漢文の序のあるのが近く自分の手に入つた。亦五十嵐氏から贈られた忠敬の測量凡例と品川邊を測量した圖とを一巻に装して今も所持してゐるが、共に自筆でないので慊らず、苦心して忠

敬の手簡を物色し、幸ひに得たのが、高橋作左衛門に寄せた手紙で測量の事に關してもゐるから、それをも合装して珍藏してゐる。

大谷句佛氏を訪ふ

私が初度大谷光演師を訪ふたのは明治三十四年三月十一日であつた。私は其頃衆議院に議席を有してゐた。新潟縣同僚代議士十三名の内、東本願寺派に屬するものが私の外に高橋九郎と齋藤和平太の二人であつた。或る日高橋が提議して三人打揃ふて新法主を訪問してはと云ふに、自分も同意して淺草の別院を訪ふた。別院の結構は案外粗造であつた。應接の間は二間續きで上手の間にテーブルと椅子が置かれ、床には景文の二幅對が掲げてあり、違ひ棚には塗金の小佛像、印材、時計などが置かれてあつた。やがて光演師出で來つて、丁寧には挨拶された。訪問三人の内、師は私の姓名をよく知つて居られた。私は明治八年初めて東京に修業に來たと語ると、師は其年は予が生れた年だと云はれた。師の年が二十七歳であること

が自然に分つた。話次私は佛骨の事を問ふた。佛骨の發掘は其頃の問題であつたからだ。師の云く、實は佛骨を迎へるため遙々暹羅まで出張した。全體佛骨は印度のブダの村落の或る工夫が井戸を掘らんとして二十尺ばかり掘ると、鉄に何か當つたので、段々掘り下げて見ると、石棺が出た。それを開いて見ると、中に又棺があつて白骨が中に納めてあつた、棺の上に文字が刻してあるのを専門家に調べさせると、釋尊の遺骨が納めてあることが知れて、大騒ぎとなつたが、御承知の如く印度は英領で、佛法は衰へてゐるから、よろしく佛法の盛んである暹羅に移して長く祀るがよからうと云ふのでその事に決した。然るに暹羅の盤谷には佛體を納めた神聖な所があるので、一旦佛骨を宮中に移し、やがて此神聖の場所に納めることになつたと語られた。

私は又南條博士が支那で大藏經を獲たのは我國の大幸であると云ふた所、師も同感を表され、且つ云はるゝのに、大藏經の最も貴重なのは肉筆の方である、これは宮内省へ獻納することになつたが、版本の方は本寺へ參る筈だと云はれたが、宮内省へ獻納になつた經は後に帝國大學へ下賜されて、自分も同圖書館に一覽したことがあつたが、惜しいかな大震災の時に焼失した。

師は床の間の架上から一器を取り出して示された。これは日清の役の分捕品であるが、囉嘛教の佛具であらうと云ふて示されたものを見ると、人間の頭蓋骨を材として作つたもので、縁が金屬で飾られ蓋も亦金屬製であつた。此器を載せた臺も人面の骸骨を彫刻したもので、掬すべき古色があつた。支那のラマ寺には此様のものは色々あるが、私の支那漫遊の前であつたから珍らしく感じた。

寺崎廣業と語る

明治三十四年三月十日の自分の日誌に、寺崎廣業を伴つて墨堤の百花園を散策し、山谷の八百善に飲んだ記事がある。酒次寺崎の談に云く、岸竹堂は近世の大家であつた。いつ訪問しても畫の外の話は一切しなかつた、其畫室は二階でナカ／＼廣かつたが、下に通ずる穴があつてその穴から繩で枠に入れた絹本の上げおろしをやつた。高齢であつたが頑健で、一週

一遍妾宅へ通ふ位で、磨墨も繪の具を調へることも人手を藉らず自らやつた。穴から絹本をあけおろしをする仕掛をしたのも、自分で何もかもやる處から工夫したらしい。尙、橋本雅邦に就て語つた内に、雅邦は曾て千疊敷の坐敷で尺四方位の小畫を書いて見たいと云ふたことがある。如何さまこれは名言だ。畫室は大きくあらねばならぬ、大きな室で書かないと、畫が自然小規模になつて、大室に掲げると筈らない、古の畫家が寺で大畫を作つたのも無理はないと云ふた。寺崎又云く、畫家も相當に學問が無ければならぬ。先頃美術院の課題に「富麗」と云ふ題が出た時、某は題を取違ひ、富と麗とを切り離して考へたらしく、富貴の人が金殿玉樓に坐する圖を作つて社中の一笑を博したことがあると笑つた。寺崎は村田丹陵の姉を妻にして、村田とは親族であるが、寺崎の名を成さなかつた頃は、村田の下風に立つてゐたが、近來俺の方がエラクなつたから丹陵の俺に對する感情がよくないと語り、畫家も金が溜つてはダメだと附け加へた。寺崎又語る、西京へ遊びに行つた折、餘り馬鹿遊びをやつて、歸る時囊中一空、旅館の拂ひに困つた。そこで懇意の書畫屋に謀ると、ナァーに心配に及ばぬ、あとは私が引受けるから、一日勉強してかきなさいと云ふから、朝から晩まで十八

枚書いて、それをほうり出して翌朝出發したが、あとで聞けば一枚十圓に賣れて、諸支拂を辨じて若干残つた。西京は物價の安い所で畫料も隨つて低いなど語つた。

熱海と成島柳北翁

熱海は丹那トンネルの開通で一段販を極めてゐる。數月前の黃道吉日に新婚ホオネームの客が、六十組も一時に押込んで混雑を極めたとあるが、六十年の昔を追憶すると眞に今昔の感に堪へない。其頃の海岸には翠滴る磯馴松が浪打際に行列してゐた。旅館も人家も稀薄で、山邊には一軒の家も無かつた、旅館は自炊主義が多かつた。東京から到るには二日を要し、途中小田原に一泊せねばならなかつた。まだ其頃はかの玩具のやうな人車鐵道も無かつた。右は自分等が書生時代の状況だが、それよりも數年前に早く熱海を天下に紹介した人は、此地の恩人と云はねばなるまい、今日の繁榮を致した素因は當時の宣傳に據るのである。熱海の海岸に今紅葉山人の小説に因んだ貫一茶屋や句碑が建つてゐる。それも客を引く一

手段であらうが、山人は其小説に一寸熱海に觸れたままで、實は熱海に親しみが無い、僅かに一回熱海を訪ふた時、旅囊が貧弱で一等旅館から二等旅館に引移らねばならぬ窮境で、宿屋でみづから乾魚を炙つて下女に笑はれた失敗談を遺したのが、山人の熱海經歷の全部である。熱海に住して名を留めた人には曾我、三浦、鳥尾などの子爵もある。梅園を經營した長與專齋などは熱海の忘る可らざる人であらう。近く物故の坪内逍遙翁も亦熱海に種々貢獻した人である。長與の名は長く梅園と共に傳はるであらうし、逍遙博士の海藏寺に於ける墳墓は既に熱海の名所となり、博士を記念する圖書館もあり、博士の邸宅双柿舎と塔形の書齋は、早稻田大學が文豪の遺蹟として、飽くまで保護する筈だから、其泯滅を懸念するには及ばない。唯熱海の蒙昧期に卒先、此地を宣傳して黎明に導いた人は、今の人は概ね其名すら知らぬ。亦その人を記念し其人の功を彰す何物もないのは、甚だ遺憾である。

此の恩人は誰あらう。成島柳北翁其人である。翁は幕府の奥儒者の家に生れ、其先代成島鳳郷は有名な學者である。翁も詩文の鬼才でその彩筆は當時翁の主宰に係る「朝野新聞」をして、操觚界に一頭地を抜かしめた。翁は亦「花月新誌」なる雑誌を自ら經營したが、熱海

として忘る可らざるはこの雑誌である。翁は幾回となく熱海を訪ふて、其來る毎に必らず詩あり、和歌あり、紀行あり、その什を収めたものは此雑誌であつた。翁の才筆は確かに熱海を美化し、人を此地に惹きつけねば已まなかつた。吾等青年輩が當時愛讀した第一の雑誌はこれで、吾等が書生時代に早く屢々熱海へ來ることになつたのも、翁の才筆の鼓吹に依るのである。翁は藩閥の横暴を惡む慷慨家で、改進黨の領袖であつたが、文墨の間に隠れながら往々警世諷刺の筆を揮ひ亦綺語を弄したが、其高邁の人格と稜々たる俠骨は戲筆の間にも閃めいた。

自分は斯人の爲め碑の一つ位あつて然るべきだと思ふたのは久しい前のことだが、偶然柳北翁の宿つた旅館が自分の長い間の旅宿で、入口に翁が書いた「氣象萬千樓」の扁額が板に刻されて掲げてあるのを見るにつけ翁を思ひ出し、いつぞや逍遙博士と此事を語つたが、博士も全く同感で、博士の案では、幸ひにこの旅館の庭園は高く丘陵狀をなし、眺望も絶佳であるから、先づこゝに一碑を建てたらどうか、長文を刻する如き豐碑は町民に譲るとして、

茲には京都に於ける大雅堂の碑に倣ひ、あの特色ある長顔を浮き彫にして、其下に名を刻する位に止め、脊面には柳北の熱海の詩か歌を刻してはと云ふ案であつたが、宿の主人は乗り氣にならないので實行に至らず已んだが、今度此宿が聚樂と改め私の郷人の手に歸したので、主人は私から以上の話を聴き、是非實行したいと云ふので、此二月私が同人と此家に會した時、皆々が發起人となることを諾し、碑は昨年十二月に建設を了するに至つた。

高橋草坪と浦上春琴

自分は田能村竹田の門人高橋草坪の畫を好み、平生思へらく、草坪の技は師を軼してゐると。不幸年若く歿したが、草坪の生前、彼の技に感じたものに浦上春琴がある。春琴は當時畫壇の雄であつたが、草坪の畫を見て心酔し、終に養子に貰ひ受けたい、と竹田に頼んだ逸事が『豊繪詩人』に收めてある。

草坪、田翁に随つて大阪にある日、翁紀春琴を訪ふ、春琴は乃玉堂の子也。畫を以つて家をなし翁と善し、坐既定春琴曰く、頃ろ高草坪なるもの、畫山水を見しが、筆墨蒼光、宛然明人なり。若し清人とせば乾隆以後に下るものにあらず、稼圃孚九遠く及ばざるなり。君其人の誰なるを知るか、翁曰く未知らず、但其姓號僕の門生と符合するは殊に異むべし。春琴曰く、若し目今此人ありとせば、僕は北面して之に師事すべき耳。時に草坪師に侍して來り別室に在り。翁呼び入れて春琴に介す。春琴云く、秀才偶古人と姓號を同ふす。亦藝林の一佳談也と、他日翁草坪作る所の畫を春琴に示す。春琴熟視良久しうして爽然自失、徐ろに翁に謂て曰く、此畫果して前に見る秀才の作る所たらば、則さきに余所觀の畫も亦必らず秀才に出でん。僕過てり僕過てり。願くば予が爲めに草坪子に謝せ、既にして又翁に謂て云く、僕半生佳嗣なきに苦しむ。兄この子を吝まさんば、以つて僕の箕裘を嗣がしめよ。僕に二女あり、渠の擇ぶ所に任せん。翁曰父兄國に在り未だ答ふ可らずと。春琴懇請已ます。翁乃ち書三四發して父兄に問ふ。父母愛兒の遠く隔つを喜ず、草坪亦他姓冒すを屑とせず。春琴再三之を強れども事遂に諧はず、常に以て憾となせり。

頼三樹三郎の書簡

頼三樹三郎が私の郷國越後に遊んで京都へ歸つてから、越後村松濱の豪家平野文吉に寄せた書簡が手に入つた。平野は三樹が世話になつた家で、手紙の文面から推測するに、伴なはれて新潟の妓樓に遊んだらしくもあり、細見云々とはあるは、當時出版された新潟遊廓の細見である事は説明するまでもない。文中往々解し兼ねる謎のやうなことがあるのは、艶事に關する祕密であらう。新潟の女の言葉に擬した俗語も見えてゐるが、矢張り京音を脱しない所に興味を覺える。兄支峰が昌平覺に入らんとする消息も見えてゐる、水原の門前長五郎とあるは、私の郷里の旅館であり、雲浦とあるは出雲崎のことで、三樹が京への歸りこゝでの滞在を平野から詰問されたのは流連に日を送つたからであらう。新潟の土忠と云ふのは土屋と唱ふる吉田屋で自分の懇意な家で三樹は此家に宿したのである。今左に全文を抄録する。

本月七日午前、七松丈突然來訪、持參之花翰早速奉拜閱候。前月十八日（廿四日）と直し

あり）一書狀江戸飛脚に托し、江戸ヨリ新潟土忠様へ向け差上候故、今頃は必御落手と奉存候。夫故昨年來歸宅迄之套語略之、先以御一統様御清適之儀奉欣賀候。小生も無異、乍恐降心是祈、雲浦滞留仕候儀、蒙御詰問、實以無申解候。乍併如御存、大暑加之水石兄も被居、彼は大延引、汗顔之至奉存候。萬謝々々、新刻細見拜見、唯有魂飛神馳耳。陸奥川谷（陸奥川谷の所小生迂愚、色々相考候ても不解申、後便御示教是祈如小泉宅一音事は殊更「イタヅラナ、スカネキヨ引」昨日より心中懊惱仕候。小生もし在留仕居候はゞ、似木を相携直様芳原小路へ罷越、一波瀾相起申候。殘憾如信濃川。何卒三芳君へ御傳聲可被下候。「ヲマハンモ、ヨツボド蟲ガイイヨ引」扱套語差置、此度爲御年玉金貳朱御惠投被成下、幾久敷奉拜受候、御一統様へも宜敷く御傳聲奉願候。家兄も十日後東遊、昌平坂へ入學中に付、大取込不得縷盡、七松口頭より御傳取被下度候、何れ又々後便と留筆、大亂氣罪當萬死頓首拜。

二月八日

醇

石軒詞家帳下

此の書簡に尙々書が數行あれどもそれは略する。手簡の文中兄とあるは支峰の事にて、此

人は三樹の越後へ来る前、私の郷里水原に来てゐたことがある。私の父なども此人に就て學んだものだが、支峰が父の山陽の死を聞き、京都へ戻る際には、吾々の家からその旅費を辨じたのに、支峰は途中越後の三條に留連して旅費をつかひ果し、吾等の家は再び旅費をやつたやうな失態があつた。三樹は越後へ来て此事を聞き、深く恥て、私の郷里に三日ばかり泊つた間に、絶対に杯を取り擧げなかつたと傳へられてゐる。

名工橋本市藏の事

徳川幕府の刀劍鞘塗師で橋本市藏と云ふ人があつた。これは擬竹の塗を工夫して、宛がら竹を引延ばしたかの如く、節と云ひ色と云ひ、竹そつくりで、それが種々の器物に應用され、如何にも高雅であるので、「橋市」の作品は一時大に行はれた。其門人が私の郷國に来て製作したので今も珍重されてゐるが、元祖橋本には傳ふべき奇行がある。友人村島靖雄氏に聞く所に據ると、橋本市藏は鞘塗師又次郎の子で芝の新錢座に生れ、幼名を市三郎といひ子供

の時から父について仕事を習つたのであるが、稍長するに及んで放蕩に身を持崩し、家業などはてんで顧みもせず、内を外に遊びくらしてゐた。然るに廿二歳の時父が重病に罹つてから、心機一轉家業に身を入るゝこと別人の如くなつたので、その技倆もめき／＼上達して、維新前後には橋市の名は弘く世間に知らるゝやうになつた。

この橋市は頗る奇人でその奇行も色々傳へられてゐるが、明治元年五十歳で隠居するや頭髪を奴髻に結び醉阿彌と號して刀の代りに黄金貼りの挿木挿木を腰に差して町を歩いた。又上野の戦争の時には大きな旗に奴頭の畫を描き、その下に御鞘塗橋市と大書して目印として、之を押立てゝ市中を巡回して官軍の人々の鞘を無報酬で塗つてやつた。又彼は金錢に頗る淡泊であつて、土佐の山内容堂、大久保参議、木戸参議などいふお歴々から屢々大金を貰ふことがあつても、いつもこれを貧民に施して少しも惜む色がなかつた。

明治三年の事であるが、大久保参議の用で京都に行つた際、當時有名な陶師清水六兵衛と昵懇となつた。此時六兵衛は橋市が腰にしてゐる例の黄金貼りの挿木を見て、垂涎措く能はずといふ譯で、二百兩でこれを譲り受けたのであるが、橋市はこの二百兩を手にとると、右

から左へ町年寄に頼んで土地の貧民に施し、これで身軽になつたと大笑した。のち大久保参議はこの事を聞いて大いにその意氣に感じ、銀の茶道具を橋市に贈つたと傳へられてゐる。

やがて明治維新の騷亂も次第に鎮り、明治四年には散髪脱刀勝手たるべしとの布令が出て、廢刀の氣運が次第に濃厚になつて來たので、時世を見るに敏なる橋市は巧に家業を轉向し、鞘塗をやめて専ら額縁、花活け、菓子器、手箱、煙管筒に竹塗を應用したのである。然るにこれが世間の大好評を博し、橋市の竹塗の名は誰知らぬものもなく、内國博覽會に出品していづれも賞牌を受領したのである。

橋市は明治十五年二月病の爲めに六十六歳で歿したが、その數ある弟子の一人、長谷川松洲は、もと仙臺の藩士で本名を善左衛門といひ、若い時から江戸に出て橋市について學び、出藍の譽れがあつたといはれてゐる。それがどうした事情からか芝居の囃方になり、明治十八九年頃東京芝居の一座と共に新潟に來て、里村良之助といふ人の家に滞在した。

然るに其家の向側に吉田久平氏——この人は今も達者で却々精巧な塗物を作る塗師——が住んでゐたので、松洲は芝居に用のない時には、紙摺で作つた煙管の筒を作り、吉田氏から漆工の道具を借りて竹塗を作つてゐた。これが抑々新潟における竹塗の最初で、吉田氏はその技術の新奇非凡なのに感じ、松洲についてその方法を學び、かくして竹塗は新潟の名産となるに至つたのである。

越後五智如來の作者

越後の高田を距る二里許りの濱手に國分寺があつて、五智如來が安置されてゐるので、其土地も五智と名乗つてゐる。自分の高田にゐた頃に、よく遊びに此地に行き屢々如來を拜したが、若い時分だから、佛師に就いて何等の印象も存してゐない。併し國分寺を置いたのは千年以前の事であるから、其寺の存在は珍とせねばならぬ。自分は曾つて黒川春村の『歴代佛師傳』を見た時、その附録に運慶の子孫が著した佛師傳が載せてあつて、圖らずも五智如來の作者を知ることを得た。即ち作者は芥子園と云ふ佛師である。原文のまゝを引て見ると、「賢聞子、芥子園は父子共に名匠で、三條（京都の）下る町誓願寺の正印阿彌陀を作る。又

芥子園は越後高田より二里濱邊、五智如來を作る、とあるから、之に據るべきであるが、賢聞子、芥子園をあしざまに訛つて或は稽文會、稽主動と書き傳へたり、或は解開惠、開宿爾と書いたのもあるが、春村は賢聞子、芥子園と同じ人だと考證してゐる。此兩人は養老五年大和の長谷寺の十一面觀自在菩薩の像を作つた有名の佛師である。勿論支那から來た人で、其名の訛られた例は他にもいろいろある。

工匠の愛着心

名匠の涙ぐましい苦心談は、大建築や彫刻や繪畫などに纏綿して、長く後世の話し草となるものであるが、今はさることを餘り聞かぬと云ふは、耳のわるいのであつて、聞き身を立てれば今日とてもいくらかもあるのだ。早大圖書館の大玄關の真正面にある壁畫明暗の圖に就ての名匠の苦心談は、既に余が隨筆にも收めた。恐らく他にも藝苑の話し草として傳へるであらうが、餘り人の注意を惹かないものに、涙ぐましい苦心談がある。それは矢張り同じ大

玄關の六本の大柱である。此柱は左右三對に立てられてあつて、正圓形であるが、上端と下端とは直徑が異つてゐるので圓錐形をなして居る。個様な支柱を塗るのは左官の仕事に屬し、出來上つたのを見ると、何でもないうらに見えるが、斯るものをうまく塗り上げることは、左官の最も難んずる所で、餘程の腕のあるものを選ばねばならぬ。その選に當つたものは、三十歳ばかりの中島武一といふ左官で、これが毎日懸命に塗つたが、なか／＼抄取らないので、監督技師も焦つて、その左官を別人と取替へようとして、初めてその後れる原因が懈怠の爲めでなく、當世稀れに見る丹誠を凝す結果であることが知れて、監督技師も感慨に打たれたと云ふが、幾日か豫定より後れて塗り上げの終つた時には、この左官は妻を伴ひ來り、各柱を仰ぎ見せしめて、しきりに出來榮を誇り、夫妻は半日も柱邊に蹲踞して、低回去るに忍びざる様子であつた。偶々監督技師がそこに來たのを壅して、自分の苦心の作ながら、既に事を了つた以上は再びこゝに來り觀る機會としては今後ありとも覺えぬ。これが見納めと思へば、こゝを去り難い思ひあり、どうか見飽きるまでこゝに止り居ることを許されよと云ふたので、技師も感激して急ぎ書畫帖を買求めて、紀念にと署名をさせたと云ふが、名匠傳に收

めても恥しからぬ美談である。

日本庭園の外人評

西洋人は日本の庭園をどう見て居るか、曾ては全く理解しなかつた時がある。今日は漸く少し解つて来たやうだが、實は本當に解つたとは云へない。言ふ迄もないが日本の庭園は自然の風景の縮圖であるから、日本の風景を理解しない外國人に解る筈はない。明治以來西洋からいろ／＼の園藝家が来たが、或る人は日本の庭園を不具の植物の陳列所だと云ふたり、小石川の植物園を植物の病院などと嘲つたものがある。如何さま陰樹も陽樹もゴツチャに植ゑたり、クネリ曲つた松や、罹病から生じた斑入の植物や、没食子の爲め赤色に變じた植物や、人工を加へている／＼の形に鋏を入れたものを見たら、外人が斯く悪評を下したのも強ち無理はないが、段々日本風景の實態を知るに至つて、彼等も漸く理解し始めた。くねり曲つた、松が實際に日本の海岸にあつて、故ら折り曲げたのでない事を知ると、成程と

彼等も考へねばならず、日本の庭園は戸々に備はつて居て、其面積が甚だ狭いから、樹木を充分に伸す餘地もなく、陰樹も陽樹も雑居する事が已むを得ないと漸く覺つて見ると、日本庭園もマンザラでないとしはお世辭交りに褒めそやす者もあつた。彼等は日本庭園の重なる材料である自然石を始め、松にも竹にも理解がないから、實は日本庭園を評する資格が無いとも云ひ得るのであるが、しかし彼等の言ふ所に、他山の石として聽いてよい所もある。例へば、餘りに人工を加へることの非なるは最も戒しむべきである。日本の名園には、圓形角形其他種々の形に鋏を入れたものがあるが、これも實は自然に形取つたもので、風路に當る社寺の森などが宛がら、人工で切られたかのやうに削平されたものは實地にあるのだが、庭園の人工作用も、これに擬したのが基ではあらうが、人工的小細工の過ぎたのは、外人の言ふまでもなく厭ふべきである。尙外人は氣が附かないか知らんが、日本作庭に陰陽の説などがあるが、これも自然に背くもので感心が出來ない。又外人は罹病植物を愛するの非を論じてゐるが、日本でも園治に識見のあるものは罹病植物を取らないが、併し、偶々此植物に風韻があると取ることもある。これは大體學理に通じないから來る嗜好とも云ふべきものである

から、外人の注意に従ひたいものである。又庭園に植ゑるべき材料の選擇に就き、日本人と外人の間に大なる差違がある。外人の言葉を藉りて云ふと、「歐洲人は庭園に心を用ふること愈深ければ深い程、新奇の植物を取入れて新種を得んとすることが愈々切であるのに、日本に於ては僅少なる植物の範圍に新種を得んと勉めて居る、要するに一は自然を制せんとし、一は自然に従はんとするものだ。」と云ふてゐるが、成ほど東西に斯る相違があるやうに思はれる。これには種々の原因があることだが、兎に角餘り窮屈な範圍に材料を選擇することは外人の言ふごとく面白くない。いつ迄も固有の材料のみ株守するは褒めた話でないが、唯新種を、如何なる庭園に如何に植うべきやは、實地に臨んで研究すべき問題で、其取捨の標準が西洋と同じからざるは言ふ迄もない。配合安排を作庭の大切な要件とする我邦に於ては、一概に新種のみを貪つて庭園をして花室の如き觀あらしむるは我園冶藝術の許さない所で、どこまでも自然を模範として取捨せねばならぬ。そこに我邦庭園の美もあり特徴もある。

新認識の一風景

日本風景の内、昔顧みられなかつた所で、外人の嗜好から風景地となつた所がいくつもある。富士の裾野や、長崎の雲仙や、信濃の輕井澤などは、外人が好む好まないに拘らず、立派な風景地だが、兎角これまで日本人の風景趣味は、盆景の様な小規模のものを偏愛したので、大規模の風景は、爲めに閑却された氣味がある。外人が避暑地として選むのは、多くは日本人がこれまで閑却した所に在つて、日本人は追隨的に此等を風景地と認めるやうになつたので、或は曰く外人は日本人よりも原始的趣味がある、自然的の欲求がある、外人は日本人に比すれば自然征服の勇氣があるなど云ふものもあるが、私をして謂はしむれば、外人の好む土地は大陸的であるから、其嗜好に投するに過ぎない。所謂大陸的である特徴は、北海道の如く地區の規模が大きく、土地が高燥で、空氣が乾燥してゐるなどで、そこには自然荒涼たる趣が漲つてゐる。外人のこれを喜ぶのは其生國の風土に似通つてゐる所から、斯る土

地を好むのに不思議はない。強ち原始的の土地を故ら好むとは思へない。日本は梅雨期に入ると北海道を例外として、内地は濕氣が多く、外人の到底堪へる所でない。随つて乾燥の空氣の横溢する所に就くのだが、それは多く未墾の地である。併し斯る高燥の未墾地には一種雄大の風景がある。それが外人の嗜好から氣が付き、假令追隨的にせよ、日本風景に加へることになり、風景範圍が一層擴大されたことは喜ぶべきである。

秋の風色

私の家園の池畔に葎が叢生してゐる。繁華の町に斯る野趣のあるのは一異彩で、自分は之を愛してゐる。秋になると葉に錆が來るが、それも強ちわるくない。自分の最も喜ぶのは雨風に際しての撩亂の姿である。芭蕉が「何事も招き果たる芒哉」と云ふてゐるが、芒と同様に雨風の多い時葎はなかなか多忙である。俚諺にも「招く芒を芒が招く、後の芒が又招く」。芒や葎は眞に社交的の植物である。毎年新しい地を選んで根が延びて行くので、案外の處

に生え出づるのも此植物の社會相で、同じ範圍にのみ居ては満足が出來かねると見える。

日本は秋が來ると木の葉が紅色を帯びて、楓樹や蔦かづらの多い山は、滿山燃えんとし、常盤木の交つてゐる所も紅葉と綠葉と錯綜して錦繡の美觀を呈する。春の花よりも此方が寧ろ人氣のあるのも偶然でない。確かに秋は山々を美化する。邦人が紅葉を愛するのは外人などの知らない趣味である。外國でも秋季に木の葉が紅葉もするだらうが、日本の如くならぬのは、水蒸氣が日本の如くでないからである。實は科學的に考へれば、紅葉は葉の離脱に先んずる光景で、グールドパイを告げる臨終光景だと云ふ者がある。如何にもそれに違ひないがそれは理屈であつて、秋の哀れさは臨終際だから感ぜらるゝのだと、理屈で答辯の出來ないこともない。秋の肅殺の天地に滿山を燃やして陽氣の光景を呈し、人目を怡ばしむるは、造化の妙と云はねばならぬ。そして此光景は日本のみに與へられた天惠である。

秋になつて庭園を歩いて氣のつくのは、茶の花がいつの間にかコッソリ、宛がら人に覺ら

れないやうに、時を誤らず咲いてゐる事だ。茶の花は小さく密葉の中に潜んでゐるから、う
つかりすると目にとまらないが、よく見ると純白で梅花を駕する趣があり、清淡で俳味があ
り、簡素で人に驕らない所に床しい味がある。西洋人はダリヤのやうな多花疎葉を好むが、
多花を喜ぶのは俗趣味で、茶人の洗鍊された趣味は密葉疎花にある。茶の花のみでなく、山
茶花なども疎花の所に趣致がある。

早起きをすゝめた朝顔も、漸くすがれて、最早花を見せぬ。加賀の千代の句に「朝顔やま
だ燈火の影もあり」と、あるやうに夜が明けると早く花が開く。「朝顔や蚊帳の内
から障子あけ（杉風）」とあるやうに、無性ものでも寝ながら花を見る。朝咲いて夕まで保
たない短い運命であるのに、何故毎朝、欣然開くのであらうか。槿花一朝の榮と云ふごとく、
如何にも果敢ないものである。併しその豪華な花を發する様は、一茶の所謂「慾面の朝顔た
んと咲にけり」と形容され、その矢鱈に蔓を伸して處構はず咲き亂るゝ様は千代が「朝顔や
おのが蔓かと蔦に咲く」と詠じ、「朝顔につるべ取られて貰ひ水」と詠じ、「朝顔は蜘蛛の糸に

も咲にけり」と詠じたやうに、如何にも無心で無邪氣である。譬ふれば毎朝の新聞紙のやう
なもので、讀み了れば直ちに葬られる、其運命は如何にも短い、其勤めは缺かさずチヤン
とやつてのけてゐる。尙、譬ふれば、稚兒の夭折するやうなもので、兩親が寵愛して憐たら
ない内に、幻のやうに消えて行くやうに、哀れ果敢ない運命である所に深い味がある。

加賀の千代の句に「桔梗の花咲くときポント言そうな」とあるが、よく穿つた句で、如何
にもポント聲を發しさうである。併し事實は聲を發しない。蓮の花なども開く時ポント聲を
發しさうであり、久しく聲を發するものと信ぜられてゐた。拂曉不忍池中の辨天を養するも
のは、常に此の聲を聞いたと云ひ、自分なども聞いた覚えがあるが、ことしの夏或る植物學
者がそれを否定したので、五七の風流の客に植物學者も加はつて、夜の明けるとか明けぬに、
探討の爲め池畔に出張し、實否を研究したが、結局聲を發するものでなく、池中の魚の唸
の聲を誤認したのであらうと云はれたが、その検討に服せず地方から甲乙丙が確かに發聲を
聞いたと新聞に投書したものがあり、なほ疑似の間に迷つてゐるやうだが、恐らくポント

ト聲を發しさうだと云ふ想像が、錯覺を生じたのではあるまいか。人は往々にして想像を事實と見ることがあるが、それは錯覺の作用である。

料理の要訣

自分は料理に關する種々の書物を見たが、要を得て感服する程のものに未だ出合はない。ただ延享年間、谷水と云ふ人の撰んだ『歌仙料理』と云ふ書の總説に左の十則を擧げてゐるが、簡にして要を得てゐるやうに思ふ。三十六歌仙の見立料理は其實感服しない。今左に十則を擧げる。

- 一 色の取合せ五つ、青、黄、赤、白、黒。
- 二 鹽梅五味。
- 三 盛り方、山水にかたどる、膾を以て山に見立る。
- 四 遠來の名物只そのみを以て馳走なりと思ひ、他を鹿略にする莫れ。

- 五 おのれが好まざるものとして取合せに加へざるは甚だあし。
- 六 初ものを料理第一の馳走とすれど、時ならぬ初ものは吟味を要す。別して茸類に意を用ゆべし。
- 七 ある料理通の説に海のもの初ものよく、山陰のものは初ものあし、海鮮の走りは油うすく、美味にして軽く風味格別なり。
- 八 ある茶人の談に、茶席の料理は如何程風雅なる面白き取合にても、濃味一品にては茶の吞めまじきものなりと、餘りに佗びたる事にのみ偏するはよろしからず。
- 九 精進料理は揚げもの多きに過ぎ勝なり、餘り厚味に過てはよろしからず。
- 十 料理にのみ意を用ひても飯を閑却しては功を一簣に缺く。盛り方、器具の選び方も肝要とす。

登山と食物

登山の座談會の速記が「文藝春秋」に出てゐる。それには山内で食慾が進むか退くか、何がうまく何がまづいと云ふやうな實驗談も出てゐるが、多くの人の話にては山の茶屋の米の焚きやうがいかにもなつて居らぬと云ふてゐる。副食物に豚カツや、牛肉の罐詰などの類を遣ふのに、どうしても食はれないと云ふてゐる。ある人の云ふには山には山相應の物がよい、山小屋で餘り珍重しない野菜がよいと云ふていろ／＼擧げてゐる中に、自分が最も意に適つたのは茄子の漬物で、それはつまり過ぎで紫色になつてゐたけれども、それが何寄りもうまく、時々それが爲めに茶代を拂つたと云ふ記事に接して、自分の青年期に妙義の白雲金洞山を跋涉した時の事を憶ひ起した。自分の此登山には山麓の宮司の家から案内者を二人連れて出かけたが、晝飯の用意がなかつた。然るに山を遍歴すると案内時間がかゝつて、案内者の家に歸り着いた時は、二時を過ぎてゐた。然るに案内者の家の妻が私の爲めに握飯に胡麻を點じて、茄子漬を澤山重箱に入れて供した。これは全く期待しないことで、空腹でもあつたから喜んだが、茄子漬の味は今でも忘られない。少しく漬け過ぎて聊か酸味があり、色は薄赤味を帯びてもゐたが、自分は全體茄子の漬物が好物で、酸味のあるのは漢學塾で喰ひ習

つてもゐるので、實にうまかつた。山ではコンナものがよいので、福神漬など決して香の物にはならない。

旅中携ふべき食料は、昔から梅干と鯉節とは、必らず忘れてはならぬと云はれてゐるが、少量で食慾を刺戟するものは、確かにこれである。登山などで物の得がたい時、鹽酸のものを欲する時、梅干ほどよいものはない。鯉節は全く副食物を缺いた場合、これを嚙つて居ればそれで済むのだ。自分が山中に於ける梅干に就ての體驗を談ると、富士山の七合目の石室に宿つた時、まだ山開き前で、室には茶屋の主人も居なかつたが、室内を探索すると梅干が一樽あつた。コンナに澤山あつてもどうも仕様が無つたが、凍死に瀕しつゝある兎を狩り、その肉を刺身にして、梅酸に濡して喰つた事を想ひ出す。何と云ふても忘れられない味は味噌である。これも富士に攀つたときの事で、風と闘つて豫定の通り登攀が出来ず、一夜七合目に宿して、翌日嶮を冒して八合目に達した時、こゝは各方面から登る者の混合する所で、室は開けてあり、爐に鍋をかけてあつた。吾等は羹に渴してゐた時だから、少量の味噌を投じて味噌汁を作り、携帯の残飯を残らずこれに投じて、雑炊をやつて喰つたが、此時は、

われながら多量に飲食したので驚いた。山中の味噌汁は、牛乳にも優して人間を扶ける乳母である。

俎 上 藝 術

俎上藝術とは何かと云へば割烹藝術である。庖丁の冴えと鹽梅の美は料理人の藝術であるが、少し委しく云はねば料理趣味のない人には分り兼ねるかも知れない。料理は只だ味覺が可とする計りを上乘とするものでなく、見て快よく感ずることが大いに味を助ける。刺身の軒などは強ち人の食ふものでないが、刺身に風致を添へるものは軒であつて、大根やウドなどを宛がら毛のやうに細く巧みに切ることが料理人の腕を示すもので、それが美事に剪られて刺身に添へてあると快味を感ずる。辛味の子葉なども、大根なども、花形の容器に作つてそれに點じて添へれば一種の風趣をかます。海鼠などは頗る裁りにくひものであるが、腕の冴えた料理人は、この切りにくいものを千本に切り、宛がら大根などを切つたかのやうに、

細く眞直に、そつくり皿に盛つて出せば、何人も料理人の伎倆に感ずるであらうが、往々之を能くするものがあつて、自分も嘗て感心したことがある。料理は色彩美で引立つもので、或は青い野菜、或は赤や黄色のものを點することが料理人の慣用手段である。この意味からして往々梅花の如き香氣ある實物の花を點することがある。寄せものとなると、青、白、紅、紫、さまざまの色彩を用ひることが出来る。それを様々の形に切つてうまく配合すれば美麗な菓子に接すると同じく料理に趣味を添へる。我邦の精進料理には専ら寄せ物が用ひられ、膳部に賑やか味と美觀を添へる爲め、料理人は勞を厭はず巧みに種々の形に食品を作る。庖丁一本の働きで、よくも這般の細工が出来ると思はせる程の事をやる。餘り巧みに過ぎると却つて俗に墜る嫌ひもあるが、随分鍛練したもので、魚類や獸肉を一切嫌ふ精進料理に、魚鳥と見まがうやうなものを作ることもある。これなども餘り感心の出来ないシヤレであるが、料理人の俎上の藝術はそこまで及んでゐる。菓子も料理の一科であるから、熟達の料理人は専門の菓子屋の思ひ至らない珍味を作る。食物以外に料理に要するものは、庖丁一本で何でも作る。笹などをおもしろく切つたり、楊子や箸や申などをけづることは勿論だが、す

べて青竹を材料とするから甚だ趣味がある。水邊の料理屋には附近においが叢生してゐるから、それを取り來り、適當の長さに切り並べて、串で止めて皿に置き刺身の床とするなどは珍らしくもないが、ガラスの床に置くよりも野趣もあり風流もある。多くの例を擧げるまでもなく、料理人の意匠も悔り難いものがある。誰か之を俎上の藝術にあらずと云ふや。

手づくねの陶器

陶器は大抵轆轤細工であるが、轆轤の如き機械を藉らず、手づくねで作るものがある。これは豊公の茶の流行期に工夫されたと云はれてゐる。此陶器は土が軟かで焼くにも高度の熱を要しないから、自然フックリした物が出來、口觸りも柔か味がある。勿論手づくねだから整形のものはないが、整形でない處に珍重さるべき趣味があるのだ。

言ふまでもなく、大抵の陶磁器は轆轤で其地を作るが、「樂」と名づくるものには、轆轤を用ひず、手づくねものが多い。整形のものを作るには轆轤は大切なもので、それが機械だと

は云へ、之を操縦する巧拙で物に出來不出來が生じ、轆轤を巧みに操縦するには、十年の鍛錬を要すと云はれるなど面倒のものである。普通壺のやうなものは、上半下半を別々に作つて、それを中央で合はせて焼くのが例となつてゐるが、名工仁清は上下に分つことなく、一體一物を轆轤で作つたと云ふから、轆轤操縦の名人と云へば仁清を推すべきであらう。しかし機械に由つて出來るものには、自然下職の手も加はる。實を云ふと下職の方が熟練してゐるから、多くの作品は下職の手が七分も八分も占めてゐて、作者個人の思惑が轆轤細工に現れにくいのが、手づくねとなると、遺憾なく作者の個性があらはれてきて、形に付ても、大きさに付ても、厚さに付ても、ふくらみに付ても、香臺に付ても、作者の思惑が充分加はり、作者の指の動く所ヒネル所に、活如として生命があり、作者の胸中の祕は指端に逆つて形を爲すのだから、手づくねの器には作者の心霊があるとも言ひ得よう。

「樂」の釉は黒と赤が普通であるが、黄も白もある。黒や白を巧みに取り合はして繪などを現すこともあり、意匠はさまざまで、黒の色にも漆の如き純黒のものがあつて、茶の色を極度に發揮する、青磁などは美麗なものだが、何となくツメタイ感じを與へる。又茶の緑色を

抹殺する嫌ひもあるが、樂には此難がない。

手づくねの器の整形でないのは、寧ろ其特色で、凹凸もあり、いびつのもがあり、ゆがんだものもあり、一々言ひあらはすことも出来ないが、その不整形の處に興味があるので、作者もある感興で作るのだから、作者自身と雖も同一のものを二つ作ることには出来ない。殊に作者が精神を勞するは香臺に在つて、香臺のみが釉がかゝらず、生地をあらはす所であるから、そこに土質も知れ、作者のヘラの味も知れ、云はゞ赤裸に作者をあらはす所で、茶席には必らず香臺を検して茶器を品贍するが例となつてゐるから、作家が之に精神を籠めるのは無理もない。名人の一とヘラは千鈞の重きをなすものである。

布 流 谷 石

自分は石を好む性癖があつて、いろ／＼の石を藏してゐる。庭石にも好みがあるが、机案の文房としての石を最も好んでゐる。小形ながら自然の山嶽状をなしてゐるので見飽きがし

ない。曾て考へたことがある。何故に實山嶽のごとく、小さいながら趣きの同じいものが自然に出来るのであらうかと、併し此疑問は何故に奇巖快石の山嶽が起るであらうと不審がると同じことで、大きな山嶽が浸蝕作用で生ずるものとすれば、小形の石も矢張り同じ作用で生ずるに相違ないと自問自答して已んだこともあるが、水中にある石は水の摩擦で山嶽の奇景をなすものがあり、母石の中に籠つて山嶽状をなしてゐるものもある。これなどは既に浸蝕作用を経て山嶽の状をなした後、土に掩はれ、その土が石化したのであらうか。紀州の布流谷石などは、母石に包まれたものを碎いて出すものと聞いて居ながら、原石の産地で實驗したことが無い。然るに楚人冠氏は其紀行に、實驗談を記してゐるから、要略を左に轉載する。

紀州の熊野の内日高郡の南部、牟婁郡田邊の近くに盆石が山から出る。田邊では古谷、秋津谷、南部では瓜谷と云ふから出る。最も多く出るは瓜谷だ。然し石のさばけ口が田邊であるので、どこから出たのも古谷石として知られてゐる。三所、石の類がいくらか異ると云ふことだ。

石はすべて赤土に包まれ、それが母岩だが、これを「巢」と唱へる。石の皴と云ふべきを土俗「藝」と云ふてゐる。又石の底の臺となつてゐる所を「靴」と唱へてゐる。

此の石は母岩に包まれてゐる。それは素人が如何に捜しても容易に捜し當らないが、流石に土地の案内者は容易に捜し當てる。彼等は此石が巢の中で生育するものと信じてゐる。又死石と活石があると信じ、死石は磨いても光澤を發しないと云ふてゐる。

母岩を割つて見るのが一番だと云ふが、折角面倒して割つたり、針で皴を掘つて見ても結局つまらぬ形のもので十に八九を占めて、失望することが多いと云ふ。

以上に就て見ると、形態の調つたものを得ることは容易でなく、巢の中に何があるか全く不明で、折角獲ても割つて失望することが多いと云ふから、佳石に相當の價のあるは無理もないと感じた。

ガラスの今昔

硝子の西洋から輸入されたのも古いことで、寛文の頃には、支那から其製法が傳へられ、文化十四年には江戸でビイドロの製造が始つた。寛政頃出版の錦繪を見ると、球形の硝子器に入れた金魚の圖が見えてゐる。薩摩侯などはその製法を研究して、幾多の器物を作られた。多分薩摩はガラス製造の元祖と云ひ得るであらう。其頃のガラスは所謂「切り子」で、頗る堅牢のものであつた。自分の幼少時代に薩摩製の菓子器があつたが、頗る高價なもので、誤つて石の上に落しても破壊しない程堅牢であつた。眼鏡などは相當に早く行はれたが、多くは外國製であつたであらう。それは頗る大形で今のに較べると三倍も大きかつた。望遠鏡もあつたが遠眼鏡と云ふた。これも外國製であつたらう。自分の幼少時代には、田舎では殊にガラスを珍らしく感じ、自分の家のものが江戸から土産に齎らして來るものは、ガラスの板で作つた箱に菓子を入れたものであつた。女子用の手箱の蓋にもガラスが装置され、それには繪が書かれ、彩色の施されたものであつた。

ランプなどの行はれ出す前に、藥劑を粉末にするニウ鉢、ニウ棒があつた。カンピンの名があつた硝子の酒器、尻のふくれた徳利やうなもので酒を盛つて火に載せて燗をするものも

行はれた。簾形の刺身臺も早く行はれた。南京玉と唱へる五色の小粒の珠に穴があつて、女子は之に糸を通して玩具とした。自分の家には父が新奇の物を好んだので、早くからガラス切りを手に入れた。それは今も存してゐるが、板ガラスを切るにはダイヤモンドでなければ切れぬと云はれ、此器には針の先ほどのダイヤが装置されてゐる。今ではどんな家にもガラス戸があるが、當時は堅三寸幅二寸位なガラスを障子にハマテ、外部が見えると云ふて喜んだ位ひであつた。寫眞も行はれたが、皆なガラス取りで紙取りはなく、種板を其儘桐箱に入れて用ひた。追々ガラスを吹くことが行はれ出して、圓器に金魚を入れて賣出し、私の田舎でも或るハイカラ趣味の人がガラスで球形の筭を作り、球の中に水を入れ金箔を浮かせた。この製造家はビイドロ屋と云はれた。ガラスを吹くことは左まで面倒でもなく、珍奇を喜ぶものは製造を試みたが、板ガラスを作ることは難事とされて、その製造は餘程後のことである。今時は理髮所に大きな鏡を幾面も並べてあるが、初めて外國船の來た頃は船内に大きな鏡が装置されてゐるので、訪問の邦人は自分の映るのに驚いたり、鏡に突き當つたりして滑稽を演じた。舊幕時代に外國へ漂流したものが歸朝すると、有司は必らずガラスの製造法を

問ふたものである。西洋諸國では早くからガラスの瓶を用ひて、空瓶はドン／＼抛り出して棄てるのを、漂流人などは驚異を以つて見たとあるが、さもありさうな事である。今こそ日本に於ても普及のものとなつたが、昔は珍奇のものであつたに相違なく、千年前の我正倉院にも、硝子玉が藏してあるのを見ても、創造の甚だ古いことがわかる。恰かも支那で玉器の代用に青磁を作つたと同じやうに、ガラスもダイヤモンド代用に工夫された趣がある。或る説にギヤマンはデヤマン、即ダイヤモンドの訛りだとも云ふ。此工業は段々開けて日用缺く可らざるものとなつたが、同時に美術品ともなるに至つた。寫眞器のレンズなどはザイス製が重んぜられ、眼鏡も同じことになく、高價のものである。ポヘミヤヤ、チエコ等がガラス器の製造に長所があつて、頗る豪華のものを産する。此等の器には彩色のあるは勿論、鍍金があつたり彫刻があつたり、燦爛目を眩するものが少くない。尙建築用にはステインドグラスがあり、佛蘭西では香水の容器を殊に吟味して技巧を凝し、美術品として恥しからぬものがあり、酒器にも亦美術的のものがいくらかもある。

三百圓貯金案

三百圓の金を銀行へ預けて利に利を積みば百年にして何萬圓となり、二百年にして何十萬圓となり、三百年にして何千萬圓となる、といふは人のよくいふことであるが、實際にこれを計算してみると、

元金三〇〇圓

(三分七厘—一流銀行の定期預金の利子で年複利の計算)

一〇〇年後

一一、三五〇圓

二〇〇年後

四二九、四一一圓

三〇〇年後

一六、二四六、〇九八圓

元金三〇〇圓

(四分一厘—一流信託會社金錢信託で年複利の計算にて)

一〇〇年後

一六、六八〇圓

二〇〇年後

九二七、三九八圓

三〇〇年後

五一、五六三、〇二二圓

といふ驚くべき數字となる。併しこれを實地に行はんとするものは、世間廣しといへども餘り多く聞かない。また事實に於ても決して多くない。蓋し百年はまだしものこと、三百年の長歲月、利殖の法をよく完うし得るは、容易のことでないからだ。

然るにこれを實行せんとして大いに工夫を凝らしたものがあつた。それは「二六新報」の社長秋山定輔氏の亡父、秋山儀四郎氏である。自分が校用で大阪に出張してゐた頃、儀四郎氏と屢往來したが、或時私を訪ひ來つて、自らこの貯金案を語つた。彼は先づ、かくの如きことを工夫するにいたつたのは、一朝夕でないことを説明して云ふには、かつて八十に近き老爺が「桃栗三年柿八年」と諺で云ふ、結果の早く見えない柿の苗を植ゑて居るのを見て深く感じた。その後高野山に登り、杉苗の三寸程なのが、宛かも菊菜の如く、見渡す限り植ゑ付けられてあるを見て、更に感ずるところがあり、どうしても遠大のことを考へなければならん

と思ふた。

人生七十古來稀れなり、この僅々なる日子に何事かなし得ん。よろしく後世幾百年にわたる未來を、己が舞臺として計畫するところなかる可らず。自ら目撃し得ずとて未來に涉るの業を企てざる如きは、到底與に事を論ずるに足らない。試みに思へ、無事に生きて居つて死んで居る人がある。死んで而して生きて居る人がある。かの遠大の事業を營み、功を百世に期する如き、その人死すとも實は生きて居るのだ。

三百圓の金を三百年貯蓄せんとする私案は、主として國益を爲さんと欲するに出づ。三百圓を少なりとする莫れ、金額の大小は左まで肝腎な問題でない。要は長く利殖を續け得ると否とに在り。

吾のこの金を利殖せんとするは、一個の私利を圖らんとするにあらず。若し一個の私利を主とせば、到底永續す可らず。こゝを以つて余は第一元金の吾々より出でたることを韜晦するを、第一着の必要と感じた。次ぎにこの利殖の法を圖り、これを久しきに維持せんには、多數の人のこれを保護するの必要を感じた。何となれば、少數なれば如何なる天變地異によ

り、その人亡び、その事廢らんも知る可からざればなり。

こゝに於て吾は三百人の社員を全國の各所に募らんとす。しかしてその人は余と略々同感の人ならざる可らず。富人よりもむしろ貧人たるべし。老年よりも寧ろ青年なるべし。一個國の人たるより數個國の人たるを要す。則ち三百圓の原資はこの三百人の共有物たるなり、三百人は共同してその規約の命するところに従ひ、三百年間利殖の方法を講ずるの責任あるなり。

誰かその規約を定むるか、曰く、余は眞個の發起人なれば余これを定めん。余は前途金の増大を致すの日を豫め前知し、今日考へ得らるゝだけのことを考へ、之を演説し、之を速記せしめ、以つてこの社團の守るべき憲法となす。

第一この憲法、各々三百の社員名簿を三百年間保存する方法を講ずること緊要なり。余はこれに就ては種々の工夫を凝らし、少からざる資を投じ、三百年間保存し得べき過去帳様ものも三百部を作らしめたり。これに余の遺言の速記、即ち憲法と、三百名の姓名、並に捺印を石版摺となし、帖は三百なるも、その内容は即ち一なる此ものを社員に頒たんとす。社

員の或る者は之を寺に托する可なり。これを他人に譲るまた妨げず。想ふに天災地變に若干を亡失するの變なきを期せずと雖も、三百全部を喪ふことは恐らくは無かるべし。

如何なる事を憲法として規定するか、曰く、最も重きものは三百年の曉に至りその殖財の幾割を國家に獻すべしと約すること也。これ最も重大の點なり。既に國家に對しかくの如きことを約す。社員は義に於て半途解散を許さず。且つ夫人各々利慾あり。その利殖を獎勵し、その繼續を鼓舞するには、三百年に達する道途に於て、早く彼等に若干の利益を頒たざる可らず。即ち百年の時より毎年若干の歩合を與ふべし。記憶せよ、一割と云へば百年にして既に何萬圓なり。決して少きの配當にあらず。二百年にいたれば、壹割と云へば何百萬圓の配當なり、豈又驚くべきの利得にあらずや。

百年まで配當せざるは別に深き理由あるにあらず。百年を経ざれば、未だ利殖の大を看す、且つ百年と云へば長きが如くなれども、實は一家三代なり。吾に三十童わんごの子あり、而して現に其子あるも、百年まではとにかく發起人たる親の遺訓を記憶すべし。随つてこれを遵守すべし。随つて利益を與へて獎勵するの必要を感じざるなり。

且つまた百年迄は、元利を積むも、未だ何十萬圓の金額に過ぎず。これを内國銀行に托し置くも、預り人に事を缺かず、唯これより以往若干年を経れば何百萬圓となる。

こゝに於て自ら銀行を営まざる可らず。更に進んでは外國の銀行に預けざるを得ず。斯の如き順序は大抵憲法に定め置く積也。

資本を活動して、その利殖を圖るの巧拙は、その衝に當る人の手腕と徳義に在り。百年以後、この料理の局に當る人を選むには、最も周到の用意を要す。その選舉の法のごとき、また特に憲法に定め置くを要す。

曰く何、曰く何、渠の語るところこれに止らず、兎に角、これを實行せんとするに至つては、秋山は流石に變りものなり。

帶

日本の風俗の内の特異なるは、服裝に帶を始め、さまざまの紐を用ひることで、西洋諸國

の服装には幾んどこれに類するものがない。勿論日本の衣服の拵へ方から生じたものであるが、男女の帯、就中女の帯は甚だ複雑のものである。男の帯は幅五寸乃至四寸位、長さ一丈のものであり、博多あたりには専門の織元があつたので、博多帯と云ふ稱さへある。之を腰邊にしめて、うしろに結ぶに多少の方式があつて、多くはカヒノクチと唱へる結び方である。昔の士分の結び方は自ら異つて、一端を挿むのでハサミ帯と云ふてゐる。薩摩あたりでは士分は兵兒帯に限るとされ、今でも薩摩生れの人は、自分で角帯をカヒノクチに結べず、人にして貰ふ人がある。カヒノクチに結ぶことも多少の習熟が要る。西洋人はタオルで日本流に背中を洗ふことが出来ないとい聞いたが、カヒノクチも西洋人の出来ない業である。褌も帯の一種と見るべきものだが、角觚のメる褌は、シメ方に多少の作法もあつて、緊縛を肝要とする。化粧廻しと云ふものは前垂のやうなものだが、これも腰に巻くものであるから、矢張り帯の部類である。此外職人體のものゝ用ひる、幅の狭い尺の短い三尺と云ふものがある。書生等の用ひるのも三尺と呼んでゐるが、これは職人のと違つて尺は長く、反物を切り放つてどこも縫ふことなく、ぐるぐらに巻くもので、兵兒帯も同じ事である。一ト頃は白の

金巾を用ひた時代もあつた、汚れるとふんどしと見違へるやうであつた。今の書生は黒の唐縮緬を用ひるやうになつた。

女の帯となると男子のごとく簡單でなく、頗る多般で、普通お太鼓に結ぶ帯の外に、補助帯を要すること二三に止まらぬ。下襦袢を抑へるには細い紐を用ひるが、これも一種の帯である。本格の帯の下には多く薄いダテマキを用ひる。昔はラセイタと唱ふる毛織のものが用ひられた、これも無論帯である。本格の帯は女の服飾の中心であつて、絢爛眼を奪ふほどのものもあるが、帯をメめて後ろの結びを抑へる爲め、しごきをメる。これも一種の帯である。幅は時に依つて廣狹があり、上代には太い繩形のものであつたのが、段々廣くなつて、今は一尺餘にも及んでゐる。長さは一丈二尺、その結び方にもいろ／＼あつて、昔の御殿などにはさまざまの形式もあつたが、普通はお太鼓に結ぶ。藝者などは結ばずに垂れ下げてゐるものもある。又前に結ぶのもあつて、多く未亡人が之をやる。京都の舞妓の帯は長さに於て、天下無双で、普通のものゝ倍にも及び、結んだ端が垂れ、それが脚下にも達してゐる。

帯を女の服装の美の中心としてゐることも全く日本特有のもので、如何にも不經濟に見える

る。卷けば見えない所まで絢爛華麗を極めた高貴の織物を、一丈二尺も費すのだから、不經濟と云へば不經濟に相違ないが、女性が精神を籠める所はこゝに存する。女性は幾百圓を之に拂ふことを辞さない。帯は他人の前に解くべきものでないから、表立つ所さへ美麗なればよいではないかと、云ふのも經濟論から發するので、美術論ではない。女性の誇りは、人の見ざる所にも奥床しい美があると云ふ所にある。閨房の衣桁に掛けて眼を怡ばす所に女性の喜びがある。これは西洋の人などが理解し難い處で、日本の服装美を研究した西洋人が、近頃ヤット理解するに至つたと聞いてゐる。尙帯の上に普通パチンと云ふものを用ひる。これは紐で、前面に金銀珠玉の飾りが装されてあるが、これも帯の補助器である。尙紐のいろいろを云ふと、幼児の衣服にはつけひもが帯の代りをしてゐる。羽織の紐、袴の紐、皆紐が附屬する。襷なども紐と見るべきものだ。日本の服装は百結が特徴と云ふべきであらう。

廁

李家正夫と云ふ人が著した『廁考』は五百頁の巨篇で、廁に關する考證やら、風俗やら、東西の事實が多く集めてあるが、讀んで見て案外と思ふやうな事が無かつた。糞便に關する挿話は誰しも多少持つてゐるもので、自分も試みに此『廁考』に漏れた逸話を書付けて見よう。

自分は江戸時代を知らないが、街上に便所の設備が缺けてゐたので、放尿で市上を隨分汚したものだ。その遺風は明治の初年にもあつて、警吏は違警罪の中で之を取締るに、なかなか骨が折れ、過料に科せられたものは少くなかつた。不規則に用便することゝ、それに辛抱の出來ないのは全く習慣で、今になつて考へると今昔の感に堪へない。

一時は街上に多く便所を設けたこともあるが、段々減じて今は便所とあらはに言ふことを避け、W・C.とか、手洗所、化粧室などと云ふやうになり、一時汚穢を極めた共同便所も不斷に水が注がれ、大いに面目を改めた。大なるデパートには、何れも洋風の便所があるので、使用の爲めに入るものもあるから、これも共同便所たるの觀がある。

日本銀行が始めて建築された時自分も見したが、樓上の便所に工夫された設備は、今は珍らしくないが當時は感心した。それは足で下を踏むと同時に水が流れ出る仕掛があつて、足を

外せば同時に水も止まる。日本人はどんな示定があつても、やり放しなので、斯く自動的の設備を工夫したものであつた。

明治の初年に雪隠を呼びものにした料理屋があつた。それは銀座の角の松田で、手洗所など銅版で張り詰めたりして、田舎ものを驚かしたことがある。今の目黒の雅叙園もこの故智に倣ふてか、便所の板が黒塗りで金蔭繪がしてある。

西南戦争の時に熊本の前城兵が困つたのは、食料の欠乏は勿論だが、糞便の始末にも困つたと云ふ。官軍との連絡が出来て、救援隊が入城して先づ問ふたのは、この始末問題であつたと聞いてゐる。

雪隠は秘密の場所であるので、往々犯罪が潜む。帝室博物館の佛像が、共同便所で発見されたことはまだ誰も記憶に存する事だ。明治初年に、所謂竹橋事變と云ふのは、近衛兵が時の參議を銃殺せんとする暴舉で、それを事前に知つたのは、或る官吏が便所内の密談を聞き、逸早く警戒したので事無きを得たこともある。

廁の不潔を厭ふてそれに入る時必らず全裸となつた人も幾らかあるが、日本では土佐の山

内容堂侯がある。支那でも米元章が大の潔癖家で、廁から出てからの清潔法は、實に厄介であつたと云はれてゐる。さうかと思ふと大の不潔家もある。支那の後漢に陳蕃と云ふ人がゐた。其人は室に糞があつても之を取り拂ふことをせないで、辭勤と云ふ友人が何故掃除しないかと詰ると、大丈夫天下を掃除すべし、安んぞ一室を事とせんやと氣焔を吐いたとある。

支那には廁に贅を凝したものがいくらかもある。李家氏の『廁考』に、石崇と云ふ人が豪華な廁を造り、常に美麗な侍婢を置いたので、或る客人は主人の閨に戸迷ひをしたかと狼狽した話が出てゐるが、自分が或る支那隨筆で見たのは、人名は忘れたが、等身大の銀製の裸女を廁に置き、之を溺器に充てたと云ふ事實もある。日本の諸侯の内に痔疾に罹つたものがあり、長く廁にあることを厭ふて、運搬自在の便器を作り、座敷に置き、それに踞して用便をなしつゝ遊樂に耽つた例もある。

昔、身分ある人の旅行には、籠輿の中に小水を入れる筒が装置され不時の用に供した。これをシト筒と云ふて暹近の家來が之を司つた。それは荷物にもならない小器だが、大使用と

なると、なか／＼大荷物で、大隈侯は足が不自由であつたから、旅行には必らず携帯された。

他人の家に宿して深夜便所の知れない程困ることは無い。何處も同じことゝ見えて、金子伯が曾て亞米利加の大統領たりしルーズヴェルトのマイスターペーの別荘に泊つた時、深更主客握手してグード・バイを云ふて別れてから、主人は便所を教へて置くことを忘れたのに気がつき、金子伯を寢所から便所に案内したことが伯の追懐談に見えてゐる。自分も先年ある人と京都の俵屋に泊つて、廁に到らんとしても餘りに戸締りが嚴重で、なんとしても戸が開かず、ひどく困つたことがある。

殖民地に於ける日本人の廁は洋式に出来てゐるので、これ丈は内地に優つてゐる。彼等が内地に歸りいつも云ふことだが、内地で何が不愉快かと云へば、どここの家を訪ふても、便所の悪臭が室内に漂つてゐることだと云ふ。内地人は鼻が悪臭に慣れ、それほどに感じないが、彼等には餘程ひどく感ずると見える。

近頃書畫などの質造をなすに、化學作用で古色の色附をなす法として、紙や絹を廁の天井に吊し、アンモニヤ作用で古色をつける。亦小便を紙に塗るのも一法だと聞いたが、如何に

も穢ない工夫で、それを知ると贅物は益々いやな氣がする。

高田半峯翁が、先年外國漫遊から歸朝後の憤慨談の内に、西洋の廁に入つて見ると、大概が日本紙が備へてある。日本のおとし紙は軟かで珍重されるのは國産のため喜ぶべきだが、癢に障るのは、包紙に日の丸や國花の櫻が美麗に彩色されてゐるのを見て、不快に堪へなかつたと談られたことがある。

『廁考』を読んで興味を感じたのは左の一話である。歐陽修は有名の文章家だが『歸田錄』に據ると「余が平生作る所の文章は多く三上シヨウに在り。」と云ふてゐる。三上と云ふのは、馬上、枕上、廁上を云ふので、日本でも詩人や文人の多く廁上で思構を練る。國分青厓が飯田町に寓居した頃、隣は歌人落合直文の家で、兩家の便所が垣根一重を隔て、相對してゐる。屁の音も脱糞の音もよく聽える。青厓廁に上つて無中に思構を練つてゐると、隣りの廁に音がするのを自分のと心得て、用を足さずに出てきたと云ふなどは如何にも面白い。

最後に自分が加へる一話はヴェクトル・ユーゴーの一生一代の愉快と云ふ話である。ユーゴーがある時夜中家に歸つてくると、門前で小便を催すので、自分の屋敷だから遠慮もなく

放尿すると、物蔭から一人の男が現れ出て、放尿の人が此家の主人とも知らず、ユキなり叱して、此野郎失禮な奴、こゝはユイゴイ先生の御宅であることを知らないかと云ふて憤慨したのが、ひどくユイゴイの氣に入つて、折々語り出たと云ふ逸事がある。

銷夏漫録から

明治時代の暢氣さ

明治時代には文士達も暢氣なものであつた。村上浪六氏は其頃墨堤に元祿茶屋と云ふを出したことがある。元祿風に扮した女給が呼びものである。あの頃はおかしなことを臆面なくやつた時代で、草の屋おろかと云ふ小説家が坪内逍遙、饗庭篁村などを招いたのも向島で主人公は元祿風の女装をして應接したので、饗庭は先以て眉根をひそめた。大阪ならば或は人の興を惹いたかも知らんが、東京ではそんなことは當時でも喜ばれなかつた。其頃酒豪の者が寄つてたかつて飲中八仙を擬したこともあつた。岡倉天心、饗庭篁村、宮崎三昧などは文學八仙中の人であつた。今から思ふと如何にも太平のんき時代であつた。

京都に在る南畫家神樂江卷石は自分の舊知である。飄逸の人で常に自刻の「中先生」の印を用ひてゐる。彼は云く、予畫に於て大先生たるを得ざるも、小先生にも非ずと。近年中風症に罹つたと聞くが、七十歳の時、自ら碑を洛西の御宣東北住吉山に建て、碑面にエヘンの三字を刻す。これ彼が自ら負ふ所を、人に呼びかけんとするものにあらざるなきを得んや。碑陰には先だてる夫人理香の事を刻し、亦自家に就ては、學ぶ所忠信、行ふ所道義、惜しむ所のもの名節、エヘン豈流俗と濁浪を同うするものならんやと、漢文の中にエヘンの三字あるも奇である。尙、彼は死後を思ふて、大學に屍體解剖を托しあることも合せて刻してある、當世には珍らしき人物なり。知らず近頃病狀如何。

湯治場と川柳

熱海に數日入浴した時フト思ひ出したのは、古い川柳に「ふんどしをするが湯治のいとま乞ひ」とあるのが、如何にも面白い。湯治場に於ける客人ほどダラシのないものはない。川

柳子、例により皮肉の處を擱んでゐる。尙ふんどしで思ひ出すのは、沼津の三島屋旅館の風呂場の三助が、東郷元帥の越中禪を大切にしているとかで、小笠原長生氏が箱に題してゐると聞いたが、或人の狂歌に云く、

日本海しめ直したり越中に

むかうから來る敵もはづさで

一 茶と餅

自分は老いて益々酒と親しみ、餅とは愈々疎遠になりつゝある。兎角餅を喰ふと腹具合がよくないので、ことしなどは成べく喰はない算段をした。しかし新年に餅の喰へない境涯ほど哀れなものはないことを思ふと、自分などは勿體ないことをすると感ぜざるを得ない。一茶の句に云く、

餅の出る榎がほしさよ年の暮

寝て聞くや貰ふもちつき二所
梅咲くやあはれ今年も貰ひ餅
庵の餅雪より先に消にけり
おらが世や垣根の草が餅になる

空

穂

稲が實ると頭が重くなるので、稲は皆垂れふす。其中に傲然立つてゐる稲を調べて見ると、それは空穂で頭が軽いから直立してゐるのだ。此空穂の稲の姿勢は、如何にも傲慢に見えるが、兎角人事に於ても、威張る奴は、抵ね頭が空疎で思慮が足りないから威張る。思慮あるものは謙遜で人に譲り、どこかに奥床しい所があつて、決して人に傲らない。ある人の句に「稔るほど頭を垂るゝ稻穂かな」とあるのは人事の誠めである。

珠

算

此頃外國の或る實業家が日本へ視察に来て、某銀行で若い行員が算盤を操縦してゐるのを見て、その敏活さに驚いたと云ふ話を聞いたが、如何さま驚いたであらう。日本には洋式の算術も行はれてゐるが、大數を敏活に計算するには、珠算に據らねばならぬので、いつまでもこの舊式の珠算が事務上に珍重されてゐる。珠算は算法も器械も極めて單純のものであるが、敏活の操縦は全く練熟に依るので、宛がら三味線を弾くのと一般で、主として練熟に因るが、日本人の指先に一種靈活の働きがあることも一の特徴で、外人が學んで能はざる所は指先にある。單に珠算や三絃のみに止まらず、すべて日本人の手藝に、驚くべき才能の現はれがあるのは、機械萬能である外國と異つて、久しい間手を機械とした慣習やら工夫から、一種美妙的な藝術が生じたので、名工には手に尺度がありと云はれ、子孫にも傳へ難い。腕の冴えがあるのは日本の特色で、珠算が眼の廻る程敏活で、精確の數を得るのも、日本手藝の

片影に過ぎないのである。

自分のオアシス

某新聞社から「あなたのオアシス」は何かと云ふ題で短文を徴して来た時は、三伏の盛夏であつた。私の答に、自分の庭園の池は、附近の河川改修工事の影響を受けて、渴水して池底を現はし、雑草が叢生してゐる。炎天の折柄此の渴水禍には閉口してゐる。沙漠にすらオアシスがあつて、旅客に水を給するのに、何事ぞ、水を湛ふべき池に一滴の水もない。ただ幸ひに自分のみ轍鮒たることを免れてゐる。自分にはオアシスがある。これあるが爲めに自分の肺肝は濕ふてゐる。これが爲めに健康である。これが爲めに避暑にも行かない。自分のオアシスは臺所にある、自分は貧なりと雖も、臺所のオアシスは嘗て早魃しない。そのオアシス、酒である。

文人とエロ

吾郷國越後に遊んだ東都の文人がいろ／＼エロテックの跡を残してゐる。高久靄厓が柏崎の娼婦に思はれて、娼樓の隱宅に籠居したことは曾て隨筆に書いたが、同じ靄厓が葛塚に在つた頃の事につき郷人の語るを聞くに、當時貧なりし此畫家は、屋根職の一室を借りてゐた。その家の妻が案外容色があつたので、其夫が死亡すると、其未亡人を吾ものとして、他から屋根葺の見積を頼まれると、よい加減に其職らしく見積をやつたこともあると云ふ。又新潟の眼科の醫家から聞いた話だが、瀧和亭が新潟にゐた頃、某樓の娼婦と漆膠の間で夫婦約束までしたが、瀧の老母が許さなかつたので其事は成らなかつたと云ふ。然るに和亭が、東京より此娼婦に寄せた一束の書簡が失はれず在つたので、私に語つた醫家は、その書簡を全部購ひ得たと云ふが、これには新潟を去つて出京後のいろ／＼の事が書かれ、夫婦契約の實行し難き経緯も窺はれ、一讀興を覚えるから見せると云はれてゐるが、まだ其機會を得ない。

支那人の附會癖

支那人は兎角聖賢の教を楯に取つて、物を附會する癖がある。支那の古い酒器には龍蛇を刻したのがある。亦饕餮と云ふ怪獸を刻したのがある。此等は皆多飲を戒むるの意を寓したもので、龍蛇は飲客を威嚇し、饕餮は全體貪欲飽くことを知らない喰シンボーであるから、それに倣ふ可らずと戒めたものだと言ふが、これ等は皆後人の附會であつて、寧ろ反對に解するのが本當である。即ち龍蛇の如く飲むべし、饕餮の如く澤山喰へ、と言ふ謎である。日本にも古くから天狗の面を擬した杯があり、鼻が突出してゐるので、之を坐に置くことが出来ないやうに作つてあるのも、多く酒をすゝめる所以であるのに、支那にあらば彼の敬器の如く訓戒の意を寓せりと謂はん歟。又蛇蜂を畫したる杯などは、「さすとのむ」の謎であるが、支那流に解釋したら、或は戒意を寓せりと謂はんか。杯の字は扈とも書く。扈は危の字と同じである。これなどは酒を戒める寓意があるかも知れぬ。松崎惟堂は杯は危なり、三杯

を越す可らず、と言ふた。門人に多飲の人があり、その數を守つて、三杯を限ることにしたが、特に製した杯は茶碗の如き大杯である。自分も贈られて一個所持してゐるが、其大きさを見て、これならば三杯で澤山だと一笑した。

ナポレオンの母

西洋の女傑傳の内で、自分の最も感服する女性はナポレオンの母である。流石にあれだけの英雄を生んだ女だけある。ナポレオンが立身したのを喜んだには違ひないが尋常の人とは異つて常に云ふた。戦に勝つたからと云ふて、一概に喜ぶべきでない、負けることもある。一時勢ひがよいからと云ふて喜ぶべきでない、衰へることもある。と、チャント達觀してゐたから、ナポレオンが帝位につく時などは、狂喜して式に列すべきであるのに、それも避けて式に臨まなんだと云ふ。勿論奈翁即位後は、生母は相當の尊敬と待遇を受け、華美の宮殿に豪奢の生活を營むことになつたが、母は思ふ仔細があるのかのごとく、豪奢の生活をば避け

て、その定つた年金や生活費を節して、儉素な日を送つた。然るに、榮枯盛衰は物の數で、
盈れば缺くるの例に漏れず、那翁も遂に失脚して僻島に流竄の身となつた。その幽囚の際に
訪問した珍客は母堂であつた。それは骨肉の親しみと云ふばかりでなく、母堂は莫大の金を
携へて那翁の不自由を救ふた。此金こそ母堂が斯ることもあらうと、かねてから節して貯へ
て置いた物であつた。

宣教師と豊太閤

豊太閤が最初耶蘇教に厚意を持ち、自分自身も耶蘇教に成り兼まじい程であつたのが、九
州征伐の後、急に排斥に轉向し、嚴重なる禁令を下したことに就ては、史家に種々の説があ
るけれども確然たる考證がなく、謎として残つてゐる。偶々新村博士の『遠西雜考』を讀む
と、耶蘇教徒側の觀測が書かれてゐる。

斯ういふやうな話もあります。これは秀吉を侮辱したといふ様に取れますが、西洋人の

書きました日本布教史の内に、秀吉は大變基督教の宣教師を擁護して居つて、自分も信者
にもなつてもいい、唯基督教の戒律の内に、夫人を一人だけに限り、妾を置いたり、第二
第三の夫人を自由にするといふことを禁じてあるのに困る。即ち妾を置くといふやうなこ
とを禁じてなければ、自分も信者になつてもいいといふやうなことを宣教師に申し出したと
云ふ。それほど眞面目に強く云つた譯ではないのでありませうが、さういふやうな意味の
ことを云つたことが書いてあります。或は一夫一婦の、そんな窮屈なものとは信じないと
云つたか知れませんが、あちこちにこの事は書いてありますから、全然無根ではないのだら
うと思ひます。また秀吉といふ人は極くフランクな人でありますから、そんなやうなこ
とを云つたことがあるかも知れないのであります。

之に依ると豊公は耶蘇教の一夫一婦の戒を窮屈なりとして排することになつたと、宣教師
等は推測したとあるが、英雄色を好む豊公の主義からすると、窮屈に感じたに相違ない。或
る宣教師は、豊公が諸方に美人を物色するのを見て片腹痛く思ふて、豊公を諫めたこともあ
つて、それがいたく豊公の癢に障つたことがあるとも傳へてゐる。眞逆この一事を以つて嚴

なる禁令を發したとも思へない。別に大なる原因もあつたに相違なからうが、推測にもせよ外人より豊公の好色談を聞くのも一興である。英雄の心事、容易に忖度を許さないものがあるから、案外の瑣事が大事件を生むやうなことがないにも限らない。

柳 緑 花 紅

「柳緑花紅」の四字は往々割烹亭などの扁額にある有り觸れた語であるが、紅の字の國訓が「クレナヒ」である爲め、往々人に忌まれる。維新の頃、たしか鍋島閑叟が内閣員であつた時、政府が財政困難の時、閣員の俸給が支拂ひ得なかつた事もある。其時の閑叟の狂詩は全詩を思ひ出せんが末句は月給紅とあつた。これは、「月給クレナイ」と訓むので、そこに可笑味がある。頃日或雜誌に山陽が某割烹亭の爲め額の揮毫を托され、柳緑花紅の四字を揮毫すると、女將がこれは何と云ふ意味か讀んでくれと云ふので、ヤナギハミドリ、ハナハクレナヒと云ふと、女將は聞いて承知せず、花は呉れないとあつては吾々は商賣が出来ぬ。そんな看板は

眞平御免だと云ふたのには山陽は一言もなかつたと云ふが、これは多分話を面白くするため山陽の名を藉りたのであらうが、ある文人が此事を聽いて、俺が商賣繁昌の額を書いてやると書いたのも四字で「吳華越玉」と云ふのであつた。女將は此額をひどく喜んだのも道理「花をくれること玉に越ゆ」と訓めるから、頗る景氣がよいのだ。此語は「吳娃越姫」など云ふて、美人の形容語をもじつたのであるから、此語の撰者の才氣が見える。これは中島棕隠などのやりさうなシヤレだが、撰者の名を知らない。前の額の揮毫者を山陽外の人として、後のを山陽としたら尤もらしく聞えるであらうにと一笑した。

桃 の 花

桃の花は俗氣があつて自分は好まない。ナント云ふても梅の清楚に及ばない。併し桃もその處を得れば強ちあしくない。田舎の茅舎などにはこの花がよく調和する。蕪村はこの間の消息を道破し、「櫻より桃が親しき小家かな」と云ふてゐる。桃の木の枝振りは無趣味であつ

ても、それも必らずしも問ふを要しない。太祇の句に「あながちに木ぶりは言はず桃の花」とあるのは吾意を得てゐる。兎角風流人は一概に桃を貶して梅を過賞し、梅の配鳥となつてゐる鶯が、桃の木に止ると浮氣ものと難じ、年が若いから戸迷ひだと云ふが、そこに一種の情緒があつて、俗語は之を藉りて、情歌を拈り出してゐる。云く、「浮氣鶯、一二三、まだ住み馴れぬ庭づたひ、梅をば棄て、こませもの、ほうほけきやうの約束を、憎くや隣りの桃の木に」と閨怨を歌つてゐる。これは「鶯の隣りあるきや桃の花」と同巧異曲である。

夏の俳句

三伏の炎熱に堪へ兼ねて、緑陰深き處に榻を移して、漫りに古人の句を読む。夏時の句で氣に喰つたものを録すると左の如くである。

へつらへる心ぞ暑き袴かな
越人
鶏の砂にすり込む暑さ哉
風國

涼しさや額をあて、青疊
園女
寺涼み遠き鳴子の動き哉
琴風
六月や芭蕉ゆすりて露涼し
言水
涼しさを進上申す扇かな
立圃
涼しさに大福帳を枕かな
一茶
日歸りの兀山越ゆる暑かな
蕪村
一夜二夜蚊屋めつらしきにほひ哉
春武
あら暑し油しめ木の叫ぶ音
英郷
ひやくと壁をふまへて晝寝かな
芭蕉
石の香や夏草赤く露暑し
同
聲に皆泣きしまふとや蟬のから
同
端居して妻子を避ける暑さかな
蕪村
涼しさやあちら向きたる亂れ髪
鬼貫

暑き日を海へ入れたり最上川
 白山の雪きら／＼と暑さかな
 米國の上々吉の暑さかな
 てりつけて光りも暑し海の上
 あれ夏の雲又雲のかさなれば
 道はたに繭干すかさの暑さ哉
 日盛や障子に煮^ッきる蟬の聲
 乳垂れて水波む賤の暑さ哉
 破れ鐘のひゞきも暑し夏の月
 貧しさの己れを憎む暑さ哉
 松陰に旅人帯とく暑さかな
 日盛りや八百八町焔立つ
 冷風や峠に足を踏みかける

芭蕉 一茶 同 嵐雪 惟哉 許六 涼菟 尙白 北枝 淡々 太祇 子規 許六

暑き日やはつしたる戸の置所

猿 雖

猫

猫と云ふ動物は形が小さいので、よく婦女子に玩ばれるが、犬の如く主家の恩を知るでもなく、昔から評判のよくない奴だ。犬は人に慣れて野獸性が没して家畜となつてゐるが、猫はまだ犬のやうに進化せず、野獸の域を脱しないとは其道の學者の言ふことである。印度あたりでも釋迦の涅槃に猫だけは参加を許されない。其理由は薬を取りに出かけた鼠を、途中で猫が喰ひ殺した爲めと云はれてゐる。猫にさまざまよからぬ傳説のあるのは、印度傳來かどうか知らないが、猫が化けると云ふことが久しく信ぜられ、猫騷動の幾つかの物語も、畢竟猫が化けると云ふ迷信から生じたものであらう。人が死ぬと、今でも死體近く刀を抜いて置くのも、或は棺の上に刀を置くのも、猫の寄りつかぬやうにするのだと云ふて、今でも都鄙どこにもこれが慣習となつてゐる。自分の郷國越後の魚沼邊では、火葬の時に四本柱に猫を

殺して荒縄で吊し、他の柱には鎌を吊す習慣が今も存してゐる。丁度田に鳥の死骸と、弓矢を掛けると同じ意味から發してゐるのである。「北越雪譜」に越後南魚沼郡上田村雲洞庵に、火車落しの袈裟のあることが記されてゐるが、これも猫怪を或る僧が仕留めた時、其血が袈裟を染めたと傳へられてゐて、兎角猫の死體をねらふものと見られてゐるのは妙な迷信である。

猫は或意味に於て、犬よりも直接人間に接してゐる動物で、人の閨房にまで這入るものは猫の外にはあるまい。女の膝の上にも居り、炬燵の上にも眠り、長火鉢には猫板の名があるまでに猫が占領してゐる。それでゐて、まだ野獸の域を脱し得ないのは、性惡の故でもあらうか、すべての家庭に猫を養ふのは、捕鼠の爲めであるが、こゝに猫は野獸的本性を露はして、鼠を噛み且つ食ふ。犬の性は善で狗子佛性ありとも云はるゝが、猫には詐偽性があるかのやうに、俗に惡事をなして白らばくれてゐるものを猫冠りと云ふてゐる。この評判のよく無い動物の革が三味線に張られ、それが藝者の樂器となつてゐるので、或時代には、藝者は猫と綽名され、其頃には猫を藝名とした人もいろ／＼あつた。物真似で名高かつた藝人に猫八があり、戯作者假名垣魯文には猫々道人の號があり、書物の名にも成島柳北の西京の妓情を書

いたものに「京猫一斑」と云ふ書があり、又誰かの著に「猫々奇談」などがあつた。此等は皆藝妓に交渉があるからの名であるが、不思議のことには、どこの妻君も大抵猫を愛しながら、藝者の英名なる猫と云ふと皆角を立てることだ。

樂 聖 と 癡 兵

音樂學校教授萩原英一氏から近著「樂聖逸話集」を寄せられた。これにはベートヴェン、メンデルスゾーン、バッハ、シューベルトなどの、ロマンテックな興味ある逸話が多く收めてある。今左にアレキサンドル・ジエン・ポウフェルの逸話を收める。原文は長いから、節約して要を掲げる。

ある夏の日ヴェインの都のブラデルス公園に、癡兵が乞食の妾で一匹の愛犬を伴ふて、上手でもないヴァイオリンを頻りに奏してゐるが、誰もそれを相手にせず、錢一文も投じてやるものが無かつた。段々日も傾きかゝつてゐるのに、犬のくはへてゐる帽子はからで、癡兵

は既に疲れ切つて、悲愴の態度であるのを、樹間から始終この上手でもないヴァイオリンを聴いてゐた一人の紳士が現れ出て、金貨を一個帽子に投げ入れて、さて君の樂器を一寸貸し給へ、と云ふて奏し始めたが、それが妙音を發するので、癡兵も樂器が別なものであらうかと思ふ位で、益々奏すれば奏する程妙を極めて、道を行く面々も皆脚を止めて聴き入り、馬車を走らすものまでも皆集つて、こゝに人垣を築いた。中には感激の餘り貨幣を投ずるものが出てきて、群衆は吾もくんと做つて、忽ちに帽子は貨幣で埋まつた。それを看て取つた紳士は、樂器を還して立去つたが、癡兵は唯その恩に感謝するのみで、其紳士の誰かを知らなかつたが、群衆の内に知るものがゐた、それはポウフェルだと云ふたので、皆々如何さまあの人でなくてはとどよめいた。自分はコンナ逸話を喜ぶものである。

スタンプの流行

近頃紀念スタンプを捺して、蒐印譜を作ることが流行し出した。これは強ち今日始つたこととでなく、昔もあつた事で、神社佛閣のお札を集めるごときも此類であり、到る處の宿驛で、宿屋の仕切判を押させて集めたり、菓子其他の袋や商標などを集めることも、矢張り此派に屬する。千社参りの札を交換することや、世界の郵便切手を集めたり、葉巻烟草の帯を集めたり、マッチのペーパーを集めることも皆此派に屬して、間斷なく行はれてゐる。近年は蒐集帖と云ふ旅行用の帳面が特に作られ、旅行者は到る處の神社佛閣に押印を請ふて興としてゐるが、風景などの繪はがきも亦同様の役をなしてゐるもので、宿屋に備へてある繪はがきに宿屋の印を押して紀念とするのも同じ意味である。數月前散策中氣付いたのは、銀座の街頭に屋外で蒐印帖を賣りながら、四五の若い女がしきりに印を捺してゐた。吾もくんと蒐印帖を購ふて、押して貰つてゐる様子を見て、其流行の盛んなることを感じたが、實はスタンプ協會だの、スタンプ俱樂部などが出来てゐて、それがしきりに鼓吹するのである。先頃見たスタンプは東京の景色を、圓形の徑一寸七八分の木印に刻した物であつたが、其後銀座の伊東屋では、七階にスタンプ協會で陳列をやつてゐた。温故堂と云ふのが、其作つたスタンプを捺

して陳列したのを見ると實に澤山のもので、分類してあるから見安かつた。幾んどなんでもあるかと思はるゝ程多様で、皆木印に彫つたのがインキ肉で押してある。廣重の木曾六十九次の錦繪は縮刷したものを蒐印帳に貼付し、それに印を捺す趣向であるが、その六十九次の錦繪は一店に纏めて賣ることをせず、六十九ヶ店に別けて賣ることになつてゐるから、六十九ヶ所に就て求めねばならぬ。そこに蒐集趣味も絡んでゐるのだが、各店宣傳の意味もおのづから含まれてゐる。赤穂義士四十七人も同様で、四十七ヶ店に就て錦繪と印を求めねばならぬ趣向となつてゐるが、昨今協會の大會期に限り、數日間は會場で全部獲得が出来る事になつてゐるので、場内印を求めるものが雑沓を極めてゐた。場内には各店の案内記が一枚摺となつて誰にも取らせてゐる。これが各地に追々擴まり、從來繪はがきを作つたやうに、スタンプが到る處に作らるゝやうになる事は幾んど期して待たるゝ勢ひであるが、隨分粗末の彫刻に、赤インキを朱肉に代用してゐるなどは、俗氣紛々であるけれども、之が今の世相に應ずるのだと云へばそれまでゝある。日本スタンプ協會から、新聞様のものも出てゐる。各所に紀念スタンプが益々流行し、一も漏すまじと熱心に集める人がありとすれば、其多忙さは實

に思ひやらるゝ。種々雑多のものを作り、それを東京で居ながら蒐集する如きは、容易ではあるが、恐らく蒐集の本旨に背き興味のない事であらう。兎角スタンプは圖案が巧妙で人の注意を惹くものでなければならぬ。例へば小説の吹聴、芝居の宣傳、飲食店等の披露の如き、皆スタンプに依り宣傳が出来るのであるが、其スタンプは世相の趣味に投ずる迄意匠が凝らされてゐなければ、人を惹きつける譯にゆかぬ。徒らに多きを食らせるのは實は感心せぬ。

玄 關 子

いつぞや大隈會館に開いた隈門會の席に、大隈老侯の祕書たりし山崎直三氏が、大隈家の玄關子に悪評を下したのが動機となつて、玄關子に關することが自然問題となり、代るゝ玄關子に就て追憶を談じた。中には、當時の玄關子も加はつてゐたので、他の悪評に對し辯疏する所もあつた。隈門會と云ふも實は大隈家の玄關のよりつきに案内もなく這入りこみ、玄關子とは至密の關係ある面々であるから、玄關子が此會の問題となるのは寧ろ當然の事で

ある。ある時代の大隈侯は政府から謀反人扱ひを受け、間諜を入れた頃であるから、いつどんな事が侯の身邊に起らぬにも限らない時で、玄關子はなか／＼大役であつた。その頃の書生は粗暴で、佐賀の學生などと來ては、破れ袴を穿いて、先生（老侯を先生と呼んだ。）にお目にかゝりたいと云ふて、その態度が倨傲であるので、玄關子が遮ぎると、そこに葛藤が生じ、柔道の心得ある書生は執事の腕をねぢ上げたりするやうな末始で、随分物騒であつた。當時玄關子たりし會員の言ふには、あの頃は人相を見ることが最も大切で、悪相のものは皆損をしたと云ふた。ある玄關子は來客に就て語つた。加藤高明の無愛嬌は玄關で受けがわるかつたと云ひ、山本權兵衛は泥棒づらで、その人の位地を知るまでは取次を躊躇したが、侯との會見様子を見ると、玄關に立てる山本とは別人の如くで、如何にも柔かな應對振りであつたのに驚いたと語り、桂公は玄關先からニコ／＼で人をそらさぬ處があつて、玄關受けがよかつたなどの經驗談も出た。ある佐賀出身の會員は、當時大隈家の執事首座格の秀島家長と衝突したので、サン／＼の悪評を飛ばした。山本次郎兵衛（大隈家の差配）が大隈家を笠にきて、學生に威張つたのが學生の癢に障り、其妻を道に擁して川に投げこんだのが問題とな

り、警吏が寄宿舎に犯人逮捕にやつてくると、當時の舎監が股野時中と云ふ法律家であつたので、刑事訴訟法の手續を云々して、警吏を逆襲撃退した逸事なども出た。侯の玄關で誰よりも忠勤で、且つ惡まれたのは久松であつた。家扶の内此男が侯の生節で、常に随伴したが、頗る無愛相であつたけれども忠誠の男であつた。

ビスマークとヒットラー

獨乙の學生が宿醉に苦しむと、強烈なる鱈の酢漬を好んで食らふが、この酢のものを、ビスマーク・ヘリングと呼んでゐるのは、酸味の強烈をビスマークの辛辣に比するのである。今は此の酢の物をヒットラー・ヘリングと呼ぶことになつたと、獨乙歸りの人から聞いた事があるが、如何さまヒットラーの辛辣味も、先輩ビスマークのそれと似寄つてゐる。獨乙にビスマーク型の辛辣宰相が時々出るのも興味のあることだ。ビスマークの起つた頃は、獨乙の國勢が振はず、奥國の壓迫下に在つて、バラ／＼のプロシヤ聯邦でしまりのない弱國であつた

のを、ビスマークが起つてその辛辣の手腕を以つて、聯邦を統一して、墺國の羈絆を脱し、普佛の戦争には佛國を征服して、拿破崙三世をして城下の盟をなさしめた。ビスマークの廿八年に亘る長い宰相時機に於て獨逸は旭日の如く世界に輝いた。英雄一人の力は如何にも偉大なものである。ビスマーク起身の頃の獨乙は、譬へば宿醉に惱んで睡眠を貪つてゐるやうな状態であつた。それを呼び覺し、それを鞭撻したので獨乙を興隆した。ビスマーク・ヘリングは解醒劑であり、又興奮劑ともなつたのだ。ビスマークが宰相を辭してより、幼帝のカイザルは外交を誤り、遂に世界を敵として戦つて敗れた。その當面の敵はビスマークの時に膝を屈せしめた佛國で、今度は佛國にしてやられて、戰敗後七苦八苦の窮境に陥り、鐵血宰相を思ふ時が來たが、宰相は既に地下の人となつて呼べども起きず、現れ出たのが、今のヒットラー總統である。此人は鐵血宰相と辣味を同ふする英雄肌で、どことなく鐵血宰相と似寄りがあつた。その立場も略々同じで、ビスマークの起つた時より國の困憊は幾層甚しく、之を治療することは容易でない。今日までのヒットラーの成績は見るべきものがあるが、知らず益々頽勢を挽回して、舊時に復する事が出来る乎。ビスマークの長所は外交に在つて、

あの傲岸不屈の、あの直情經行の、あの無遠慮な我儘な、あの無骨な性格でありながら、誠に不似合に外交に於ては餘地があり、謙遜があり、愛嬌があり、忍耐があつて、與ふべきは與へもした、退くべき時は退きもした。あの專制的の人不似合に、外交に於て圓轉滑脱の妙があつたので、歐洲列國を操縦し得たのであるが、ヒットラー總統に果して斯る外交術があるかどうか。獨乙の學者は云く、ヒットラー・ヘリングはビスマーク・ヘリングに較べると、味が劣ると。ビスマーク的酢漬には強烈の酸味の内に、自ら言ふ可らざるうま味があつたといふれば、それは外交の妙であつたに相違ない。

ゴルデン・バット

烟草專賣局で製する烟草で、何が一番大衆向きで賣行がよいかと云ふと、ゴルデン・バットである。昭和九年度中、内地で消費したバットは約百九十二億二千萬本、之を一本に延長すると、百三十四萬五千四百粒となり、地球の周りを三十四回繞る長さである。卷烟草全體の

消費量は約三百六十四億九千萬本と云ふから、パットは其半額以上を占めてゐる。これが近年一層賣れると云ふ。其原因はと云ふと、妙なことに愛國運動の爲めだと云ふ。其譯はこの烟草の包紙が錫紙で、之を多く蒐めれば飛行機が出来ること云ふので、錫紙蒐集が到る處に行はれ、烟草を喫するならばパットに限るとされ、遊廓などでも娼婦は錫紙蒐集競争をやつてゐる始末で、客にも口付の巻烟草を買はせない結果として、大抵の小賣屋では外の烟草が餘り、パットのみが品切れとなる勢であると云ふ。愛國運動は妙な所に影響があると一笑した。

人間の欲

人間と云ふ奴は餘程の慾張りものである。肉體的に強烈の慾があることは勿論だが、この慾を達成すれば、それで満足するかと云ふとそうではなく、想像と云ふ一種肉體慾に味をつけるものがあつて、その想像のごとくならんことを求める慾望が熱烈である。それが爲めに此精神慾と肉體慾が戦つて、兎もすると肉體慾を制することがある。例へば途上で麗人を見

て恍惚として、何とかして手に入れたいと、種々想像に想像を重ねて、應じなければ斯くせんなど案じつゝ追蹠して行くと、馳て二三歩の距離に近づくと、麗人は突然振り向いて、艶然一笑、直ちに許さんとする態度を示したので、全く胸中の工作を裏切られ、餘りのアツケなさに失望し、興味も全く去つてすげなく別れた、と云ふのがジュマの『椿姫』にある趣向であるが、精神慾の肉體慾に勝つた一例である。

汽車中の珍景

モーパッサンの短篇集の内に、出稼ぎの一婦人が汽車中乳が溢れて乳房が張切り、胸苦しさに耐り兼ねて、乗り合はせた一男子、之も出稼ぎに行く大工職と自然懇意となり、その男に頼んで乳を吸つて貰ふことが書かれてある。婦人が乳汁の多いのに困ることはどこにも有り觸れた事實だが、それを採つて短篇小説に書いたのは、自分は初めて之をモーパッサンに見る。車中乳の溢るゝに困り他人の兒女に乳を吸はせることはよくある例だが、血氣の男子

を小兒の如く引きつけて、乳を吸はせる光景は想像しても奇である、左に要略を摘記する。

伊太利邊の汽車中に肥太つた二十五歳許りの女と同じ年頃の男が、どこかへ出稼ぎに行くので乗り合はせる。互ひに知らない間柄であるが、長時間對坐してゐる間に互ひに口を利くやうになつた。女の言ふには三人の幼兒があるのを妹にあづけて、遠く乳母稼ぎに出かけるのだと分つた。女が午頃携帶の辨當を食し畢ると、急に乳の張りを感じ、胸邊のボタンを外したりして寛ろぎ始めたが、堪へ難い苦悶で男に白狀したのは、餘りに乳汁が多量に出るので胸苦しくて堪まらない。誰か吸ふてくれるものがあらば、どんなに仕合せであらうと、之を聞いた男は、自分に吸はせるなら吸ひませうと云ふので、女は喜び乳をさらけ出して、宛がら小兒を引つけて乳首を授けるやうにして男を抱き寄せ、男も亦小兒の如く乳首に取付いて満喫し、一方の乳から他方の乳に移り飽まで貪り吸ふたので、女も漸く胸邊の緊張が解け、男に感謝すると、男は自分よりこそ感謝すべきだ。實は朝から一食も取らずに餓渴してゐたと白狀した。

廉潔の二藏相

後藤前藏相は激務のため病を得て職を辭し、後に其病の爲め鬼籍に入つた。自分は此人と

交りはないが、五十一歳の働き盛りに死んだのは惜しい。此人は大藏を脊負ひながら頗る手元不如意で、遺子を教育する資すらないので同情を惹き、閣員は銘々金を醸して扶助するか云ふが、職に斃れて身貧なるやうな政治家は、今は極めて珍らしい。自分は後藤藏相の死を聞いて、亡友早速整爾氏を思ひ出さずには居られない。彼も大藏大臣在職中激務に斃れた。彼は頗る勤勉であり、且つ清廉であつた。彼は病が重くなるに隨ひ、益々勤勉であつた。早く妻を失つて一女あるに過ぎず、あの官舎の廣い所に、一人ボツチ居つて形影寂然たるものがあつた。おまけに赤貧に近い貧所帯で、碌々交際も出来ないやうな氣の毒の境界であつたから、友人が見兼ねて、千圓ばかりづつ十人程が持寄つて助けたこともあつたが、惜しいかな、これも案外若くて死んだ。大藏の事務は眞面目にやれば身を殺すに足るの劇務である。兩人の性格は同一でもないが、其運命に同じい處があつて、吾等は兩人の爲めに悲しみを禁じ得ない。

天王寺屋

今は昔、大阪に天王寺屋五兵衛と云へば日本一のミリオネヤで、その隣家にも平野屋五兵衛と云ふ金満家があつたので、兩家の間の小路を十兵衛小路と云ふた。先考の談に、天王寺屋は聞きしに優る大富豪で、鴻池でも加島でも、その庇陰に由り大をなしたものである。當時鴻池が出した通帳には、天王寺旦那様と認めたものと云ふ。天王寺屋破産の後、家財を入札に附した際には、自分の母方の祖父が恰度大阪に居合して、其入札を見たと言ふが、ある名器(茶入)が三千五百兩で加島屋に落札した。加島屋は親族故舊を會して、忝しく此器を拜觀し、直ちに其品を天王寺屋へ返還し、聊か舊恩に酬ひると挨拶をしたと云ふ。

陶工木米の戲號

陶工木米は青木八十八と稱し、米字は「八十八」であることは誰も知る通りだが、彼に百六の戲號のあることを初めて知つた。この名づけ親は、才人中島棕隠で、米字の八八に木の字の十八を加へれば百六となる。棕隠はコンなことには縦横の才があつて、山陽も常に一目を置いた。

捕螢の笑話

夏時汽車で近江の琵琶湖の處を通ると、停車時間に螢を賣りに來る。風流なものだから買つて家に持歸つたこともある。近江は螢の産地で、今宿と云ふあたりには、大きな螢問屋があつて、年々其季節に盛んに近郷へ輸出すると云ふが、嘗つて捕螢の事を聞き今でも忘れられないのは、螢の捕手は蚊帳の裂れで作つた袋を携帯して出かけるのだが、餘りに螢が多く群つてゐて、一つ／＼採る毎に袋に入れてゐては時間が潰れるので、採るに随つてそれを口中に含む。漸く口中一杯になると袋の中に吐き出す。其状は全く鵜が香魚を呑んで後に吐き

出すと同じであると聞いたことがあるが、ある動物學者の話に、米國は螢の多い國であつて、墓が之を好んで喰ふので、腹中に入つた螢の放光が、墓の皮を透つて薄明るく見えるのを兒童は喜び、盛んに捕螢をやつて墓に御馳走をして、その腹中の明りを見て喜ぶと云ふが、人間も腹に多く詰めこんだら、或は墓燈籠のごとき生燈籠が出来るかも知れないと一笑了した。

花 彩 島

日本帝國に蜻蛉洲の名があるが、果して蜻蛉に似寄つて居るかどうか。北は樺太南は臺灣が屬島となつた今日の形は、蜻蛉に擬らふことは當らないやうである。此點になると西洋人の比喩が遙かに日本島の美を發揮してゐるやうに思はれる。西洋の學者は日本の列島が亞細亞大陸の東邊に連珠形に列つてゐるのを、フェストーン (Festoon) に擬してゐる。フェストーンは日本の七五三節の如き形に花で作られ、祭典の時壁に掛けるものであつて、其美麗なる點

に於て、その神聖なる點に於て、決して厭ふべき比喩でなく、日本列島は確かにフェストーンに似て居るから、寧ろ花彩島などと云ふべきであらう。

案 山 子 傳

私は近年案山子に興を感じて、さまざまの詩畫を集めてゐるが、詩もあり歌や俳句などもあるが、文章がないので需めてゐると、偶々廣島から勤王家星野文平著す所の『著山集』を寄せられたのを読むと、中に案山子傳一篇を得た。喜んで爰に鈔録し多少の註脚を施す。

案山子者蜀人也、其先則蜀人（案山子は百姓より出づると云ふ。）善張疑劫兵敵、北條氏之圍楠公金剛山、蜀人率其族被甲、夜列城下、城兵伏、其後立殺賊五百餘人、楠氏既微、蜀人久不用於世、赤松氏之叛室町、據白旗、山名氏固聞蜀人能召之軍、則跨牛而奪法華山之險、遂滅赤松氏、其後或用於戰國、（こゝまでは歴史上の事實を擧ぐ。）其隱歎者乃爲案山子、（以下歸農後の案山子を云ふ。）案山子、不甲、不介、戴破

笠、穿_レ敗_レ蓑、恟々如_レ農人之狀、時天下既平、朝廷方勸_レ農桑、而戶口歲滋、荒墟廢邱、獨墾_レ闢、而獨苦_レ鳥獸之害、禾黍_レ也、則請_レ案山子、案山子、性固喜_レ弧弓挾矢、是以善爲_レ民威、鳥獸_レ鳥獸無_レ敢近_レ民田、(案山子の性能を云ふ。)民皆大喜曰、案山子之能勝_レ鳴子、鳴子者、世不_レ知_レ其名氏、但以_レ其鳴號驅_レ鳥雀、故稱焉、然鳴子非_レ有所_レ馮持、無_レ以鳴號、鳴號亦必待_レ人督之、故民最能_レ案山子、案山子、能從人所請、雖_レ汚淖深泥人所_レ憚_レ行、無_レ不奮而往、果木之顛、深林之表、皆所不辭、盲風苦雨、震電霹靂、衆皆失色、而案山子獨已兀然不移也(案山子と鳴子の優劣を説き案山子の長に及ぶ。)余曾遇_レ案山子于野_レ矣、案山子、野服蕭然、挾_レ矢于田間、有_レ古農兵家之遺風_レ也、因謂案山子其先以_レ武顯_レ世、而今幾時矣、吾觀_レ世所謂甲介之胄_レ者、靡衣而素餐、不_レ復_レ知_レ兵農艱何事_レ嗟乎、此聞案山子之風、宣愧死、而世反安之、以爲當然、而案山子獨不_レ重於_レ世、世亦以是易之也、然案山子竟默而不言云(作者感慨無量)。

菓子屋の一見識

日本橋の本石町三丁目に田月堂と云ふ菓子屋があつた。これが菓子の製造に一见識があつたので評判を博した。普通菓子を製するには、繪の具を以つて種々の色づけをするが、此店は昔から絶對に繪の具を用ひず、天然の物から色取りをやつたので、其製品は俗氣がなく、如何にも高雅であるので茶人などに喜ばれた。尙此家の一見識として葬儀の菓子、法事の饅頭などは、假令如何なる大得意から注文があつても應じなかつた。亦歳晚の賃餅なども決して搗かなかつた。此家の菓子は較々不廉であつたが、其代り非常に持ちがよくて珍重された。

山陽の狎妓閨怨詩畫卷

山陽翁の友人春琴、小石龍等が、翁の狎妓美娜に寄せたる閨怨の詩卷は、余先年一覽し、

隨筆に收めて置いたが、此卷池上秀畝氏に歸し、頃日人を介して余の題匣を求められたが、乃ち諾し、且つ左の一簡を添へた。曩きに見し時、不明の筆者もありしが、それが今分明し、又詩卷の外に山陽、春琴の戲筆の帛紗も添へてあつて、一段の興を覺えた。

拜啓御示しの卷軸は頼翁の祕事を語る稀有の佳什と一興を覺申候詩卷收むる所は卷首に美人の像あり。栗浦小石龍狼仙各々閨怨の詩數首を記す。狼仙の識證に依り、山陽の愛人美娜、翁廣島歸省後空閑を守るに同情し詩を寄せて慰めたることを云々す。予前年此書を見て拙著隨筆に収録せしことあり。其際は小石龍の外は琴浦狼仙何人とも知り得ざりしが、今他の一軸の琴浦の印に選の一字あるに依り浦上春琴なること分明致し候、卷中の畫も詩もこれに依り一段光彩を發し候。狼仙は未だ何人たるを知り得ざるも、或は海仙にても有之候歟。書風も較々似て居るやうにも存じ、他の一軸は小生初めて寓目のものに候得共、翁と春琴合作の用箋は八ッ橋の綸子を用ひあれば、或は帛紗か羽織の裏地などにもあるべきか。詩畫共謎語を落款に用ひ居るを見れば、酒間妓の爲めにせし戲畫とも思はれ、或は

美娜遺愛のものらしくも思はる。何の道、一卷一軸併せ觀れば一層興味を發し、頼翁攀柳當時も偲ばれ申候。文苑には往々這般の佳話存するものあれども、儼然詩畫の存するは甚だ稀也。此卷此軸誠に離る可らざる姉妹の關係あり、併せて珍藏さるべきものと存候。拜見の餘貴命に應じ匣面に拙字を題し、併せて愚感を申述候。頼翁知るあらば破顔か苦笑か、後學の酒徒灘釀を灑ぎ翁の艶福を祝せん歟。呵々

季節と掛物

普通床にかけ幅を選ぶに、其季節を標準とする。夏期に冬の雪景の畫幅をかけるを笑ひ、冬期に夏景山水をかけると物知らずと云ふて嘲ける。斯如きは常であるが、『槐記』に近衛公が山科道安に教へてゐるのに據ると、年月の書き入れてある幅は、其季節に掛けてよいが、夏は冬のもの、冬は夏のものを用ひよと、恰かも普通の恒例と、反したことを教へてゐる。これは畢竟冬には暖かい思ひを起させ、夏には涼しい思ひあらしむべし、といふ利休あたり

雪の日の塵

の説に基いたものであらうが、事實、雪の日に雪景の圖をかけるのは重複で、秋の夕べに秋景圖をかけるのも亦重複である。宛がら竹の多くある家に竹の幅をかけたたり、松の多い屋敷に松樹の幅をかけるのを忌むを一般であると思ふ。

讀書の境地

昔九州の某藩の儒者は、永く心懸けた佳書を得た時、大いに喜んで、這般の佳書は俗地で讀むべきでない、藩に暇を請ふて、箱根の清閑の地に、十數日讀み耽つた事がある。一寸奇矯のやうであるが、讀書には確かに境地を選ぶ必要がある。騒音の喧しい市井でシンミリ書物に親しむ事は不可能である。讀書の場所は氣の散らない所で無ければならない。學校は讀書の場所となつてゐるが、教場のやうなザワ／＼した處は讀書には好適の場所では無い。由て多くの場合學校に附屬して圖書館があり、校外にも獨立の圖書館があつてそこは騒音を絶対に禁じ、椅子テーブル等に至るまで清潔を旨とし、居心地のよいやうに出來てゐる。學徒が就て讀書すべき境地はこゝである。曲亭馬琴の小説の批評家として知られた、讃岐高松藩の家老木村默老と云ふは、騒音の讀書を妨げる事を厭ふて、大きな鳥籠やうの物を作り、息ぬきだけ明けて紙で貼りつめ、中に小机と燈火を置き、その中で讀書したと云はれてゐる。

如何さまこれも一つの工夫である、本居宣長の書齋は二階にあつて、讀書や著述中は、人の上り得ぬやう段梯を外したと傳へられてゐる。讀書家の最も厭ふのは俗用を帯びた客人が、頻々と來て讀書を中断せらるゝことである。種々の立志傳に、物置や倉庫に隠れて本を讀んだと云ふ苦學談があるが、讀書家は斯くまでして妨害を避けてゐる。讀書には清閑が必要であるのみならず、多くの時間の連続が必要である。そこで或人は温泉場を選び、或人は病院を選び、或人は當直の時を選ぶ等、區々であるが、温泉場の長滞在、入院や宿直の無聊を消す爲め、讀書に耽るのもよい方便である。

獄中なども、獨房に居れば讀書の好適處である。易斷で知られてゐる高嶋吞象は、獄中で易を修めた。彼は自分の運命を占ふため、易の研鑽を初め、長い間の攻窮で得る所があつたと語つたが、死活の岐路に立つての懸命の研究であつたから、會得が出來たのであらう。頼山陽は若い時座敷牢に入れられて、詮方なしに歴史を修めた。あの長い禁足が無つたら、或は『日本外史』は出來なかつたかも知れんのだ。自分なども筆禍に罹つて入獄した時、許を得てヒスクの哲學書を携帶した。此書は二書で二千頁もある浩漭のもので、到底數月の暇が無け

れば讀過の出來ないものであるから、獄中の讀み物として選んだのであつたが、どうにか讀過したのは、他に何物も讀むものがなく、専ら之に没頭したからである。

旅行の船車の中も讀書の好適所である。旅舎も亦同様である。長時間語るに人なき汽車や船中に、何が寂寞を破るか云へば、書物こそ好伴侶である。平生讀んで何等感じないものも、斯る場合に讀むと、ヒシ／＼と感ずることがある。畢竟氣が散らず一心に讀み、且つ味ふからであらう。旅舎に數日滞在する時、孤鶩蕭然として、默讀靜思するとシミ／＼書味を感ずるのも、一書に専らで他の妨げを受けないからであらう。旅中に携帶すべき書物は何にても人々の好む所でよいが、要は多くの書を携へないことである。多くの書を携帶すれば、氣が移つて專なることを得ない。可成は一書に限ることだ。

姉崎正治博士は、内外の旅行に必らず詩歌の本を携へるを常とし、騷旅匆々の場合は、簡単な讀み物に限ると云つて、漢詩を和歌に譯するのを旅情を慰める一法として居らるゝが、詠歌は實に達者である。汽車旅行などで旅客の出入の頻繁である時などは、詩歌の如き簡單ものが最も適した讀みものであらう。併し旅行それ自身が讀書の如きもので、到る處の風物

に接すれば見學で得る所が多い。但し見學を助けるには多少の書物が要る。地理歴史が第一必要である。土地の形勢やその歴史を知らねば何の感興も起らない。吉田博士の『大日本地名辭典』等は地理歴史共に備はれる好著であるが、老大の本を携へるのが不便であるとして、或人は、幾十冊に分冊製本して、必要の分を鞆に携へる工夫をしたが倣ふべきである。地誌ばかりでなく、アソシエイテッド・ブックを携帯することも必要である。例へば水戸行には義公烈公の著、信州行には象山の著、備前行には熊澤蕃山、と云ふやうに、其土地の名家の書を携へ、其土地で讀むと一段の感興を覺える。

宣教師牧師などが、如何なる場合でも聖書を携帯してゐるが、論語通の澁澤子爵は、どこに行くにも論語を離さなかつた。いつぞや避暑地に訪ふた時も、温泉場に訪ふた時も、几案の上にチャント論語が上げてあつた。多くの書物の内、己が最も信頼する書物を離さないのもよい心掛である。

自分は青年期の事を此場合追憶するが、田舎に於て夏期に曝書をやるので、數日二三の座敷一杯に書物を曝らすことを例としたが、これが童心に此上ない愉快のことであつた。自分の家にどんな書物があるかを知るのは此時であつた。自分は漫りに好む本を捜し出して、曝書の間に横臥して讀んだことだが、曝書期も、實は讀書の好適期と云つてよい。自分は又圖書館の經營に當つて見たが、書庫にいる／＼の圖書を漁るのも一興であつた。考證などをやる學者の、特に必要とするのは、書庫に入り自在に圖書を漁ることである。カードや書目などで書名を検して借り出す煩ひを避け、自ら書庫で検索すれば何でも出て来る。半日も書庫内を右往左往に検索をつとめれば、大抵目的を達し得る。これも亦讀書の一境地として漏す可らざるものだ。

鷗外の『北條霞亭』を讀む

森鷗外の『北條霞亭』を一日讀んだ、此書は細活字で組んだ四百頁にも垂んとするもので鷗外が伊澤蘭軒の傳を物した其後に執筆したのだと云ふから、極めて晩年の作である。蘭軒の傳は年餘の長きに涉り東京日々に連載され、新聞社も讀者も迷惑したとの評判もあつたが

鷗外は平氣でそれをやり通した。この霞亭傳も似た様なもので、考證が如何にも周到であるが、如何にも讀んでうるさみを覺えるものである。全體伊澤蘭軒にせよ、北條霞亭にせよ、世間に知られてゐる人でない。鷗外には此等の人の経歴に、何等かの譯で趣味があつても、世間では風馬牛の如く思はれる人々であるのに、どこまでも徹底的に考證せざれば止まぬ鷗外の氣根は凄いもので、霞亭の傳を讀みながら、自分はそれをつくづく感じた。自分は略々霞亭の事蹟を知りながら、四百頁に近い、細かな考證を讀むのを苦しく感ずる位であるのにこれが好著として、廉價版文庫に納められてゐるのは何故であらうか。コンナものが價の廉なる故を以つて、多數の人々に讀まる、プロパグンダがありとも思はれない。鷗外の高い文名が、コンナものでも人に讀ませる魔力があるであらうか、自分は不思議の感なきを得ない。併し自分は、窃かに鷗外の精力に感服するものである。誰でもが、鷗外の如き文人に、據つて考證され其傳を明かにすることを得ば、實にその人々の仕合せである。

鷗外が若し世間受けのよい古人を捕へ來つて、其傳を書くのなら、幾千頁の紙を費しても不思議とも思はないが、唯自分が思ひ寄つた人々を、斯くまで深く探究することは、あの人

でなくては出来ぬ業だ。これは勿論あの人凝り性に因るのであらうが、文學界に傳記の範を示したものと見ることが出来よう。多く窮めずして、匆卒に杜撰の著をなすものに對しては、確かに頂門の一針である。

鷗外が此書を著すに就て、材料をどこに得たであらうか、著者の言ふ所に據ると、霞亭の郷里的矢に存する一束の書牘が材料であるやうに云ふてゐる。著者は此等の書牘の年月を究めたり、書牘の内容を活かすことに力めて、瑣々たることまで擧げて居るので、煩に堪へないことは前にも云ふたが、しかし書牘の保存が、如何に後日になつて大なる役をなすかは、此傳に依つて最もよく領づける。自分も曾つて多くの古簡を蒐集した頃、書簡保存の必要を論じたこともあるが、これなどは其好適例であることを今更らに感ずる。鷗外自身も、左の如く云ふて人の嘲りを解いてゐる。

わたくしと雖、猥瑣の甚しいのを知つてゐる。この篇を讀むことを厭はぬ少數の好事者も、定て鄙意の存する所を知るに苦しむであらう。しかしわたくしは年次なき我國の古人の書牘を讀む法を講じてゐるのである。そして講究のメカニズムの一隅を暴露して、人の

観るに任すのである。この講究の有用無用はわたくしは問ふことを欲せない。世に偶無用の人があつて、好んで無用の事をなすも亦、必ずしも不可なることは無からう。

前年濫江抽齋を傳した頃、一文士は云つた、森は斷簡を補綴して史傳を作る。斯の如きは刀筆の吏をして爲さしめて足ると云つた。是は容易く首肯し難い。且つ廣瀬旭莊の語を借りて言はんに、史館は正史を修むる所である。簡史を修むる官廳は無い。縦ひこれを設けられたとせんも、吏胥の間、忍んで斯の如き事をなすものゝ有りや否は疑はしい。わたくしの此言をなすが、官廳に於て有用の事が等閑視されてゐると云ふ意でないことは固よりである。

私は此書の内容に立入り、霞亭の學問や菅茶山との關係等を吟味することをせぬ。ただ霞亭の書牘を多く讀んで感ずることを聊か書いて見たい。

私は學者達の多くの手紙を讀んだ経験があるが、霞亭の如きは、國字牘の最も上手の部に入らねばならぬと感じた。家に寄せる書牘だから皆家庭の内事について瑣事に涉ることが多いのだが、書牘の巧拙は最も此等の書牘で判じ得らるゝものである。天下國家の大事を論ず

るやうな手紙は割合に書き易いものである。すべて理窟を説く手紙は左まで難いものではない。戲言を筆にし談話を弄する如き手紙も、割合に書き易いものであるが、平々淡々起居を問ひ、日常のことを報じ、両親の健康を案じ、家族に種々の注意を與へなどする書簡は、最も書きにくいもので、兎もすると素然白湯を呑むの感あるが多いものであるが、それは畢竟文が拙く、筆に情がこもらないからの事である。霞亭の手紙を讀んで見ると、どれにも情味があつて、人をして飽かしめざるの妙がある。どの手紙も決して奇警の筆を振つてゐるのではない。強いて人の興を喚起せしむる如き、殊更らしい處がない。唯平々淡々たる所に、嚙みしめて味はゝねばならない所のあるのは、行文の妙にも據るが、情味が溢れてゐるからであらう。學者の手紙には、往々艱澁の文字などがあるのは寧ろ普通と云ふてよいが、此人には決して斯る缺點はない。山陽などは何れかと云へば才で書くので、受信者をして必然興趣を感じしむるやうに書いて居るが、霞亭のはそれとは選を異にして、どこまでも平淡でありながらどの手紙もソツの無いのは、國字牘の最も上乘なるものとして自分は推奨したい。霞亭は両親に孝なる人であり、弟等に悌なる人であり、友人には厚い人であつたことが手紙

でよく知れる。弟を教育するに最も力を入れた事も、一身の重事を父母并びに家庭に圖らずして専決するやうなことの無つたことも、亦手紙でよく知れてゐる。斯る人によつてこそ家庭の手紙がよく書かれるのも不思議はないのである。手紙ほど其人の性格をよく語るものはない。自家を描く偽らざる記録は手紙である、殊に家庭の手紙である。

『續良寛さま』を讀む

相馬御風氏の良寛さまに忠實なる著述は、これまで種々あつて、盛んに讀まれてゐるが、此頃又『續良寛さま』が出版された。これには七十餘件の逸話が收めてあつて、優に一冊をなしてゐる。自分は一讀頗る興感を覺えた。逸話の中には、自分が幼少の頃、吾家庭でお伽噺として聞かされたものも少くないので、思ひ出も深い。

今になつて考へるに、良寛師は不思議に多くの話を残した人だ。大雅堂などにも多くの逸話はあるが、良寛師はそれに較べると一枚上かも知れぬ。

大概偉人の言行は、後になつて崇拜者に依り根掘り葉掘り、咳拂ひやクシャミの微に至るまで、ほじり出されるのが常であるけれども、良寛師のは崇拜者の後日の勞を待たず、生前早く一顰一笑の瑣事まで數多傳へてゐた。

やれ良寛さまは虱を落して行つた、やれ良寛さまは杖を間違へて行つた、坊主の癖に魚を喰つた、やれ大切の屏風に落書をされて困つたと云ふやうな、奇矯と云ふよりは無邪氣な逸事が多いが、中には人に迷惑をかけた失敗談も少くない。普通の場合閑却されさうな瑣事や片言隻話が、妙に傳はつてゐるのは、あの僧は名門の出であつて、乞食の姿であつても、俗衆にまで尊敬さるべき何物かゝあつた爲めであらう。

良寛師の主なる言行は既に正篇に收められ、續篇には其こぼれが拾ひ上げられてゐる。

この落こぼれは所謂昆岡の遺珠で貴い材料ではあるが、まだ磨きのかからないものである。それが幸ひに良寛研究の第一人者に拾ひ上げられ、丁寧に磨かれたから、だん／＼燦爛たる光を發揮するに至つた。自分などの感服するのは、行文の溫藉秀麗であるのは言ふまでもな

いが、殊に喜ぶのは良寛師の心持が、どの篇にもあり／＼と現れてゐることだ。

師の事とし云へば、何から何まで頭にある著者の執筆に係るから、一點附會らしいことなく、又無理な敷衍と思はるゝ所が微塵もなく、如何にも素直に師の心事を描して、宛がら師自身の語るを聴くの思ひあらしむるのは、著者の老腕に依るのである。

著者は又往々、韻文を交へて師の情緒を叙してゐるが、これも亦著者獨特のもので、他人の追隨を許さない。著者は、僅かに一行の遺簡や、口任せの和歌俳句にまで、其由來を註して一佳話となしてゐて、どれを讀んで見ても興味に陶醉する。

輕々に讀み來れば、平澹なるお伽噺に似てゐるが、仔細に味へば、天真流露の挿話に哲人の至理が寓されてゐて、名僧を敬慕せしむるものがある。而も著者は、一切理窟を抜きにして、讀者の判断に委してゐる所に餘韻があり、自分が兼て著者の老腕に服するのは、専ら此點に存する。

良寛師の重なる事蹟を収めた正篇は、何かと云へば寧ろ叙し易く、此續篇は叙することが

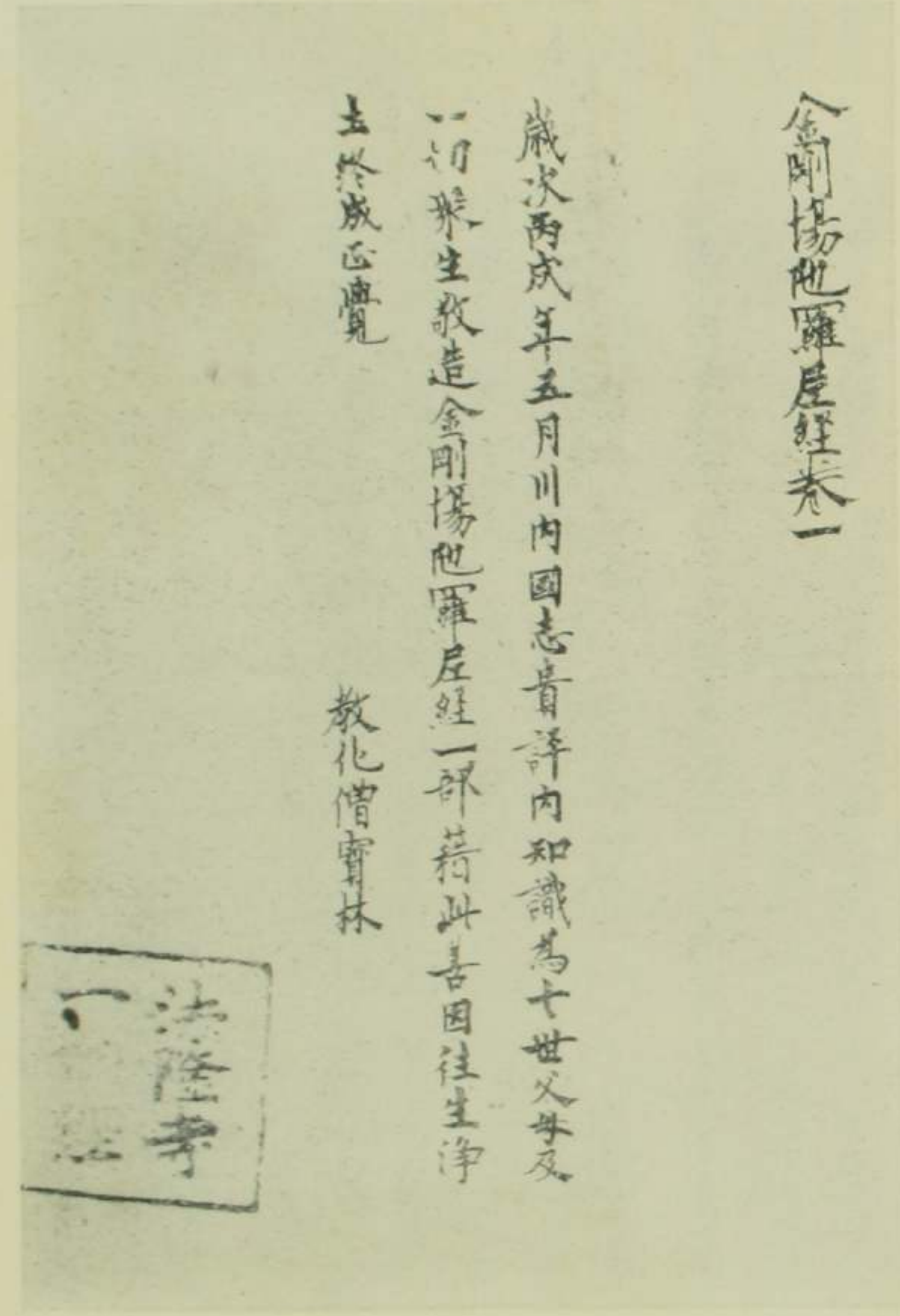
金剛場陀羅尼經卷一

歲次丙戌年五月川内國志貴詳内知識為十世父母及

一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部藉此善因往生淨

土終成正覺

教化僧寶林



甚だ難い。著者が長年研究を積み、筆が老熟の域に達したればこそ、此成功を見たとき自分は考へる。この續篇は正篇に比して、優るとも決して劣るものでない。

實を云へば、正篇にある事蹟は御風氏を煩はさずとも傳はるであらうが、續篇の零碎の瑣事は、御風氏ならでは其神を傳へ得べしとは思はれない。私は、吾郷國の名僧の爲め、重ね重ね好著の出たのを喜ぶ。

金剛場陀羅尼經に就て

此寫經は白鳳時代の筆寫で我國では最古の寫經である。此經の跋文を見ると左の如く書かれてゐる。

歲次丙戌年五月川内國志貴評内知識爲七世父母及一切衆生敬造金剛場陀羅尼經一部籍此善因往生淨土、終成正覺

教化僧寶林

此經を鑑して白鳳時代の筆寫とする理由は、第一跋文中志貴郡とあるべき所に、郡の代りに評の字の用ひてあることが主なる理由である。評はもと朝鮮の行政區劃で、日本でも嘗つて朝鮮に倣つて郡を評としたことがある。その實證の金石に存してゐるのは、自分の知る所では、二つ現存してゐて、二つ共白鳳時代のものである。即ち一は奈須國造碑で、他の一は大和の法金剛院の鐘銘であるが、共に郡とあるべき所に評の字が用ひられてゐる。尙、大和の長谷寺は白鳳時代の建立に係る寺だが、そこに置かれてある世に千佛塔と稱する銅の臺座に刻された書の體が、全然此經の書體と同一で、干支まで同じであることを考へると、これが第三の傍證となるやうに思はれる。

この經を天平以前のもとの考へる理由の一つは、其書體の天平時と全然異なる點にある。天平時代の書體は、何人も知る如く柔軟であるが、これは頗る剛健の體で、往々八分フツを交へてゐる書體を見ると、一目して天平經と同じからざることが直ちに會得される。乃ち此特徴も白鳳と鑑せらるゝ所以の一である。

年代記を案するに、白鳳は天武天皇の御宇で、前朝には天智天皇弘文天皇の御宇がある。

天武天皇は人皇四十一代に當らせらるゝ。此經にある干支丙戌は、朱鳥と改元された過渡で、四年間皇后が稱制されて四十二代持統天皇の御宇となるのである。これより天平に至るまでには、大寶、慶雲、和銅、靈龜、養老、神龜の年號を経るのである。此間實に四十五年、丙戌白鳳は支那の唐時代で、武后の活躍期である。

寫經は天平頃からのが多く存してゐるが、それより前となると和銅の寫經が最古とされたことがあつた。然るに白鳳寫經は和銅よりも古いから、此寫經は今存してゐるものゝ内で最古のものかも知れない。これ迄度々寫經の陳列會もあつたが、この寫經よりも古いものは出たことがない。二三白鳳以前の經卷が或る所に藏してあるが、それは支那寫經で日本寫經では無い。尙此寫經の姉妹卷に就ては、今後稽査の餘地あるやうに思ふ。自分の知る所では、會つて岩淵の別荘で、田中青山伯に示された寫經は、此經の姉妹卷であるかに思はれた。全く同筆であつたが、惜しいことに四尺許りの斷簡で、島田翰の藏記があつた。伯は自分所藏の最古のものと言はれたが、白鳳經とは思つて居られなかつたやうである。姉妹卷が右の如くあるにしても、それが切斷されてゐるから完璧のものは、或は此卷以外存在しないかも知

れん。兎に角此卷は完璧であるのみならず、題跋が立派に具備してゐるから頗る珍とするに足るものだ。

此經卷の來歴に就ては、紙の織ぎ目に法隆寺一切經の印が捺されてあるので、同寺の藏什であることが知れるが、今より廿數年前、此經卷を上方の或る僧が、下谷池之端の琳琅閣に持ち來つて賣つた頃は、自分が早稻田大學圖書館の爲めしきりに圖書漁りをして、琳琅閣を訪ふた時分で、此卷と共に琳琅閣の手に落ちたのは、今早稻田の圖書館に藏され、近年國寶の籍に入つた六朝寫本『皇侃禮記義疏』の一卷であつた。これには卷尾に皇明皇后の御印と傳へらるる「内家私印」の印が捺してあるので、識者の注意を惹き、時の清國公使黎庶昌氏が購はんとする間一髪に、田中青山伯の手に歸して外國に持ち去らるゝことを免れ、其後に田中伯は早稻田に寄附されたのである。これと同時に此經卷は、卷末に附箋して天平某年と註してあつたので、餘り人の注意を惹かなかつた。自分は之を白鳳經と看破し得なかつたが跋文の志貴評の評の字を異様に感じ、其書體が天平書體と異なるので食指が動き、天平經としても破格のものとして購ひ入れたのが自分の手に入つた所以で、或る時帝室博物館附の一二

の學者が自分を訪ひ來つた時、出して示すと、彼等も白鳳とは喝破しなかつたが、頗る研究を要するものとしたから、それを交附して研究を依頼すると共に改装をも托したが、後に至り終に白鳳經と鑑定された。

自分は此卷が國寶に登録さるべきものと知りながら、其頃大阪の安田銀行にゐた友人小川簡堂が、しきりに古經を蒐集してゐる時であつたから、其懇請により割愛したが、前に掲げた長谷寺の佛座の銘と同筆であることを主張したのは、故内藤湖南氏であつた。長谷寺は伴信友が白鳳以後の建立と考證したことがあり、久しく疑義の間に彷徨したが、三宅米吉博士が其誤りを正してから、白鳳の建立に係るものとして動かないものになつた。信友の考證に用ひた『扶桑略記』は誤謬のある惡寫本であつた事が、三宅博士により看破されたのである。

序に云ふが、經には種々の種類があつて、天子皇后の勅願の經や、個人の願經もあるが、これは跋文を見ると、知識團體の願經である。即ち僧侶の願經であることを附記して置く。

又筆者は恐らく當時の寫經生の第一であつて、多分支那人であつたらうと想像される。

尙、内藤湖南氏が「書藝」の書道春秋時代號に此經に就て書かれた文には一詩が録されて

ゐる、参考の爲め左に採録する。

金剛場卷幾曾緋

朱鳥遺經甲子存

銘刻更傳千佛塔

小歐書體赫清原

小川氏尙簡齋の藏する金剛場隨羅尼經は、卷尾に「歲次丙戌年五月、川内國志貴評内知識敬造」と記してゐる。書は分意を帯びて甚だ唐の歐陽通の書に似てゐる。また大和長谷寺の法華說相圖銅版は、世に千佛塔と稱せられる。銘文に歲次降妻漆菟上旬の語がある。降妻は成年、漆菟は七月、乃ち成年七月上旬のことで、書法は全く此經に同じ。恐らく同一人の筆になるものであらう。思ふに何れも清御原朝朱鳥元年に製するものである。

郷男の印癖と松石山房

日本で支那の名印を多く蒐集した人は、古今郷純三男に及ぶものはない。不幸にして其印は大震災で亡びたが、印譜は存在してゐる。男の蒐集事蹟は後世に傳へる價值があると思ふ

が、幸ひに自分の雜録中に其大略が記してあるから、こゝに抄録する。

郷男自ら語る所に據ると、早くから印の趣味があつて、二十八歳の頃長崎奉行志摩守に附いて、長崎在勤中二年間程印人小曾根乾堂に就て篆刻を學んだので印の趣味を覚え、維新後何時の頃か、町田久成の所藏の古印二百顆を買ひ求めたのが、古印蒐集の始りである。此町田の所藏の印には誇るべき來歴がある。清人汪梅庵と云ふものが道光の亂を避けて、長崎に暫く居たが、追々衣食に窮して、その珍藏の印を手離さねばならぬことになつた。その頃長崎奉行の下僚に大坪本左衛門と云ふ人があつて、一括して其印を購ふたが、此人も後には賣らねばならぬ境界となつたので、申井敬所を介して町田久成の有に歸したが、久成が僧となつてから、あらゆる趣味慾を抛棄したので、男の手に移ることになつたのが來歴である。男は追々名印を寄せ集めたが、満足がし兼ねて、長崎人で鐵翁の法嗣である瑞巖と云ふ人に千圓の金を付して、年々支那に特派して古名印を漁らしめた。其内に楊惺吾が日本に來た。此人は書物の通人でもあり、又金石家でもあつた。彼が齎らした銅印は、秦漢六朝、元明に至るまで澤山の數で、且つ精選されたものであつたが、郷男の食指はしきりに動いたが、楊は

初めは割愛を肯じなかつたが、遂に男の有に歸した。それから男は益々蒐集して二千顆の多きに迫んだが、支那の汪敬淑の集印に比して遜色のないものであつたことは、その印譜を見ても首肯される。震災前に三十萬圓で外國人で買手があるなど噂されたが、それが震災に罹つて亡びたのは如何にも惜しいことである。印譜は『松石山房印譜』六卷、同續集八卷『隨意莊印朕』四卷『法眼居印賞』四卷で、『飛鴻堂印譜』に比して決して劣らないものである。

名家私印の保存に就て

私が骨董に趣味をもち、いろ／＼の物を寄せ集めた頃、文房具も相當に集めたが、此部類で私が主力を置いたのは印章であつた。印章ほど多方面に興味のあるものはない。亦これほど高雅のものはないと考へた。

勿論最初は佳材と佳刻とを主として漁つたが、往々名家の氏名雅號を刻した印に觸れる事とがあつた。大體他人の氏名を刻した印等は、概して印材を活かす丈が目的で、骨董商など



尾藤二洲印
高美蒼刻銅印



川路聖謨印
佐久間象山刻



卷菱湖印



同上



狩谷掖齋印



同上



關老間部松堂印



同上

は刻字に注意を拂はず、印面を磨して賣品とすることが幾んど通例であるが、金属の印になると、金銀材は溶解して地金としても價はあるが、銅章は價がないから、其まゝになつてゐる。木印にも黄楊や紫檀などがあるが、これも概ね助つてゐる。水晶印も磨りにくいので多く助かつてをる。

自分は曾つて銅印で「薩摩政府」の印と「水原縣」の印を得たことがある。薩摩が幕末に藩と云はず、政府と云ふた事實がある。水原縣は新潟縣に先だち縣が置かれたことがあるが之は其際の官印である。又木印では水戸の支藩の守山侯の「觀濤閣」の印、三顆を得たことがある。守山侯は徂徠門人で、其著に『論語徵集覽』があつて、此印はそれに用ひられてゐる。自分は偶然此等の印を得たのが動機で、人の私印に注意を拂ふことになつた。

思へらく、他人の私印は使用に堪へないが、さればと云ふて漫りに磨り潰すべきではない。例へば雪舟とか、探幽とか新井白石の印などに遭遇したとしてどうして、それがムザ／＼磨り潰されようかと。自分は斯様に感じてから、誰の私印か知り兼ねるものでも架中に置き、徐ろに其氏名を調査すると、意外に高名の人の私印であることが知れたり、其刻者が高芙蓉

の如き名手であつたりすることがあつて、後には専ら名家の私印蒐集に没頭するに至つた。

著名な人の私印は、自分ばかりでなく他人も珍重するが、或ものを手に入れるには相當に骨を折つた。高芙蓉刻の尾藤二洲の藏書印や、書誌學者の狩谷掖齋の私印や藏書印は、他人と競争までして手に入れたこともある。何と云ふても自分の常に崇信してゐる人物の用印や、自分と郷國を同うする藝術家の用印などは、取りわけ自分の趣味に投じて自然に手が出る。自分の崇信してゐる人の印には、幕末の傑士川路聖謨のが全部ある、中には佐久間象山の刻したものもある。自分と郷國を同うする名家印には卷菱湖があり、大倉雨村、池田孤村などがある。池田孤村は抱一門人で、其遺印全部數十顆が手に入つた。

諺に『小人罪なく璧を抱いて罪あり。』と云ふ如く、印も美材である爲めに磨り潰される。名家の私印が長い間にどんなに多く磨り潰されたことであらうか。中には傳ふべきものも多あつたであらうに、これを思ふと洵に惋惜に堪へない。私名印の貴きは、その材にあらずして、其氏名にあるは勿論で、材の粗なるが故に、完きを得て居るものには頗る注意を要する。

日本の或時代には、佳材が幾んど無かつたから、粗材の印を搜すと往々意外のものに出遇う。『東西遊記』の著者、春暉堂橋南谿の印や、篠崎小竹の父三島の印、高久靄厓自刻の私印山中信天翁の自刻印などは皆粗材であるが、コンナものを拾つて活かすのは全く鑑識の力で骨董屋などの能くする所ではない。自分は粗材に古名家の遺印の多く存することに氣が付いてから、粗材のみを漁つたこともあるが、仇敵を搜すやうなもので、意中のものにはなかなか巡り遇はないので失望もしたが、此蒐集には實に二十年を費した。

蒐集の歲月は可なり長いが、その結果は數に於て僅かに二百四五十顆で、自慢する程のものも極めて稀である。今ザツト前に掲げた以外のものを舉げて見ると、貴族には東坊城菅原聰長、石州濱田侯松平武脩、間部松堂(閣老)、牧野康哉、秋月種樹、木戸侯、土方伯、前島密男があり、學者には會澤正之、丹羽伯弘(新發田の藩儒)、重野安繹、中村正直、高橋泥舟、中島子玉、細井九阜(廣澤の子)、辻元菘庵(醫)、佐藤立軒(一齋の子)、高島秋帆、林鶯溪、淺野梅堂、藤本鐵石等があり、畫家や文人には、山本梅逸、高嵩谷、細川林谷(印人)、古川鐵畹(印人)、圓山大迂(印人)、藤田吳江、伴人鶯笠、片桐不偏齋(茶人)、永井禾原(詩人)、

董堂敬義(書家)、長三洲(書家)、吳雪樵(浚明の子)、田必器、河鍋曉齋、日柳燕石等があり、支那人には林則徐と説文家の吳大徵外三四名あるに過ぎない。

自分は常に思ふのに、名家の私印なるものは、宛かも其人の位牌の如きもので、浮屠氏で作る位牌よりも遙かに意義が深い。骨董界では名家の手澤を経たものを格外に珍重するが、名家の手澤を最も深甚に經たものと云へば、恐らく其人の私印に優るものは無からう。此物が常に其人に追隨し、其作品には常に捺されて證とされ、その捺す毎に其人の指紋が鈕に附着する、作者の魂魄は宿つてこれにありとでも云ひ得るであらう。

文人の習慣として、其人が歿すると遺印を棺に納めることが毎々ある。菊池溪琴の遺印はすべて棺に納めたと、菊池晚香から聞かされたこともあり、つい此頃聞いたことだが、物徠の印はこれまで遺族の手に存してゐたのだが、其散佚を恐れて近頃徠の墓に納めたと云ふ。これにはいろいろの意味もあらうが、其人と離る可らざる關係があるから、生前通り其身邊に置くのだと解しても差支あるまい。

或ひは印を棺に納めることを惜んで、其印面に聊か刀を加へて保存することもある。之は

再び使用せぬ用意からで、贋作の利用を防ぐからでもあらうが、故人の命が打ちこんであるやうなものだから、その子孫は勿論、他人に於てもこれを粗略にしてはならない。飽くまで呵護して、永久に保存するのが故人に對する禮であらう。

文人墨客が使ひ果した敗殘の退筆ですら、鄭重に地下に埋めて筆塚を作る慣習から考へても、名家の私印は何等かの方法に據つて保護されねばならない。或は堅牢な金庫式の堂宇でも設けて、之に納めるのも一案であらう。斯る堅牢耐火の置き所があらば、各家にある祖宗の印も、追々之に寄託することとなるであらう。

柔道と鍼灸

私は醫學的知識を絶對に有してゐないから、それにつき語る資格はないが、漢方醫學の一概に排斥す可らざることを往々にして感じ、漢方醫書を讀したりすることもある。自分の既刊隨筆に支那の銅人の事を書いた折も、或る時代の支那の醫學は進んで居つたことをシミ

ジミ感ぜさせられた。銅人と云ふは今の銅像の如きものだが、体内には経絡が具つてゐて、それ／＼聯絡があり、水を通せば、どこまでも通するやうに出来てゐる微妙の人體模型で、これには三百六十五と云ふ多數の鍼灸の經穴が全身に穿たれてゐて、醫者の試験には、試験官の名指す經穴を、誤らず指摘する者でなければ及第を許さなかつた位、此銅人は大切な機關で、大學堂に置かれてあつたと云ふが、鍼灸醫術が如何に重きを置かれ、醫術の中樞は全くこれに在りとされたことが窺はれるのである。所謂鍼灸の經穴は経絡から研究され、割出された合理的の急所で、それが三百六十五を數ふる程あるのは、よくも工夫されたと驚かされる程である。洋方の醫術が行はれてから、鍼灸などは閑却されつゝあるが、併し難治の病氣が鍼灸で治し得た例は幾らもあつて、今日鍼灸を實驗上厚く信じて居るものが幾らもあり洋醫と雖も、一概に之を非としないが、去りて、鍼灸を合理的醫法と賞揚する程の醫學者は幾んど無いのは、私など素人が感ふる所であるが、こゝに幸にも其研究者が現れて、埋もれたる支那醫術に一道の光明を點じたのは、實に學界の仕合せと云はねばならぬ。

澤田健と云ふ人は名高い柔術家だが、亦灸の名家と知られてゐる人で、其人が柔術の知識

から鍼灸の奥儀を搜り得て、これ迄謎となつて居たことが闡明されたと云ふのは、眞に愉快の事である。柔道には人を活殺するの當身がある。それが鍼灸の經穴の部位と一致すると云ふことに氣が付いたのが、研究の第一歩で、経絡の錯綜したる關係から、手や足の或る個所を撲つと、それが殆ど關係のないやうな内臓に障害を起したり、又反對に所謂經穴と呼べる身體の或る個所に、恰かも打撲によつて傷害を受けしが如き症狀が見えるやうな事から、この不思議な相互關係を知つて、遂に澤田氏は鍼灸を志し、二十年の研鑽を積み、遂に十四經に秘められた謎を解くに至つたと云ふ。澤田氏の門人中川清三と云ふ人の著した「お灸の常識」と云ふ書を読んで見ると、柔道の當身と鍼灸の急所がよく一致してゐることが、左の如く説かれてゐる。

柔道の當身の個所と經穴とは、如何に不思議の合致があるか、聊か此事を述べて置く必要がある。芝居でよくやるが、内藤外記が仁木彈正に押へつけられ、眞向から斬りつけられやうとする時、外記が扇子をもつて彈正の足の甲をポイント突くと、彈正がひつくり返る處がある。あれは柔術では「草がくれ」の當と云ふので、鍼灸では「臨泣」及び「地五會」

に相當し、半身しびれ膽囊に障害を與へる處である。之に灸を炷へれば飛びあがつて、きりきり舞をする」と云はれて居り、鍼灸を禁じてある場所である。

手の「三里」は癱瘓の専門灸穴であるが、此場所は柔術で敵の獲物を打ち落す爲めに、手を横にして叩く處で此處を打たれると半身がしびれ、場合によつては氣絶してしまふのである。足の脛の後ろ横の「三陰交」は腎臟、脾臟、肝臟の經絡が集るところで、有用な經穴であるが、此處を蹴れば足がこぶら返りをし、三陰交の上の「築賓」を蹴ると、體がこはゞつてしまふ。誰でも知つて居る柔術の最も恐るべき當は「水月」とてミゾオチで、ここで當てられると活法を施しても蘇生せぬ即死の場所である。

柔道の當身の反對、即ち活法も亦鍼灸の經穴と驚くべき一致があることにつき、更に左の如く云ふてゐる。

活法の第一は「左水」と云つて、脊椎の大椎より數へて五番目の脊椎と、肩脾骨の間を打つのである。之によつて心臓の鼓動を起さしむるのであるが、これは鍼灸では「心兪」と云つて、心臓病の治療經穴である。かくて「左水」の活で生き返らぬ時は、第二段の活

を施すので、それは鍼灸で肝臟と脾臟を治す「肝兪」と「脾兪」の間を打つのである。これでも生き返らぬ時は、第三段の法として脊椎第十四の腎臟の治療穴たる「腎兪」をば被術者の左手を上にあけて、膝で強く押すのである。かくてなほ蘇生せぬ時は、最後の法として「總活」と云つて絶息者を仰けにし、拳を臍の上に置き、臍と「丹田」の間の「氣海」を親指でぐつと押すのである。かくすれば他の部位で蘇生しなかつた者も蘇生し、之で生き返らぬものは絶望であることになつてゐる。蓋しこの「丹田」の部位は人間精神の納るところで、一元の太極とされて居る。東洋醫學では、精神とは心臓と腎臟の働きを指した事となつて居る。東洋人が「氣海」と「丹田」を喧ましく云ふ譯は之で分り、丹田に力さへこもつて居れば、人間は決して病氣などにはかゝらぬと云ふ。

以上死活法の順序は、即ち内臓の關係を示してゐるもので、互ひに關係のない様に思へる内臓が、其實關係してゐる事は、柔術に於て、又經穴に於て初めて闡明し得らるゝもので、西洋の生理解剖では全く説明が出来ない。其理由として左の如く説いてゐる。

これは西洋の生理解剖が全然屍體解剖から出發して居るからで、これだから余は、西洋

の生理解剖は學問としての價值がないと斷定する所以である。これに反し東洋醫學は、常に人體を總合的な一個の生體としてのみ研究するから、以上の如き原理と系統が発見されて居るのである。

澤田氏は新海流の柔術の達人であり、傍ら接骨の名手として聞いてゐたが、二十年研究の結果、現實に灸によつて種々の效驗があらはるゝを立證してゐる。追々洋式の醫學者も此方面に注意を拂つて、研究者も出來、外國の醫師まで追々と理解するやうになつたと聞く。

竹田の書簡を讀んで

木崎好尙氏の編した『田能村竹田全集』の内、手簡の部を讀んで見ると、頼山陽に關することが少からずあるので、自分の感興を惹いた。中には自分所藏の山陽遺墨の考證となる手紙も見えてゐる。

山陽と竹田は深い交りがあつたから、隨分山陽の祕事も書かれてゐておもしろい。例へば

二通ばかりの手紙に山陽が漁色を廢したことが云ふてある。尾の道の橋本龜山宛の書簡中、「頼兄も柳絮粘泥已久矣」とあるは其一例である。

自分は山陽が妓の爲めに、竹田作の俗謡を書いた扇面を藏してゐる。此俗謡は竹田得意の置炬燵の歌で、竹田が狎妓飛珊の爲めに賦したと云はれてゐる。山陽は此謡の書後に左の如く識してゐるとは、竹田書簡集の言ふ所である。

癸未冬月、笑社諸子、會於河東一樓、聘歌妓飛珊聽歌、座有竹田先生、用其語作此、他日旗亭必有譜而唱之者、余雖不與其會、愛而錄之、癩道人

自分所藏の扇面には飛珊の名なく、癩道人の代りに「山のみなみ」の落款がある。木崎氏は何に據つて此識語を録したか、予の藏する者以外別にあるらしい。

それは兎に角、竹田が京都を辭し、國に歸らんとする時、即ち文政六年十二月廿二日（竹田四十七歳）宴會を催し、飛珊も其座に侍したが、山陽は何故か臨まなかつた。山陽の書蹟に「余雖不與其會」とあるは之を云ふのであらう。竹田は談話交りの漢文書簡を、秋吉雲桂（醫家）に寄せて此會の消息を報じてゐる中に、山陽の來らざりしは妬心あるが故と解してゐ

るのも一興である。そこで秋吉が主人となつて山陽と春琴をも加へて、更に一會を開く事となり、妬心ある山陽も竹田のおのろけを聴かねばならぬ事になつたことを、竹田の書簡で窺ひ得るのは更に一興である。

自分の架中に山陽が興國鈴歌を録した小幅がある、竹田は芳野山で南朝の年號「興國」の二字ある古鈴を得たので、山陽に一篇の詩を請ふた。その詩は集中にもあり、自分所藏のは初稿と見えて、集中の比すると冒頭の二句が缺けてをり、他にも多少の異同があるが、この古鈴に就き山陽が竹田に寄せた書簡が、竹田書簡集に收めてある。

(前略) それは扱置、大分乞政度伴も有之候。第一興國鈴歌仕候。此(鈴)の年(代)は何年に候いしや。必渡橋生(宮原節庵)歸候時、御しらせ可被下候。私詩稿未散失内に、是又返投、必被付此生可被下候、晩際は七過より必奉待候。云々。

此手紙は文政六年十二月廿一日竹田に寄せたもので、鈴の年號に就て質して居ることは手紙の通りで、竹田に頼まれて歌を作つたことは此手紙に據つて明かである。

山陽が月瀬に遊んだのは五十二歳天保二年二月廿九日の晩年で、竹田が同行せざりしを遣

憾とし、後日竹田に寄せた手紙により、山陽の眼に映じた梅溪の勝を本人から聞くことを得た。

(前略) 扱もく梅は天下無雙と可申、足迹未遍大八洲候故、不敢質言候得共、何分梅花世界、山水之外無他物妨清氣候。五六里溪山、左右皆玉雪、掩映清流、覺心骨亦化爲氷玉也あれを見ねば、生於此世、不可談梅候(圖)大抵如此、非誇語也(中略)。不同遊事返すくも遺憾之太者に候。他年必一游可被成候負梅花、徒過一生也。

五日の遊、酒を二斗二升飲候。そして詩は止五絶句、其樂可知也。

山陽は梅溪を極度に賞し、「あれを見ねば此世に生れて梅を談す可らず」と迄云ふてゐる。此書簡集を讀んで、竹田に國書道樂のあつたことを知つた。若い頃はしきりに書物漁りをやり、詩集や小説其他何くれとなく寄せ集め、到底資力の足りないことを慨歎してゐる。ある手紙には美人と比較して、自分の戀ひ慕ふほどの美人にはまだお目に掛らぬ。それよりも書物が懇望だとあこがれてゐる。畫家の竹田が畫幅獲得にこそうき身をやつすべきに、此點山陽とあべこべであるのは案外だ。竹田は種々の書物の出版もしてゐる。『豊後風土記』だの

煎茶本、填詞譜、自畫題譜、今才調集、山中人饒舌等と竹田好みの本は、概ね巾箱本であるのは、或ひは京都の豪家、物集西阜が小本好みであつたので、其感化かも知れぬと木崎氏は云ふてゐるが、余が豆本蒐集に没頭したのは竹田の感化で、私の書齋を小精廬と云ふのも竹田の巾箱本の序に「大にして粗ならんより小にして精なるに若かず」の語から取つたのだ。

猶太民族世界を呑まんとす

私などは書生時代から猶太人、即ちジウと云ふものは誠に卑しむべきものだと聞かされてゐた。しかしジウほど金満家は無いと聞いてもゐたので、我邦の××のやうなものかと思つてゐた。然るに此民族が世界に於ける大勢力であつて、恐るべきものであることを知ると、今更ながら驚愕に堪へない。

此民族はパレスタインの故國に生れながら、今は國家を持たず、世界の諸方面に分散し、其居る所の國籍に在るものもあり、又耶蘇教を奉じてゐるものもあるが、決して猶太人以外

の婦人と結婚せず、國家は有たないけれども、此民族は何れの國に居るに拘らず、精神的に結合してゐる。彼等の歴史を繰り展べて見ると、長い間強國に虐げられて難儀をして居る。殊に羅馬帝國にみじめな目に遇つて、終に流離の民となつた。

彼等は斯の如く諸國の虐待を受けてゐるから、自然復讐の血が流れてゐる。その復讐手段は、其國の秩序を紊して其崩潰を圖るにありと云はれてゐるが、實は斯くすることが己等の地位を高める手段でもあるのだ。彼等が右の如き過激の目的を達する爲めには、大なる資力を有たねばならん所から、彼等の極力力むる所は富の蓄積である。彼等は事實富を作るに驚くべき才能を有してゐる。現に世界の大富豪と云はるゝものは皆猶太系の人である。だからどこの國でも戦争を起すとすると、此系統の力に頼らねばならぬ。猶太人は全く其司命を握つて居る。有名なロスチャイルド家は猶太財閥の首領で、世界に於ける同閥銀行の其連結した金力は實に洪大のものである。どんな國でも大きな金が要るとなると、泣くも笑ふも之に頼る外はない。猶太人は革命家でもあり亦資本家でもある。

彼等は金力に於て優越であるのみでなく、智力に於ても優越であつて、學者にも政治家に

も優れた人物が少くない。大抵の國の政治の樞機に當つてゐるものは、其身元を調べて見ると多くは猶太種である。近頃軍人會館の發行に係る、安江仙弘中佐の著『猶太の人々』に就て見ると、世界列國の要部に立つて居るものが餘りに猶太人に多くあるので、一驚を喫せざるを得ない。勿論世界の最も大なる會社銀行、新聞社、活動寫眞などに到るまで、其社長又は大株主は大概猶太人である。

諸國の政治の要部に立つ猶太系の人々は、敢て其國の繁榮を企圖するのではなく、内實猶太の精神同盟の總領と目的を達成せんとするのであるから、着々諸國に革命が起るが、獨逸でも露西亞でも、革命の張本を繹ぬれば皆猶太人の仕業であるのだ。

猶太人の歴史を辿ると、十九世紀末に彼等民族の結束が弛まんとしたこともある。即ち改宗や同化が行はれて、猶太魂が失せんとしたこともあつたが、此時に彼等が救世主として崇敬する人が現れた。それはテヲドル・ヘルツル博士であつて、博士は全世界の猶太民族に高く呼びかけて、其失はれんとした猶太精神を生かしたのである。博士の抱負を要約して云ふと、右手に革命、左手に金權を握れば、宇宙の事何事か成らざらん。全世界の彼等の

手に歸すべきは、決して遠いことでない。斯く主張するドクトリンはシオニズムと云ふてゐるが、これが同民族間のバイブルの如く金科玉條視され、此博士に依つて結合が一層鞏固になつた。

世界大戰に猶太民族が各國に寄與した力は少くないので、從來彼等を疎外したのも、漸く相當に待遇するやうになつたのも自然の勢で、彼等は爾來追々其頭を擡げて、其勢力は最早世界を呑まんとするの概がある。國家を有たぬ此不思議な民族が、世界のあらゆる國に散在してゐて、其國の覆没を圖らんとする危険なバチルスであることを思ふと、眞に寒心すべきである。

昔の起重法

今は洋式の種々の機械があつて、重量ある物を運搬したり高處へ揚げたりすることは容易であるが、全然洋風の機械を知らなかつた我邦人が、隨分後世を驚かすやうなことをやつて

居る。大坂城壁の巨石を、よくも船積して城まで運んだものと誰も感ずるであらう。しかしおのづから法があつた。それは極めて粗末な木製の機械などを用ひて、人力や繩や馬牛などが手傳つてやつた。其遣り方は幼穉とは云へ、其法は理に合つてゐた。家藏に『杵術秘經』と云ふ寫本がある。あらゆる此種の事に關し方法を擧げて居る。大工や庭師などには大切なものであつたらう。今でも大石を運搬するに、敢て牛馬を勞せず、丸太を石の下に据ゑて、石を轉がす法があるが、杵術と云ふと此方法をさすのである。

今は沈没船の引上げは格別困難とされないが、昔、外國船を日本の船頭が引受けた驚ろくべき例がある。その事實は住田正一氏の『考古漫筆』に出てゐる。其要略を擧げると、寛政十年長崎に於て、紅毛船が歸國の時港外の淺瀬に乗り上げたので、遂に沈没したのを引揚げんとして、奉行所から引揚人を募つた結果、或ものが募に應じたが、四十日も費して終に成功しなかつた。然るに其頃防州串ヶ濱の船頭喜左衛門なるものが、罽網を買ひに長崎に来てゐたので、引揚作業に従事したいと届け出で、これが二十日ばかりを費して遂に成功したとあるが、其引揚方法は左の如くである。阿蘭陀破損書付に據ると、

右浮船致し方は紅毛船に有之候。纜こきそ網一、長さ百五十間、大さ二尺廻り、接欄繩二、長さ廻り前に同じ、はせを綱一、同上、總て四筋の内二筋を以て（一筋に五十人づつかゝり取扱）紅毛船の真中を二重に捲き、其綱に南蠻車を仕掛け、材木にて筏二つを組、筏の上より長さ四丈餘の柱二十二本を建、柱の根丸太木六本、竹の輪をかけ堅く結び、おも柱より何れも三四尺程づつ下へ出し、筏の間に入れ、生木の如く不動様に仕組み、上方に横貫にて堅め、南蠻車を結びつけ、四百石積の舟を長とし、五六十石積の舟凡百艘程にて紅毛船を取廻し、數百人して其舟より轆轤索にて卷上る也。

之を見ると、機械として用ひたのは南蠻車と轆轤とあるに過ぎないが、併し合理的である。この成功は當時大評判を博し、船頭村井喜左衛門は奉行所より賞賜を得たと云ふが、海國の船頭は流石に能力がある。

安田権園邸に於ける談書會

毎月一回安田善次郎氏邸に同人が打寄つて、種々の浮世話をやるのが長く續いてゐるが同人中にはいろいろの趣味家がゐて、いつも面白い談話が湧く。ある夕べの會に、軍艦内の眞水の貴い話が出た。艦内には水は必らず一人當りいくらと定め、それを超えて使用することを許さない、貯水所には番人が附されてゐる。入浴などは容易に出来ないから、艦員が上陸すると、何よりも御馳走に感ずるのは入浴せしめることだとは左もあるべし。陸軍でも陣中の水は艦内同様に貴く、或従軍記者が大將に記念揮毫を請ふた時、大將はたやすい需めではあるが、陣中の水は一滴たりとも硯に點することが出来ない、と斷つたと云ふが、これなどは極端の話だが、軍中の心掛けは斯くあらねばならぬ。

武藤山治の横死は惜むべきだと云ふ話も出た。あの人は何事に就ても或る主張があつた。衆議員に座席を有して居るから、鐵道旅行にはバスを所持してゐるのに、ある時發車時間が切迫してゐるのに、切符を買はんと群衆を押し別けてやきもきしてゐるのを、同行の人が不審に思ひ、君はバスをもつてゐるではないかと云ふと、武藤は此旅行は私用であるからバスの使用が出来ないと答へた。

多田親愛は假名書きの名人で、早い頃、岩崎から數枚の小色紙に和歌の揮毫を托されたので、多田は認めた色紙を携へて岩崎に面會すると、岩崎は潤筆料を問ふたので、一枚金拾圓と云ふた處、岩崎は直截にそれは高いと云ふたので、さうですかとて其色紙を懐ろにして、直ちに辭し去つたが、家に歸ると門人にその色紙を頒ち與へた。ここに多田の面目が見えると云ふ話も出た。

野崎左文が歿したので、自然此人のことが話題に上つた。あの人は假名垣魯文の門人であつたが、何の爲めであつたかそれは分明しないが、破門されようとした時、訛び證文を納れた。其證文を自分が所持してゐるが、本人の存命中は、自分も遠慮して人に示すこともしなかつた。が、あの人の名に文の字のあるのは、師の一字を貰つたのであらう。左と云ふは何故であらうと自分が云ひ出すと、野崎に懇意の人が座中にて、あの人は左手で字を横に書く癖があつたので、左の字もそれに由來するのだと。併し達者に書いたさうだ。

古書籍に往々勝鹿文庫の藏記のあるのが出る。此頃も自分の郷里の書物屋が、正平版の論語を獲た。それに此印記があると云ふて、誰の事かと自分に問ふて來たが、あれは誰であら

うと云ふと、即座に答を得た。此文庫の持主は松本幸彦と云ふ、文政天保頃、淺草藏前で札差を業とし、松木屋唯吉と稱したもので、號を月痴と云ひ、『洛陽名園記』、『右申書記』などの藏版があると知れた。

安田君の話に、震災前本所横網の屋敷に、先代の愛した椎の木があつた。ある時植木屋にその實を贈られたのを、植木屋が蒔いた處、段々年を経てそれが成木した。震後、今の安田君が植木屋に、本所の椎の木を失つたのは誠に惜しかつたと語ると、植木屋の云ふには、御先代から頂戴した椎の實が、今は成木してゐますから、それを差上げませうとの事、安田君は其由來をおもしろく感じ、其木を今の屋敷に移植し、もと松廼屋と云ふた號を椎園と改むるに至つた。

種々雑談の内に、名を忘れたが、富豪の息子に書物道樂の人があつて、部屋住時代に随分多く金を遣つた。書物屋連はあの人を家を相續したら、さぞ書物買ひに多額の金を散らすだらうと噂してゐると、それが全く裏切られて、其人が愈々家を相續すると、バツタリ書物買ひをやめたので書物屋は皆失望したと云ふ話が出た。親の金は無責任に亂費するが、身代が

自分のものとなると、心境が一變する好適例である。

同人の話に、名を逸したが、鍾愛の子を失つて悲歎の餘り、自分の名を改めて、子の名を取つた人があると。親の名を子が襲ふ例は澤山あるが、斯る逆例は甚だ珍しいと思ふた。

安田邸にて大震災の話が出た時、主人は奥から四五枚の印刷物を持ち出して來て吾等に頒たれた。それは罹災者死亡者に對し、宮中より賑恤金を賜はる旨の府知事の謹告書である。安田家に此印刷物の多くある譯は、同族内に一家全滅の不幸があつたからのもので、實に悲惨の記念物である。安田君は恩賜の金だからと云ふて、其儘現金で保存してあつたのを、過般盜難に罹つたと語られた。

安田君方では毎々種々の珍品を見るが、或時示された錦繡帳は、如何にも立派なもので、其容器も並々ならぬものであつた。これは文化の頃京都の草間直道（贊之）と云ふ人が、十三年の歳月を費して集めた名物裂百數十種で、森川竹窓は漢文の跋を書いて、其苦心を語つてゐる。此帳には品名の註が添へてあり、更に考證の冊子も附屬してゐる。殊に感心したのは、贋物の裂を多く貼り込んで眞贋鑑別の葉としてあることで、昔から、多くの贋物裂れの

ある事も知つたが、今の龍村の複製技は、昔の贋作家を遙かに駕してゐると感じた。

古裂の事から、自然表装の事に及んだが、京都で現在古裂を多く藏し、どんな古墨蹟にも折合ふ裂を自在に用ひ得るものは、墨香堂と云ふ表具屋で（京都富小路三條上ル岡岩太郎）ある。物によると表装代が莫迦に高いさうである。

安田邸に同人が會して、藏書家や珍本屋などに關する談話を交へ、其都度筆記させたことがある。其筆記は可なり長文だが、今左に其内から若干を抄録する。

△藏書家で軟派の親玉といふと、早いところで大久保紫香あたりから、話は初めねばなるまい。古いところは別とすると、紫香あたりが維新後の藏書家といつていゝだらう。自分たちの知つてゐる頃の紫香は、八丁堀に隠居してゐられた。表口に井戸のあつた家だつたと記憶する。本家は橋町の袋物屋（？）と思ふ。通稱は源兵衛といつた。（三村竹清氏の『本の話』によると、大正十五年二月二日六十三で歿した。）

△藏書家中の變り種といふと、奥村繁次郎だらう。かう呼ぶと物々しいが、芋繁で通つてゐた名物男だ。和泉橋通を行つて、御徒町の左側に焼芋屋がある。その芋屋の店にいろいろな

植木の鉢植が置いてあるのは別に珍らしくもない江戸——東京の風景だが、この焼芋屋の店の鉢植に珍しいのは、その各鉢に羅馬字で木札が挿されてある。恐らくその植物のラテン名なのであらう。ここが名物男の芋繁だ。

蛇を折靴に入れてゐたといふやうな變り者で、恐ろしく足の達者な男だつた。

殘跡庵と號してゐた。又化曼子ともいつたのは、大槻如電翁の命名で薯蕷變じて鰻になるからの洒落である。

芋繁は商賣柄、本草の學を究め、研鑽造詣が深く、従つて食物料理に通じてゐたが、元來が學者といふのではなく野人だ。が、性來書物が好きなので、「食物博士」などと呼ばれ、當人も内々は得意だつた。

この學者風に芋繁が化けた。——天神下に移つて芋が鰻になつて、「食物字彙」などの編纂に取かゝつてゐた頃には、芋繁の名聲は全く地に墮ちた。芋屋片手に本草を弄り、食通をやつてゐる時には、相當なものだと大學の連中など、珍しい奴だと嘖々と持はやされたのだが、

——これが世上の面白いところだ。

天神下の住居は、寶丹の處へ曲る左の角、古錢屋の小川の向ひ角であつたが、又元の御徒町へ戻つてから、名聲は再び揚らず、鰻は二度と芋になれなかつた。

芋を焼いてゐる時分は、その背後にいろんな書物が積んであつた。天神下時代には「鰻」に髯などはやしてゐたが、これアいかんと思ひましたネ。

元來繁次郎は、本草の事に詳しい位だから、芋の鑑識があつた。従つて買出しが上手だつたから、芋繁の芋はうまいから流行つたのだらう。

それが學者先生になつて、髯を生やしたのだから、器が違ふ。

確かチブスで死んだと思ふ。大正八年十二月十六日で、年は四十六歳だつた。

芋屋の看板の行燈を藏書印に用ひ、「此ぬしいも繁」とあつた。この藏書印が今でもちよいちよい見かける。

△藏書家の變り種としては、芋屋の殘跡庵。河岸の天幸堂、それは屋臺店の油障子に蛇の目が目印の鮎屋だつた。

△海運橋の袂にあつた紙屋が檜崎海運。——元の第一銀行の前の土藏造の二階の窓から、本

箱がギツンリ積んであつたが、海運橋からよく見えた。

役者、芝居ものの冊子が山とあつた。その海運自筆の目録が出来てゐて、高橋太華山人が所藏してゐた。

海運らしいものは、「森羅万象」と稱けた貼込帳で、各冊によつて、内容種類が違つてゐるのがいくつもあつた。その内で遊女の短冊を貼つてある分は、高尾、薄雲などの名太夫が、年代別にしてあつたといふ豪華なものであつたとは、内田魯庵さんの話。

この「森羅万象」の役者の分は、役者といふ役者——名優、人氣俳優をホントに網羅してあつた。表が短冊で、裏が手紙其他の貼込みといふのだから、キドツてゐる。これを相當な値で求めたのだが、その内に細繪が七枚ほどあつて、春章などがあつた。吉金がこの春章などの七枚の細繪だけを、元價で譲つてくれと懇望してゐた。

檜崎文庫には、黄表紙など眞新らしいのが、三百冊からもあつたと思ふ。

海運の親は、その頃、十二大通の一人だつたといふ事だ。

大通丸も好書の大通だつた。大通丸藥舖の主人だから、大通丸で通用するが、ホントの號

は六鼠といつた。通稱は宮島藤吉、その蔵書の多くは、現今靜嘉堂文庫へ收つてゐる。狩谷掖齋の稿本などが七八種もあつた。

六鼠は、藥屋さんだけに、ケンドンになつてゐる藥箱に、丁度横本の役者評判記が、おあつらへ向きに入るので、評判記の本箱になつてゐた。

黄表紙など多數藏してゐた。

△江戸の古い珍本屋といふものが、どんな状態であつたかは、研究しないとこれは分らぬがフト思ひ浮べる處では、例の四日市の達磨屋吾一だらう。が、自分達が知つてゐるのでは、京常と島平などが、古い珍本屋とでもいふのだらう。

京常は、京屋常七が家號で、本姓は中井常七であつた。京屋を家號にしてゐるのだから、或は、京都の産かも知れぬ。その邊は分らぬ。確か京常は、東海道筋の雲助だつたといふ話も聞いた。

その雲助がどうして珍本屋などになつたかは、固より知らぬが、いかにも雲助だつたかなと思へるは、身體一面の刺青で手首のところまで鮮かな藍が見えてゐた。その手で、珍本を

取扱うてゐるのだから、可なり不調和だネ。

其店は兩國——正しくいふと濱町一丁目の三番地だが、俚稱が濱町の花屋敷だつた。

小さい床店で、茶箱のやうなものを店の兩側に置いてあつて、その箱の上に珍本が竝んでゐたよ。あんな店はもう見ようと今日ではない。店そのものがなつかしい心持がする。

島平の方は、淺倉屋の番頭をしてゐた男で、一度店を出した事があつた。

古本屋の方では、セドリの佐太郎で通つてゐる。確か田中菊雄といつたのも古い馴染の顔だ。佐太郎の娘が歌人の安成二郎氏の姻戚といふので、二郎氏のところにもたとか聞いてゐる。

△これらの京常、島平などと、創立の時代はどうなるか、ハッキリしらぬが、芝の村幸も古い存在だ。村幸は、芝愛宕下町、元の鐵道馬車時代の露月町の停留場を、愛宕下へ突當つたところで、ふるい店であつた。

入つたところに草双紙が塵まぶれに積んである。丁度六疊位の茶の間に相當する部屋があつて、それが客が入込む店舗で、店の間では商ひはしないやうだつた。二階があつたが、そ

こは珍本の置場所、この茶の間が家人の居るところでもあり、商ひもした。うすあばたの村田幸吉が、小机の上に黄表紙などを並べて繪を見てゐたよ。

普通の家なら、食物が入つてゐやうといふ水屋のやうな所から、繩に絡げた繪本が、ゴロゴロ出て来る。今日稀覯本といはれる物など、この村幸の水屋にゴロゴロしてゐた——と思ふと、今日びは全く珍しい書物はなくなつた。

尤も古本屋によつて、取扱ふものが違つてゐる。商品の筋が違ふ。浅倉屋の如きは、所謂硬いものばかりであつた。村幸はそれに比すると、所謂軟派のものであつた。軟派ものを取扱ふ家は、繪が主となる。——浮世繪が主でもあり、又金高の上つたものでもあらう。されば村幸などでは、繪本が商品として第一の價値のあるものであつたらう。

京常などはこんな床店であつたから、商品は、村幸などから借りて來たやうだ。

京常は、「昔々堂」がその堂號であつた。

△神田に、三久といふ古本屋もあつた。——神田小川町だつたネ。

△三久に小僧をしてゐた人に星野といつたのがあつた。これが俳人の星野麥人さ。

△麥人は、佐藤六石といふ漢詩人に就いたが、六石の俳諧の方の號が「飯人」といつたので星野が、「麥人」を號としたのだと、確か聞いてゐる。

△佐藤六石も「萬卷堂」といふ古本屋を出してゐた。さア時代、いつだつたかネ。この萬卷堂は京常などと較べては、大分時代が新しくなるだらう。——人の記憶といふものは、年代がハッキリしないものだネ。

をかしい話がある。——去る人の處へ麥人氏が行く。この家へは三久がお出入なのである。すると、取次に出た女中が、主人の部屋へ行つて、「只今三久の小僧さんが、かういふ名刺を持つてまゐりました。」といつて取次いだ。ソノ名刺には「星野麥人」とある。小僧さんも俳人も、古い女中の眼には同じであつた。

△田山花袋も、紀行文家になる前は去る本屋の小僧さんであつた。

△徳川期の戯作家が本屋の居候、或は小僧であつたのが大分あるが、明治に入つても、さうなのだらう。今でも嵯峨廼家主人が、郊外地で古本屋をしてゐた。まだ専門學校にゐた頃、後藤宙外氏も、文學者では喰へないから、學校を出たら古本屋になるのだといつてゐたが、

後に郷里の人を説いて合辨で「新著月刊」を出版してゐた。あの東華堂が発展すると、宙外も正に、木屋さんのだらう。

△山路愛山も、東京落をして後、郷里なる信州で本屋をしてゐた。長野へ買出しに行つた、吉田吉五郎の話である。

△村幸も、元は貸本屋の小僧だ。貸本を背負つて華客廻りをしてゐた。その内に本に興味が向く、目も開いて來るといふので、珍書店へと轉向したといふ順序なのであつたらう。

△昔の貸本屋といふものは、今日のやうに、圓本時代が現出しては、商業にもならぬ、がその頃はいろいろな意味で、知識の普及に與つて大きな役目を果してゐたものだらう。名古屋の大惣——大野屋惣兵衛などは、貸本屋としては、日本一だらう。大惣の店じまひには、萬巻の書が散らばつた事はいふだけムダだ。

△牛込細工町にも、池清といふ相當な貸本屋があつたが、この種の貸本屋のお陰を蒙つた人は、昔は相當多かつたのであらう。

△日本橋四日市の達磨屋は、例の吾一で、これは、古い特種の存在だつたといへよう。

△達磨屋吾一の孫に當るのが、岩本梓石、二三屋といつた。父祖の業を繼いでゐたわけだが、震災前までは、湯島切通の坂上にゐたが、どうしたらう？

△珍本屋と蒐集家とは、ついて廻るものだ。今の大通、林若樹氏が、草稿本を蒐集にかゝられたのが、確か明治三十四年の頃で、その時に、山縣大貳の草稿を持つてゐられたが、今から草稿を蒐集するなんて、遅いといふのが定評だつたが、事實はさうでない。林さんの様な大通が生れた。——蒐集に「今から遅い」などといふのは抑もの間違ひだ。いつからでも蒐集は、初めていゝものだ。丁度「道」を聴くのと同じだネ。且に聴いて夕に死すも可なりだよ。

左の浅倉屋主人の話は、安田邸での談話でないが、爰に附載しておく。

『江戸名所圖會の賣捌をやつた茅町の須伊（須原屋伊八）の話中には、此書の出版の初賣の當日には、早朝來客が推寄せて、表の格子を毀される様な繁昌であつたとの事。書物屋の内では何と云ふても通一丁目の丸須（須原屋北島茂兵衛）が一番聞えてゐたと云ひます。店の藏が右は書物屋左は藥種屋で、左右の店に各々番頭が居た。その頃の番頭は唐本好で、當時まだ聖堂にあつた帝國圖書館へ盛んに納めた。大般若を買ひに行くと、二階へ上げて會席膳

で御馳走をしました。昔から武鑑と江戸繪圖の版元ですから、須原屋の名は全國へ擴まつてをり、また家傳、順氣散と云ふ婦人藥が諸方に行き渡つてゐました。須原屋に近く通二丁目山佐（山城屋稻田佐兵衛）の店がありました。立派な店土藏で三人の番頭が帳場に控へてゐました。先父の話では、東京中で、一番賣れた店で市などの買高では他の全部の店を纏めただけと釣合つたと言ひます。其位繁昌した店でしたが、客が「こちらは須原屋さんですか。」と言つて來るので、主人は一生、須原屋の暖簾が欲しいと申して居たと云ふことです。

自分がいろ／＼と浅倉屋の話を聞いて自分知り合の書肆のことも知るを得た。有斐閣の先代江草斧太郎には、自分の神田猿樂町の住宅を賣つたこともあるが、此人は自分の書生の時一ツ橋通りに小さな洋本屋をやつたもので、書生が本を抵當に牛肉代を度々借りたことがあるが、此人はもと通町の伊勢喜と云ふ古本屋の店員で、初めは仲買、俗に「セドリ」と云つて風呂敷包を背負つて歩く才取りをしてゐた。此人と浅倉屋は特に懇意で、丁度開成學校が東京大學に成つた以後、即ち一橋時代、島田重禮博士が浅倉屋へ、大學へ本を持つて來る様にとのお話なのですが、豫算がありませんので、大學で不用の洋本を抛下げ其代で唐本を

購入すると云はれるので、その抛下の洋本の評價をやり、又其賣捌をやるのが江草であつたと云ふ。

客筋に就ても、いろ／＼と語つてゐる中に、長谷川泰の事がある。あの人は早起きの人であつたが、浅倉屋の語る中に、夏などは店の者が起きない内にやつて來て、蚊帳を冠つたまま棚の唐本を讀んで居られ、恐縮したことがあると云ふてゐる。

中根香亭先生は劍客とは見えぬ温厚の君子でした。其著「日本兵要地理小誌」を陸軍で出版した時に、賊軍を東軍と改める事で激論された人とは、何うしても思はれません。晚年根岸の御宅を親戚に譲られり、漢籍の珍書は大槻如電先生、和書は中村秋香氏へ生片身に御遺しになり、後國內を行脚され、御遺言通り興津で葬式を風葬にしたとは、何處までも變つた方でした。御著述の「日本文典」も随分行はれたものです。小説雑誌の「都の花」や、寫本を集めた「百萬塔」を金港堂から出された事もあります。又「天王寺大懺悔」といふ小冊物の戲著がありました。此内には菊池容齋の「前賢故實」は唐本の「晚咲堂畫傳」のほんの模倣に過ぎないと、先生に不似合の惡口が書いてあり、又世人もその文章は容齋の自作に非すと

申しますが、「前賢故實」は容齋が四十年も心血を注いだもので、嘗て、大久保一翁が先生の隨筆「枕紙」一冊を所持してをられ、容齋先生の家で校合してくれとの御依頼に、較べに参りましたが、原本は「前賢故實」の字そつくり、書體、文章頗る美事で、之を以ても「前賢故實」は、容齋先生自筆刻本に違ひありません。容齋先生には福田行誠上人が大變お心やすく、この大著の出版に困つて居らるゝを見かねて、信徒の加藤金兵衛に話して、無利息で金を出させ、漸く出来上つたものです。其御禮に先生が五百羅漢遊戯圖十二幅、三尊圖三幅、合せて十五幅を畫いて送られました。これは行誠上人の傳通院時代の事です。後には春秋の彼岸に、諸人に拜觀させたものですが、今は何處にありませうか。云々』

歐羅巴物語

立教大學出身で、英國に三年ばかり遊學して歸朝し、單獨で英文雜誌を發行してゐた菊池重三郎と云ふ若い人が、いづぞや自著「歐羅巴物語」を私に寄せた。其書き方がユモリック

で無邪氣な思ひ出が多く、少しも已を衒はず、しかも一茶などの集をよむ如き心地がした。大體外國歸りの人の書いた隨筆は、紋切形で一種の忌味すら感ずるのに、これは普通洋行者の口吻を、全然脱してゐるのに興を覺えた。挿話二三を左に抄録する。

ある下宿屋で日本客の爲めに自動車の中古を買ひこんで、日本の客を自家の農園に連れて行くにはこれが肝腎だと。さて自動車に何と名を命ずべきや、可成日本に因みのある名が欲しいと百方考へた揚句、佳名を得たと喜んだ名は何かと云ふと、それは「地震」であつた。

歐洲大戰で負傷して病人となつたものゝ話に、一人は火酒を嗜んで、それを暖爐にこぼし込むことに異様な快感を覺えるのである。即ち砲烟彈雨のフラングースの戦を思ひ出させるので、火酒がポー／＼と焼けると非常の興奮をおこし、「野郎やつたな、畜生」とつぶやくことが毎々であるが、如何さま癡兵などでありさうなこと。

或る家庭に眞黒の灰が日本の炭取に一杯位ある。それは祕密の灰とでも云ふべきかと話柄に上ると、主人夫婦が妙な顔つきして、何となく平和が破れる。實の處それはこの

家の夫婦が、結婚前に取交はした艶書を、一炬に附したものであるさうな。

文豪ラスキンが幼少の時、保姆に抱かれて遊んだ所に碑が立つてゐるのを見て、著者が碑文などは斯くあつてこそ人を動かす、日本の碑文は多くナンセンスだと云ふやうなことを云つてゐる。ラスキンの文を彫した碑面には、

*The first thing that I remember as an event in life was being taken by my nurse
to the brow of Friars Crag, Derwentwater.*

神田の文化町

東京に於ける、吾等が古い馴染の地はどこかと云ふと、早稲田は吾等に最も關係の古い處で、その關係は半世紀以上も繼續してゐるが、それよりも更に古い馴染は、神田の或る一區である。吾等に精神的の食糧を始めて供給してくれた、忘れ難い地區は神田である。委しく云へば、一ツ橋から神保町、今川小路に及ぶ左まで廣くない地區である。吾等が、郷里で英

學を學び、明治八年に始めて上京して、英語を習つた處は英語學校で、それは一ツ橋通りの高田舊藩主榊原侯の舊邸を、昔のまゝ學校に充て、門も昔のまゝ、教室も元の諸室に多少の手入れをして、疊を上げた位に止り、假校舎と見るべきものであつた。大道を隔て、大學があつた。これは今學士會館のあるあたり一圓の地で、南校より系統を引き、吾等の出京した頃は開成學校と云ふたが、其後東京大學と改稱し、法理文の三科が置かれたので、東京大學三學部と云ふた。醫科だけは本郷の今の大學の處に別になつてゐた。此頃まだ高等學校はなく、高等學校に相當する豫備門を経なければならなかつた、それは大學内にあつた。此大學は木造洋館で寄宿舎もあり、外國教師の爲め教師館もあり、大講堂などもあつた。吾等が入つて政經文を學んだのは、此科の置かれて二年目であつた。大學の門前、今の商科大學の邊りに、外國語學校があつた。こゝは専ら諸外國語を教へる所で、支那語、露西亞語、西班牙語まで教へた。漢文も此學校で教へたので、吾等は此學校にも通ふた。今は商科大學と外國語學校が存するのみで、大學は本郷に移り、英語學校も其跡を留めない。吾等の學んだ所在地の全然趣が變つて、昔を尋ねる由もないやうになつたが、竹橋外に文教の府、文部省

が大震災前まであつたことを漏らしてはならぬ。

單に以上挙げたのみでも、神田の一區は文化に大關係のあることは絮説を待たない。尙お茶の水を隔て、向ふは本郷區となつてゐるが、神田と最も近い處に聖堂があり、昔の學府であつた昌平學校の址があり、そこには曾つて圖書館が設けられ、又教育博物館が設けられたこともあり、大震災には焼けたが今は復興された。尙、隣地に高等師範學校があり、此等を合すれば一ツ橋からお茶の水向ふの一區は、學校の淵藪とも云へるので、日本の文化史に大切な部分を占める。尙比較的近年の設置に係るものを云へば、九段下には大橋圖書館があり神田近き本郷にも、中央大學や日本大學もある。餘り廣からざる地區に、學校が斯く多く、文化的經歷に富む町は、東京廣しと雖も、これに匹敵し得る所は他に無い。

學校は本郷の帝國大學、早稲田、三田の大學等があちこちに散在してゐるけれども、勿論他にもある。が神田の學區には他にない一特徴がある。それは何かと云ふと、書物の集散地がこゝであつて、文化の稗補に大なる貢獻をしてゐることだ。神保町表裏一帯の地は、連簷櫛比、書物屋で、新舊各種の書物が供給され、教科書、字書、各種専門の圖書が間斷なく出

版され、亦雑誌の大販賣店もあつて、その店の規模の大なる點に於て將た其店舗の數の多き點に於て、都下に雄視してゐる。畢竟此區が文化的歴史を有つて居るから、斯る機關が自然こゝに集つたものであらうが、學校には興廢があるけれども、有益の圖書の出版、古書籍の供給が年を逐ふて益々盛況を呈するのは、吾文化史上偉績として傳ふべきで、神田の誇りと云へば、何を差措ても、精神的糧食の供給にありと云はねばなるまい。

一ツ橋の大學の在りし頃の神保町邊を回顧すると、随分雜然たるものであつたが、學生に供給する者の營業が殆んど家並で、唐物屋があり、牛肉屋があり、蕎麥屋があり、小料理店があり、天ぶら屋があり、汁粉屋がある。菓子屋があり、パンヤがあると云ふ鹽梅に、飲食店で満ちてゐた。學生相當に上等のものなどは一切なく、西洋料理と云へば美土代町の三河屋あたりのみであつて、集會でもする時は、玉川堂（今あるのは移轉して小さくなつた）に會したが、これが唯一の貸席で、飲食は辨當で済ましたやうな質素さであつた。今のやうな喫茶店は無論無つたが、パン屋に椅子を設けて學生を待ち、菓子パンと日本茶を饗した。最も繁昌したのは天麩羅屋などであつた。すべて此等口腹の爲めにする營業は大學が本郷へ移

轉すると、皆無くなつたが、精神の糧を供給する本屋だけは残つたのみならず、追々に發展した。

當時の書物屋の状況を回顧すると、随分貧弱の店が多かつた。大體書物屋は裏町にあつたのが、市區改正でそれが表町となり、裏町には少數ながら有力の本店のみ、堂々と構へるやうになつた。即ち富山房や三省堂や、東京堂などがそれであるが、しかしそれは皆近年大をなしたのであつて、大學のありし時代には、これほどの大店は一つもなかつた。當時洋書を賣る家と云へば、有斐閣のみであつたが、九尺二間の小さな店で、和本一冊も交へない洋籍の古本屋で、これが學生連の金融機關で、その書物を買ふことは稀れで、洋籍を典して少し計りの金を借りるのが重で、此家の主人江草斧太郎と云ふ人は相當義氣があつたので、學生に喜ばれた。それから可なり後に、洋本の專賣店が神保町に生れた。それは富山房の前身である東洋館書店で、小野梓氏の經營に係り、あの頃では目ぼしい店であつた。これは古本屋ではなく、態々西洋から輸入した立派な學術書店であつたが、學者肌の小野氏が自己の好む所に偏して取り寄せた爲め、商賣がうまく行かず、遂に閉店するの止むなきに至つたが、

小野氏が書店を開くに此地を選び、自分の住宅も其附近に移したのは、此地が書物に如何に縁因があつて、書物營業に絶好の地であることが知れるのである。

書物屋が追々繁昌した沿革は自分は委しく調べて見ないが、或書店が大をなした動機が二つあるかに思はれる。それは一つは法典の編纂が成つたこと、他の一は教科書の編纂である。此の二つの事は普遍的に全國に及ぶもので、共に非常に大きな仕事で、これに成功すれば巨利を博し得る所から、書店は一時これに熱中した歴史がある。前に記した有斐閣などは洋本屋をやめて、一意法律書を發行して、後には立派な書肆になり、東洋館書店を繼承した富山房も半世紀の功を積み、堂々たるものとなつたが、これも一時教科書に全力を傾けたのが其成功の元であつたやうに思はれる。今日力ある書店の経歴を尋ねると、此二大事業の孰れかに力を籠めて成功したものでないものは無い。自分は餘り多くの書物屋を知つてゐないが一二を挙げると、法律書を専らにした、明法堂と云ふのがあつた。中學程度の教科書を専らとした敬業堂と云ふがあつた。亦數學書を主とした開進堂と云ふがあつた。又法令を専らとした八屋新助の店もあつた。此等は一時成功したが、有斐閣（これは洋本から轉じて法律書

を専らにするやうになつた)の外は皆前後して亡びた。中西屋と云ふ洋本店は、一時丸善と拮抗したが、今は丸善に併合されて其支店となつてゐる。九段下には、堅木屋と云ふ古洋木屋は、今もやつてゐる。

法令や教科書で一時成功した本屋も永く續かず多くは仆れたが、其間に立つて成功を積んだものが富山房と三省堂などで、彼等の力の加はるに随つて、出版界の難事業である尨大の種々の辭典を編纂出版して、それが成功してゐる。斯る事業は實力が富まねば出来ないことで、一書を企て、成功を見るまでには、十年若くは二十年も費さねばならぬものがある。其店に充分の信用が無れば出来ない業で、辭書を専門とするやうな書店の出來たのは、實に書店の一大進歩と謂はざるを得ない。

世間では書物屋を評して水商賣だと云ふてゐる。此評は書物屋商賣の危険を云ふたので、一概に流行を追ふて見込出版などをするものは、中ることもあれば、外れることもあり、外れば、幾萬の書物を切り棄ねばならんから、危険の伴ふ商賣であることは事實であるが、併しおのづから除外例もある。即ち辭書出版を專一とするものなどは之に庶幾い。其譯は辭

書の編纂ほど骨の折れるものではなく、一人の力で之をなせば一生を費すものもあり、衆多の力を併して作るもの、例へば百科辭典のやうなものも、其冊數の多いだけに、それだけ十數年を経れば成功に至らない。これは流行など云ふ潮流を超越し、容易に競争者の起らないので、堅實に丹精にやり遂れば、それが長く行はれるから、時に改訂増編を加へれば、永久性を有つので、これは水商賣とおのづから選を異にする。斯る成功の本は、目前の利を争はず堅實の歩みを以つて最良の圖書を作れば、書物商賣も確實であるが、これが爲めに時間と金力を要するから、結局資本主義の勝利に歸する。

如上の成功者は一二に止まらないが、富山房書店を例に取つて、其成功の偶然ならざることを云へば、この書店は小野梓氏の開いた東洋館書店の後身である。東洋館は成功しなかつたが、その主義主張は立派なものであつた。その信條に云く「利他則ち自利」と。自ら利せんとするには、先づ他を利さねばならぬ、其作る書物は假令多くの年月を費しても、最上のもので無ければならぬ。不朽を期するもので無ければならぬ。そして廣く賣らねばならぬ、廣く及ぼすには價を安くせねばならぬ。斯くすることが他を利するの法で、其實自から利する

の法であると、東洋館は此主義を以つて好書の出版もしたが、時利あらず終に閉店するの已むなきに至つたが、後繼の富山房主は小野氏の門生で、小野氏の遺訓を終始守つて、氏の理想を著々實現した。其堅實の歩武も、其不屈の耐忍も、良書を作る熱誠も、廣く賣る努力も、皆氏の遺訓の現れで、富山房主は小野氏の爲さんとする處を氏の理想通りに行つたのである。其世に出した多くの出版物、殊に大部の辭典類はこゝに列擧するまでもなく、餘りに有名であるが、自分の與つたことの一二を擧げて見ると、吉田東伍博士が一介の書生として、私の書生部屋で著した『日韓古史斷』は、史界を畏服した名著であるが、決して大衆向のものでなく識者のみに讀まるゝもので、云はゞ賣行きの廣いものでないのを、富山房で出版を敢てしたのはそれを名著と知つたからで、決して利の爲ではなかつたが、この出版は富山房の識見の現れと見ることが出来る。亦『大日本地名辭典』は日清戦役後吉田博士が微力なる私に頼つて編纂し着手したものであるが、自分の力では到底遣り切れず、富山房に移して編纂を繼續して、完成まで十有三年を費した。これは多分富山房で辭書を出版した始めと思ふが、其頃の富山房は決して今日の如く隆盛のものでなかつたのに、よくも此編纂を持續したと、今更な

がら感ずるが、これも畢竟一種の着眼で、成功を他日に期する根強き經營が、早く此頃から現れたとせねばなるまい。完成の後、果して此書は不朽の名辭典と賞讃され、吉田氏もこれにより博士の學位を得た。富山房が其後追々多くの辭書を編纂したのも、この經驗が土臺をなしてゐるであらう。富山房は此地名辭典を作り出すと共に、一人の文學博士を産出したとも云へるのである。

三省堂が老大の百科辭典を出版するに當り、自分も聊か其經營に與つた爲め、其苦心の程をよく理解してゐる。その完成の時には、自分は會長大隈侯の名を以つて其苦心の経緯を録し、それを印刷して關係の人に廣く配付したこともある。それは今爰に引かないが、百科の辭典は、幾百の學者を勞して集大成するものだから、編纂の面倒なることは、實に涙ぐましいものである。併し辭典の出版ほど大功徳を社會に與へるものはないから、神保町は斯る生産地として、文化のため光輝あり名譽ある地と云ふを憚らぬ。

神保町に最も多いのは古本の店である。全然古本に限る店と新刊とを取交ぜた店もあるが、便宜上古本屋として觀察するに、これも文化の爲めには大切な務めをなすもので、斯る機

關がなければ、古書籍の供給は何んに求むべき歟。すべて物貨には問屋があり、問屋に就けば何でも得らるゝものであるが、古本と云ふものには問屋が無い。古本屋が隨時種々の手段をもつて買ひ集める勞は、決して輕微とは云へない。そして此營業は餘り利得の多いものでなく、唯だ上品の商賣であるだけに、喜んで其業を營むものもあるが、其營業は世相の變に依つて屢々困難を感じる傾向が見えて、店賣りだけではなか／＼おツつかず、書林が聯合してデパートなどに持出して客を待たねばならないことになつて居る。一方古書を漁る一種の趣味家も追々減じてくるし、埋没の古書を居ながら買集める事も大震災以來著しく困難になつてきたが、よくも其業務を持続してゐるものだ。實際神保町の如く連簷櫺比の書物町があるのは客の爲めには便利なことで、書物を尋ねるに一店に無ければ隣店で得らるゝ便利がある。書物屋同士も又一ヶ所に集つて居れば、互ひに有無を通する便利もあるのであるから、店の盛衰は頻々とあつても、此書物屋町は其特色を保ち今から三四十年の既往に較べると、可なり立派な店も出來て來た。東京の名所とも云ふべきは此所で、苟くも古書を漁らんとするのは、都人士でも地方人でも足を運ばねばならん。こゝは古文豪の位牌や墓の遺蹟の存する

所とも云ふべく、訪書家の中には故人の墓參りの氣持で、各店を訪ふものもあらう。圖書館は多くの圖書を藏すれども、購ふて已の有とすることが出來ないが、こゝは獲得の出來る便利がある。或は此區を精神上の食物の供給所と見れば、學者や研究家や學生などの流連の處であつて、こゝに流連するものは酒食の害を受けず、相當の智識を獲得することが出来る。此地に據つて研究家が如何に多くの資料を得たか、好事家が如何に多くの珍書を得たか、大藏書家の書架を充した本地はこゝに在ることを思ふと、文化に貢獻した其功は、決して小なりと云ふを得ぬ。

紀

行

高野詣

自分は高野山に三度登った。初度は明治三十九年七月で、まだ女人禁制時代で路も峻嶮であつた。二度目の登山には女人禁制が解かれ、道路が改修されて、女子も徒歩で上下し得るやうになつてゐた。第三回目には或る地點まで鐵道が架設されてゐた。左に録する紀行は、初度の登山で、大阪滞在中二日の閑を偷んで游んだ時の記である。

高野へ行くにはいろいろの路がある。自分は大阪の湊町から奈良行の汽車に投じ、王子に下車して和歌山行の汽車に乗り換へ、下田、高田、新庄、御所、壺坂、吉野口、北宇智、五條二見須坂、橋本の諸驛を経て高野口に下車した。高野口は舊名名倉と云ふ所で、紀州ネルの産地である。

高野口から山に至るには、九度山を経て椎出に出で、それから神谷に入つて女人堂に達す。これが自分の取つた徑路であつた。或は橋本より學文路、河根を経て神谷に出る道もあるが、

余の取つた徑路は捷路で、且つ最も便利とされてゐた。高野口より女人堂まで五十丁一里で三里ある。この三里の間、高野口から椎出の間は石は高いが俾は利いた。椎出よりは坂路で不動坂、花折坂、などが有名な峻坂である。自分は難路に辟易して籃輿を備ふた。元來自分は籃輿が好きで、揺られながら、輿丁から種々の話を聴くことを興味としてゐる。

此日は朝の内、晴天であつたが、吉野口邊から雨が降出し、一時大雨となつたが、幸ひに高野口を發する頃には漸く小雨となつた。紀之川を渡つて九度山を過る頃は、幸ひ快晴を得た。自分が紀州の地を踏むことはこれが初めてであるので、此國の一山一水に多少の興を感じた。紀之川は例の音無川の下流で、九度山には眞田幸村の舊蹟があり、又此處に弘法大師母堂入滅の地もある。慈尊院と云ふ寺が即ちそれである。此川を渡つて更らに一水を得。オネ川と名づけて、高野の材木を伐り出す河である。これより十丁程行くと風景絶佳の所がある。山麓の處に石が流に臨んですべて其骨を露はし、其山骨が無遠慮に出張つてゐる爲めに水路が窄まつて水と崖石と相搏つて、其飛沫の散るさまや奔湍の峽間を過ぎる光景や、崖上に躑躅の花が咲き亂れて水に映するさまなど、何とも云へない風趣があつて、しばし自分は足を停めた。

椎出は寒村ながら戸數百五十もある。人も知らない僻村であつたのが、今は高野詣での捷路となつて旅客が往來するのみならず、國有林の爲め大切な處となつた。即ち材木の貯蓄所もこゝにある。吐き出し場所も亦こゝに在るのだ。此驛を發して坂の上から下阪すると、幾萬本の木材が、宛かも箸などを積み累ねた様に整然として深溪を埋めてゐるのも壯觀だがこれが貯木場である。此邊には材木の爲め一條の林道があり、亦椎出から高野口まで輕便鐵道のあるのも國有林のためであることは言ふ迄もない。

椎出より神谷に至るまで、坂は追々峻しく石も亦高くなつてくるが、路傍に赤花、黒花と云ふ植物が叢生してゐる。これは高野紙を作る原料で、纖維がひどく堅く、漉き出す紙も堅硬で、雨合羽や傘などの紙として最も適すと云ふが、産額は餘り多くないと聞いた。神谷は椎出に比すれば村柄がよく、高野の若法師も此邊に来て遊興をやるさうだ。此驛を距る五六丁にして鬱林を前面に望む。これが即ち國有林である。これより尙十數丁往くと急流に架した一橋がある。これぞ所謂の極樂橋であるが、行人が艱む峻坂はこれからであるから地獄橋と

云ふべきかも知れないと一笑した。此橋を渡つて不動堂までの間が不動坂で、闊い樹間を潜つて行く急坂で、籠輿へ乗りながら輿丁の喘ぐのを、氣の毒に思ふ程の難所であつた。今は此難坂を避けて通らないが、あの峻坂あつてこそ、高野は凡山でないやうに感じたのはひとり私のみではあるまい。

自分はこの幽鬱の難路を経ながら、高野山の僧徒が山を上下するに、どんなに苦行の修練を経たかに想ひ到らざるを得なかつた。殊に此邊から満山を埋める林が一層深くなつて、此靈山に一層の崇高味を添へてゐる。流石に祖師が千歳の後を慮つて培養し、且つ斧斤の入るを禁じた老杉古檜は雲間に聳えて天を遮り、幾百尺の檜枝が偃蹇して、龍の如く通路を遮つてゐるさまは、此靈山ならではの見難いものと感賞した。

漸く不動堂に達して前路尙峻坂あり、花折坂と云ふ優しい名だが、其峻は敢て前者に譲らない。且つ鬱林の中、遠く瀑が聞えるので一層境を幽鬱にした。

漸く女人堂に達したが、山の制規として、之からは婦人は輿に入るを許さなかつたもので關所の址らしいものが残つてゐた。これから聊か行くと境は全く變じ、俄かに別天地に出た

様な氣がした。即ち、山内の絶巔にある珍らしい平坦の地で、鬱林はこゝに至つて限界を去り、清明の靈地が出現するのである。

關所を通ると突き當りに、參詣人所縁坊取調所があり、大きな簿冊が澤山積み重ねてあつた。こゝに旅客は先づ所屬の府縣を告げて宿割を定めるのである。輿丁に聞くに、山内百二十八個寺ある中に、旅客を宿泊せしむる寺院は約九十あり、三府の客は何れの寺院に泊るも隨意だが、他は定つた所に就かねばならんと云ふた。自分は其頃自分の、屬する寺院の清淨心院であることを心得なかつたので、大阪の旅舎の添書を齎らして普門院に籠輿を横付けにした。時に午後六時二十分、即ち高野口よりこゝに至るに、五時間と三十分を費したのである。

普門院は相當の寺で、自分の案内された上段の間は廣くはなかつたが、庭に面した瀟洒な室であつた。十三四の可憐の雛僧が左右に侍して晩食の給仕を司り、食饌は一切精進料理であつたが、調理は案外上手であるので、自然酒を過した。食事後僧侶が挨拶に出て來たので先づ先考の分骨を托し、種々の談に入つた中に、自分が早稻田大學に關係がある所から、語つて云く、こゝにはもと大隈伯の舊主鍋島家の寺であつたが、前年祝融の災に罹つて烏有に歸

した。多くの什物の内には鍋島侯寄進の伊萬里陶製の膳椀五十人前があつた。これが灰燼となつたのは惜むべきである。又云く、一山の實とも云ふべきはこの森林であるが、これは幾んど全部國有となり、金剛峰寺の私有に屬してゐるのは三千町歩に過ぎないなど語つた。

翌朝拂曉凄じい強雨があつた。自分は其頃冷水摩擦をやる習はしであつたから、全裸體で庭に飛び出して強雨に浸つて全身の爽快を感じた。六時頃佛前に案内され、寺僧は先考の靈位に對し誦經を行ひ、自分は恭しく香を獻じた。驟雨も晴れたので、食後珠數屋の小僧を案内に山内の遊覽に出かけた。普門院より町を経て八丁程行くと、一の橋と云ふ所に到る。これからが墓所で、橋を渡ると天を摩する古檜が兩側に立並んでゐて、其境の凡ならざるを先づ感じた。此山は海拔三千尺の高山であるのに、その絶頂に五十町四面の平地のあるのも一奇だ。此墓所も平坦な砂地で、奥院まで十八丁、中に清冽の川が流れてゐる。自分が二十數年、一遊を欲して夢寐にも忘れなかつた所は、即ちこの神聖の地區である。此處は天子皇族、諸大名を始め、偉人巨族の墓の淵藪であつて、英國で云へば、ウエスト・ミンスターに比すべき所である。こゝには幾千の英雄豪傑が靜かに眠つてゐる。曾ては鎬を削つて吳越晉ならざる

敵味方が、墓を聯べ膝を交へて平和に眠つてゐる。元龜天正頃の豪傑の墓が最も多くあるが、墓を一々點検すると宛かも武鑑を見るが如き趣があつて、墓辭者流をして低徊去る能はざらしむるものがある。尙此境内に一種の趣味を添ふるものは、一丁毎に石造の道標があつて、之を町石と云ふてゐるが、多くは名流の寄進に係り、徳川家康の刻名のあるものもあり、其寄進者は皆歴史中の人物であるから、それ等を見ながら歩くのも一興である。

行く／＼祖師の墓のある奥の院近くに到ると、流れに一橋が架してある。山内で最も神聖とする所は此の奥の院で、人を殺したものは無事に此橋が渡れないと傳へてあるので、豊太閤も之を渡るに躊躇したが、無事に渡れたので、俺は天下國家の爲め人を殺したのだから、佛罰は無い筈だと、隨從の武將に云つたと云ふ橋はこれである。すべて此境内にある墳墓は形式は區々で、大小さまざまであるが、概して古いのは質朴でありながら、どことなく權威があり、皆苔むして蒼古の味ひがある。私は特に薩摩侯が、朝鮮の役で多くの人を殺した其菩提の爲めに建てた墓を態々尋ねて、之に對して殊に感慨が深かつた。

歸途には金剛峰寺其他の名刹を訪ふたが、數次の火災で、舊態を存する寺の少いのに失望

し、寺院に歸つて匆々輿丁を促して下山し、午後三時の汽車に投じて歸路に着いた。

北 游 紀 程

上 篇

この篇は余が初度北海道行の紀行なり。明治三十三年七月廿日東京を發して八月六日に歸る。此行松島の勝を探り中尊寺を訪ひ、北海道にて夕張炭山を見、アイヌの居を訪ふ等見學するもの多し、同行は宗家の湖月翁にて一僕を伴ふ。此篇上下に分つもの續讀に便せんとする微意に外ならず。

七月廿日

午前三時に起きて旅装に取りかゝる。昨日來の雨未だ收らず、小雨なれば意とするに足らずとし、家人に別を告げ倉俣停車場に至れば、湖月翁先着待合室に在り。四五の見送人もあり、定刻二等室に入らんとするに乗客満ちて一席を留めず、仙臺まで直行の豫定なるに、

斯くては窮屈忍び難しと、遽かに一等室に乗り移るに、こゝには一客もなし。翁はまだ朝食前なりとて、僕に命じて麥酒など取り出させて朝酒を始められた。酒次、翁の手荷物の餘りに大なるに氣がつき、携ふもの何と問へば、翁笑つて答へず。徐ろに鞆、提籃を開き、取り出して示さるゝを見れば、曰く雲丹曰く罐詰曰く食鹽曰くからし、曰く醤油、曰くサンドウキツチ、曰く鹽引、曰く小皿、曰く網わたし、燭臺、氷切、臭氣止、等に至るまで備はらざるなく其用意の周到に舌を捲いた。自分も多少の用意ありとて、手籠から種々のものを一つ一つ出して陳列すれば、車室は宛がら勸工場の觀をなしたるに一笑した。

車中前途の行程につき協議を遂げた。當初は横道に寄らず、青森まで直行し、松島の歸途萩の濱に上陸して遊覽せんとの豫定なりしが、つくづく思ふに、仙臺附近には松島の外に多賀城址あり、燕澤の碑あり、平泉には中尊寺あり、歸途には心急いで、見はぐる事なきにあらねば、寧ろ仙臺に二泊して、附近の勝を探り、更に中尊寺に半日を費すべし、と余より提議せしに、翁は直ちに同意され、盛岡には元新潟裁判所の檢事正たりし、北條氏今は知事となつて居る筈、訪問して久瀨を叙せんなど語るゝ内、汽車は早く大宮に着した。

大宮より宇都宮まで記すべきことなく、宇都宮は東京仙臺間の四分ノ一道程に當り、四五の驛を過ぎれば那須曠原に出づ。こゝは東西六里南北十里と云はるゝ茫々たる原野にて、入口に帯川あり。昨年烈風の爲汽車が鐵橋より墜ち、十數の人の死したる處にて、路傍に遭難者の靈を弔ふ六字の名號を刻したる石碑建ちあり。

白河附近に至り、漸く渴を覺え、翁の賛成を得て酒を飲み始め、談笑の間、能因法師が所謂、「みやこをば霞と共に立ちしかど秋風ぞふく白川の關」の白河に着した。時器を検すればまだ十二時前なり、東京より僅かに半日にして早く此地に着す、能因を地下に起して之を知らしめば、何とか云はん。

白河より福島まで約二時間を要す、醉餘圖らず坐睡して此間を夢裡に過ぐ。起きて案内記を検するに、戊辰の戦地として有名な二本松は夢裡に過ぎたり。福島には伊達家の重臣片倉小十郎の城址のある白石を経て、埋木の産地たる名取川を渡り、間もなく車掌は一聲高く仙臺着を報す。時恰かも正六時、直ちに停車場前の陸奥ホテルに投ず。此ホテルに余を知る越後村上出身の番頭あり、余等のため周旋をつとめ萬端便宜を得た。

七月廿一日

今朝、湖月翁に呼び起され時器を検すれば、四時二十分なり。窓を推して天候を窺へば、前日來の淫霖霽れて、滿腔纖翳を留めず、翁と共に快と叫び、祝杯を擧げんと騒ぎ立つ。酒さへあれば下物は行李中に在り、幾回も婢を召して酒を求め、各室の客皆邯鄲郷にあるに、吾等の室のみ天明前早くも活氣横溢して、入り来る番頭を驚かしたり。

吾等は番頭に問ふて曰く、松島の勝を探るに、先づ何れに行くを可とする。番頭云く、先づ富山に登り、全景を眺眺して後松島に到るべし。又問ふ、多賀城を觀るに如何せば可なる。曰く、松島より舟行鹽竈に達し、鹽竈より車行多賀城址を經、岩切の停車場に到り、汽車にて歸仙すべしと、行程爰に決し七時發の汽車に投ず。

仙臺より富山に至るには汽車で岩切、利府の二驛を經て松島驛で下車、それより俵を備ふて一里有半、手樽村に至り、それより俵を棄て、四五町の急坂を攀ち、山巔に達するなり。余は最初思へらく、松島驛に下車せば松島の一端を見るを得べしと、何んぞ圖らん、松島は

數村合併の村名にて、此驛よりは島嶼の片影をも見る能はず、唯だ田間に小丘陵の起伏を見るのみ、これ陸地の松島と云ふべき歟。

富山に登る坂險峻なりと雖も僅かに四五丁に過ぎず。青年時代なりせば一氣に駆け登るべきに何事ぞ久しく用ひざる雙脚は地膨れの抵抗に遇ふて登攀容易ならず、屢々憩ふて吾ながら意氣地なきを一笑した。案内の車夫が、明治九年聖駕北巡の砌には、畏くも主上は玉趾を勞し給ひぬと語るを聞き、吾は赧然として勇を鼓し、漸く山頂に辿り着き、密樹の間に山門を認め、走り付いて見ると、荒れはてた表門は堅く鎖し、「御幸門」の標札がうちつけあり、左折して行くと家あり、北門を潜り寺の後庭に入れば、石巻邊から持ち來りしと覺しきスレトト石三ひら四ひらあり。之を踏んで、更に前庭に入れば、こゝは一望海潤、居ながら松島全景を眺視するの處で、前刻經來りし鬱樹天を蔽ひ、榛莽道を塞ぐ陰鬱の景は、俄かに快潤の景と變じ、吾をして覺えず快哉を呼ばしめた。急に望遠鏡を取り出して群島を望むに、遠くして水に連なるものあり、近くして散するものあり、聚まつて群をなすものあり、伏すもの起つもの、走るもの止るもの、疎なるもの、密なるもの、隠なるもの、顯なるもの、曲り

て灣をなすもの、一路行松を通して陸と接するもの、一團の群島其間の海水の疏通を絶ち水田と成り化したるもの、千態萬狀、一々形容する事が出来ない。川田齋江が「百千の珠玉が大瑠璃盤に散らし宛轉陸離、手に唾して拾はんとすれば目が眩し神が恍し、擇ぶ所を知らざる如し。」と云へるはよく形容してゐるが、遠慮なく云へば此景區は美は美だが、奇峭の無いのが缺點であると思ふた。殊に追々海が淺瀬となり、陸地に變ずる事が餘り遠い事でもあるまいが其時は前刻見た陸上の小丘陵の如き殘骸を見るのではあるまいかなどの想像も起つた。馳眺の後、堂に入り小憩した。堂は荒廢に委されてゐたが、嘗ては聖上の行幸を得て、寺の縁起に大なる光彩を添へた。大仰寺はその名の如く大仰寺となつた。苦茗を二三椀喫し匆匆辭して山を下つた。

山麓に待せた俵に乗り、松島に向つて行くこと一里有半、古木鬱然天を摩し、二條の石砌遙かに海濱に達し、仔細ありげな境地に着した。これぞ瑞巖山圓福祥寺であつた。乃ち俵を降り一行歩いて山門に入る。左側に岩壁を穿つた洞窟あり、廣さ三丈、これを無相窟と云ひ俗に法身藏と云ふのは、法身禪師坐禪の處であるからで、禪師が北條時頼と對話の場所もこゝ

だと言ひ傳ふ。窟前左右に二大碑を見る。楊柳觀音の立像全身が彫刻しあり、吳道子の筆と傳へてゐる。山内の正面に門あり、木材腐蝕、蒼古の味掬すべし。慶長十四年伊達政宗の建る所と云ふ。門の右側に一大豊碑の屹立するあり。本寺の沿革を叙し、聖駕駐蹕の榮を記す。寺内に入り案内を請ふ。寺の縁起は大略左の如くである。

本寺は往昔の松島寺にて、仁明帝の承和五年慈覺大師の創建に依り、北條時頼に迫んで之を修造し、法身禪師を開祖とし、更に改めて圓福寺と云ふ。法身は宋に入り無準に教へを受けしもの也。爾來唐僧の來りて住職たりしもの歴代相踵ぎ、慶長年度に政宗大土功を起し、自家累代の菩提寺となしてより、面目一新、今日の壯麗を致せしなりと云ふ。

佛殿は竪二十一間横十二間、紀州熊野の良材を採り建築すと云ふ、壯大驚くべし。堂の正面に天竺より渡來の觀音を安置し、其傍らに政宗甲冑の像を置く。眼光炯々人を射る。各堂各室の障壁は、概ね金銀地にて山樂、永徳、信高、孝信等の筆に成り、楹欄の彫刻又精を極め、眼界に入るもの美術の粹でないものはない。就中、上々段の間と云ふは、最も壯麗を極め、政宗自身之を御座の間と云ふた。何人と雖も之に入るを許さざりしに、聖駕北巡の際、

玉座となつたことを知つたら、政宗も定めし満足したであらう。

私は瑞巖禪寺を訪ふて妙に感じたのは、奥地によくもコンナ立派なものがあると云ふ事と禪寺不似合の豪華な裝飾のあることであつたが、それは政宗と云ふ豪傑と、其大なる富とを考へると、謎は忽ち解けた。あの負け嫌ひの政宗は、上國の禪寺の清淡を旨とするのを見て、その逆に出でたのであるまいか。

寺より右折し觀瀾亭に抵る。此亭は松島の南の海角、觀月崎にある松島名區の一つである。傳へ云ふ、政宗豊公に伏見の一亭を申受け、それを江戸邸に置き、後こゝに移して別墅としたと云はれ、十疊二夕間程の小亭で結構は美でないが、その占める風景はすばらしい物だ。

觀瀾亭見終つて海岸を歩す。時正午を過ぐ。枯腸枵然として不平を訴ふ。一亭に憩ふて一杯を傾けんことを欲す。案内者曰く、五大堂目睫の間にあり、一覽後にすべしと、即ち松島ホテルに行李をおろし、五大堂に抵る。これ又名區の一にして、村の東端に斗出せる一小半島なり。二橋あり、巖を隔て、千仞の海に架す、橋板大名縞の如く、板と板の間に間隙あり、橋上海水を下瞰し戰慄するものありと云ふ。渡れば小堂あり、大同年間坂上田村麿の建てる

所にて五大明王を祀る。島上老松の垂れて水に臨むものあり、趣致を覺ゆ。往時は藤羅橋邊に繁茂し、一層の幽致ありしと云ふ。匆卒去つて松島ホテルに投ず。

ホテルの高樓眺望佳なり、氷塊を嚼んで麥酒を傾く。兩腋初めて清風の起るを覺ゆ。酒次、前程を議す。樓主曰く、小舸に艤して鹽竈に至るを可とすと、偶々烈風あり灣内波濤高し。大竹生直ちに杯盤を收め、舟に乗らんことを勸む。余は翁の今朝の夢を憶ひ起し戯れに云く。知らずや、翁今朝の夢は凶夢なりし、無數の貝の身體に附着したと云ふは、覆舟の兆にあらざるなきかと、大竹生色を失す。余笑つて曰く、是れ酒家の狡手段也、卿の性急を懲らすに過ぎずと、吾等は靜かに酌んで時を移す。幸ひにして風歇む、即ち舟に上る。一島の左邊に横はるものあり。これは群島中の最も大なるもので雄島と云ふ。舟を寄せて上陸す。此島東西二島に分れ、一橋通じて二島を連絡す。風景甚だ雅趣あり。把不住軒と稱する小庵あり。庵主に請ふて頼賢の碑を見る。文は元僧寧一山の撰ぶ所にて、宮城三碑の一と稱せらる。

雄島を辭して舟に上れば風又起る。篙師棹を收めて帆を張る、滿幅の布帆風を孕んで舟馳すること矢の如し。幾多の小嶼忽ち來つて忽ち失す。篙師一々名を云へども記憶に違あらず。

行くこと七八町にして篙師は切りに扇溪の勝を説いたが、時間なき爲め割愛し、終に鹽竈に着す。

鹽竈に達する途中、往々海藻の瀰蔓するを見る。干潮の時、舟底動もすれば海藻に膠して阻止せらるゝことありと、これ遊人の殺風景となす所であるが、自分はそれよりも、この海の年を追ふて漸く淺く、遂に桑田に化し去つて、アトラ美景を失ふ日の、甚だ遠きにあらざること豫想して、翁と與に歎息した。

鹽竈港は規模大ならざれども、灣内水深く優に大船を埠頭に繋ぐことが出来、殊に鐵道も埠頭に接して居るので、通運に便宜の地であることを知つた。俵を傭ふて鹽竈神社にと急いだ。神社は村の一隅千家山に在つて、石階九十段、皆長さ十餘のスレート石を敷き、絶巖は老杉目を蔽ひ、古祠嚴然として立つ。傳へ云ふ、もと古釜を神靈としたるに、伊達綱村に至り、左宮に武甕槌命、右宮に經津主命を祀り、別宮に鹽土翁を祀ることとなつたと、社前に泉三郎が献した鐵の燈籠がある。古色掬すべきも、一部修理を経て完璧でないのは惜むべきである。

鹽竈より多賀城址まで一里有半、俣を促して行く。市川村より一老父を案内に頼み、車を下り本道を右に折れ、田間を四五町も行くと、老杉の四方を囲む所に一丘あり、これぞ城址なり。案ずるに多賀城は聖武天皇、神龜元年蝦夷に備へんとて、鎮守府將軍大野東人、始めて置く鎮守府なりと、古史に又淳仁帝の天平寶字六年、鎮守府將軍惠美朝臣アキカ之を修造すとあり想ふに聖武の神龜は年を距る千二百餘年にして、此地の形勢又城址のおもかげを備ふ。然らば直ちに之を千年以上の遺跡として、疑なきが如くなれども、斷礎の存するもの、歴々たるを思ひ、附近の形勢の餘りに變化のないことを思ふと、多少の疑なきを得なかつたが、僻陬の地にあるが故に、斯くあるのかと強ひて理屈をつけて、匂々碑を見んとて此處を去り、舊路を踏み本道に出て十數歩行くと、右側に一民家があり、そこに小丘があつて其上に周圍格子を繞らした堂内に碑が立つてゐた。入口には自然石に「つぼのいしぶみ」と刻した標石が立つてゐたのを先づおかしく感じた。壺の碑と云ふは舊南部領、七戸附近壺川驛千曳神社内にあるので、往年官命で發掘を試みたが碑は出なかつたと云ふ。地名に據つて案ずるに、南部領が壺碑の故址であることは疑ひがないやうである。唯だ其碑は滅びて世にあらはれないの

で歴史家は動もすると多賀の碑を同一物となすけれども、實は誤つてゐるのだ。格子を隔てて碑の直立するのを見ると、覆堂の内に保護された故か、碑面は鏡の如く光澤あれども、想像せしほどの古色が無い。これ或ひは原碑に做つて後世の再造に係るものではあるまいか。此碑に付ては歴史家の間に兎角の議論がある。自分の直覺でも疑義無きを得なかつた。宮城縣下に多賀の碑と並び稱せらるゝものは燕澤の蒙古の碑である。傳へて云ふ、元寇の吾を襲ふや、利あらず船覆没して生還するもの僅かに三人、元僧憐んで後日密かに建つと傳へてゐるが、碑面には五十一字を刻すれども、省畫多く義も判じ兼ねるので、後世の偽作でないかと疑はれ、「十符の菅薦」と云ふ書には、藤塚知明の贋作としてある。自分は此碑も一見たしと思ふたが、之を訪へば汽車に乘るに不便が起り、日も暮れかゝつたから、割愛して直ちに車を飛ばして岩切に到り、汽車に投じ夜に入り仙臺に歸着した。

七月廿二日

湖月翁例に依り早起、議して云ふ、仙臺に二泊すれども未だ仙臺の市街を見ない。之より

見物せん。朝食は汽車中に取りも可なりと、乃ち車を促し車夫の案内するに任せ、先づ脚フツヂが岡に到る。こゝは往時躑躅を多く植ゑ、其花を以つて衣帛を摺り、「つゝじ摺」といへる織物さへ産せし程の所なりしに、今は第三旅團の兵營置かれて、舊址に一本の躑躅もなし。但だ營前に數十株の老櫻あり。何れも枝を垂れ、姿態趣致あり。此地は藩時代の調馬所にて、今も其遺址を存す。これより寺町通りを經、一望廣瀨の處に出づ、所謂宮城野と云ふは此邊にて今は師團練兵場となり、萩などは公園に移されて、こゝには一株も留めず。昔此地の萩は頗る名高く、陸奥守爲仲は十二の長櫃に萩を納めて京都に上り、大いに持て囃された事が『無名抄』に見えてゐる。此處を距る丁餘にて二碑あり。結構宏壯、これ政岡の碑なり。下車して見るに墓面に、「三澤氏初子墓」と刻し、背面の文を讀めば、初子は龜千代則ち綱村の生母なる事を知り得た。俗間之を保姆の墓となすは非なり。他の一碑は池田振子の墓で、伊達家の二代忠宗の配なり、華表の側らに大樹あり。案内者は伽羅の木だと云ふ。尙數丁行き米が袋と云ふ所に出づ。正宗が當初城を築いたのは此地歟。此處より下車して、伊達家の廟所經ヶ峰を訪ふ。廣瀨川を隔て、杉檜蒼鬱の高陵あり。これぞ廟所で大華表を潜り、石燈數十級を

拾つて拜殿に達す。瑞鳳殿の扁額あり、此拜殿縱七間横三間、廻廊あり、梁柱の彫刻華麗を極む。後ろに本殿あり、政宗の永く眠る所、侍臣の殉死者二十餘名の墳墓も本殿の左右に在り、坐るに當時君臣の情誼の厚かりしことに思ひ到り感慨に打れた。匂々境内を出で廣瀨川を過ぐ。偶々香魚を漁するものあり、購ふて旅舎に歸れば發車の時既に迫る、倉惶行李を修め、九時廿五分の汽車に投ず。

仙臺より松島までは昨日經過の地なり。松島を北に去れば、鹿島臺、品井沼、澁栗沼などを經て花泉に達す。これぞ岩手縣に入り始めての停車場なり。偶々此驛に、白髯秀眉の人手車室に入り來る。日下部鳴鶴翁なり。一の關を經て午後一時二十分平泉に着す。こゝにて下車し一茶店に憩ふ。

此邊地僻にして俾なく、氷塊なく、麥酒なく、茶店は不潔にして居るに堪へず、殊に今日は午後より蒸し暑く、一行大いに困む。村酒を齎らしめ茶店の主人を案内者として暑熱を冒して直ちに發す。北の方面道を行く五六町にて、新舊二路の岐るゝ所あり。これより杉並木の間に坂路あり、登ること四五丁にして中尊寺の舊址に達す。此邊廢堂古庵の散在するもの

多し。案内者喋々古蹟を説けども、言語侏離辨する能はず。此行吾は「平泉志」「聞老誌」を携ふ。自ら云ふ、吾こそ最も達したる案内者なり、亦聊を煩さすと。

平泉は陸奥國、磐井郡に在つて舊仙臺領なり、此地の遠近に知らるゝは中尊寺あるが故で中尊寺は亦俗に、所謂光る堂によりて知らる。或は比するに日光廟を以てするも、光る堂あるが故也。想ふに光る堂は豪華ならざるにあらず、然れども平泉訪問の價あるは、主として歴史的關係に在り。山河の形勢扱ては宮殿堂宇を研究するの頗る趣味ある故也。

吾等は此地を踏んで、坐ろに磐溪翁の詩を憶ひ起さざるを得ない。

三世豪華擬帝京、朱樓碧殿接雲長、如今唯有東山月、來照當年金色堂

一宮楊桃是平泉、掌握二州兵馬權、上國戰塵飛不到、春風占斷九十年

抑柳平泉の舊址は、三十餘町に渉るの山、又平地に散布する所のもので、今や亂艸茫々、月冷かに鬼哭するの荒野に成り化し、卒然來り見れば、三衛豪華の跡は幾んど尋ね得べからず、蕭條たる風色は、徒らに遊人をして旅情に堪へざらしめ、興趣を覺えしめざるが如くなれども、衣川に臨んでは、遠く康平の役を懐ひ、高館の故址に對しては源義經を懐ひ、さら

に三衛歴代の在館たりし平泉館址を訪ふては、其居館を伽羅の御所と呼び、桃の御殿と呼びし其當時の豪華は、如何ばかりなりしやを想像し、光る堂を支堂とせし中尊寺が、時の天子を羨ましめ奉れるほどの名作佛像を安置せし、毛越寺の如何に壯嚴に、如何に規模壯宏なりしやに想ひ至れば、感興頓みに湧き、恍然飛閣層樓を眼前に見、熱鬧の市聲を耳邊に聞くの思ひがあるが、今は中尊毛越の兩寺亡びて、存するものは僅かに光堂經藏の二字あるに過ぎない。金色堂は土人の所謂光堂で、三間四方の小堂が木造の覆堂で覆はれてゐる。傳へ云ふ、正應元年鎌倉將軍惟康親王雨露の金装を損はんことを惜み、覆堂を作ると。堂内結構の美、金色の燦、丹青の麗、人目を眩して壯觀言ふ可らず、堂中三壇を構へ、各々佛像を置き、壇下に三代の屍を埋む。

金色堂に隣つて一小堂あり。即ち經藏で、天仁元年清衡の創建に係り、もとは二層の堂なりしが、建武の祝融に上層を失ふ。堂内八架を構へ、三衛歴代寄附の一切經三部を藏す。其紺紙に金銀泥を以て筆寫せしもの清衡の寄進に係り、紺紙に金泥を以て筆寫せしは、基衡、黄紙、宋版經は秀衡の寄進と云ふ。

金堂、經藏を觀畢つて時器を檢すれば、既に一時を過ぐ、一僧房に入りて憩ふ。此房眞珠院と云ふ。新築の一室極めて清潔なり。借りて行厨を開く、慇懃らくは携帶の村釀飲む可らず。偶々寺僧野菜の味噌漬を供す、湖月翁試みに之を盃中に投じ、飲み且つ曰く、是れ唯に好下物なるのみならず、亦惡酒を醫するの効ありと、吾も亦之に倣ふ。酒飯後辭して觀月坂を下る。一字の堂あり、里人辨慶堂と云ふ。入つて見るに義經、辨慶、龜井、片岡等の遺品と唱ふるものあり、眞實遽かに辨じ難し。

豫ては四時三十分發の汽車に乗り、盛岡に向はんとせしに、停車場に着し見れば既に發車後にて、次の發車迄二時間空しく茲に待たねばならぬことになつた。寒驛の停車場には余等の外には人もなく、横臥して靜かに種々の事を案じた。先づ平泉附近の地勢の甚だ京都に似たるを感じた。山も河も奥地には不似合な温藉な形勢であると思ふた。三衡が九十年の長き上國の戰塵を避け得たのを不思議に思ふた。當時此邊が最も多く黄金を産したことを思ひ、三衡が巨富を積んだことの偶然ならざるに思ひ到つた。三衡が其自ら建てた寺を勸願寺となし得たのも、黄金の力であつたらうと思ふた。運慶に上國にもなき名作の佛像を造らせ、謝

物として與へたものが如何に莫大であつたか。嘗て讀んだ『東鑑』の此條に想ひ到らざるを得なかつた。三衡は多分鎌倉幕府などを眼中に措かなかつたであらうなどと、いろ／＼の空想に耽つて時間を費し、漸く發車時間に至り、乗車して一路盛岡に向ふ。經過の地、別に記すほどのものなく、夜十時盛岡に着、六日町の高與と云ふ旅館に投じた。

七月廿三日

朝來雨模様あり、十時四十五分出發と決し、朝餐前僕を旅舎に留めて、翁と共に市中見物旁々、北條知事を訪ふ。生憎出京不在中にて不遇、細君出でて挨拶あり。去つて市中の様子を見るに、一ト通り縣廳所在地の相を具し居れども、蕭涼たる趣あり。車夫に聞けば、戸數は約八千五百と云ふ。明治四年府縣分畫の時、陸中を南北に二分し、北部に盛岡縣を置き、南部に水澤縣を置きしが、後合して今の岩手縣に統轄せしことなど思ひ浮べて、旅宿に歸れば發車迄に尙二時間を剩すを幸ひ、酒を命じて時を移し、漸く汽車に投ずれば、乗客二等室に溢れて容る可らず。直ちに一等室に移らんとするに方り、偶々宗家の番頭川崎哲太郎に出遇つ

た。何れへ行くぞと問へば、北海道へ赴くと云ふ。此者しばし北海道に往復の経験あれば、吾等はよき案内者を得たりと、共に一等室に入る。此室には吾等の外客なく、翁は早く酒の用意を命ぜられた。酒にかけては時刻を選ばざる連中四人迄揃ふたので一議に及ばず、カバンや籠より下物、酒器を取出し、無遠慮に陳列すれば、宛然酒席を現出し、一行はいつしか車中に在るを忘れ、氣儘の話に時の移るを知らなかつた。忽ちにして窓外に眼を遮るものあり窓を開いて望めば、青空を凌いで八朶の芙蓉の屹立するを見る。これぞ所謂南部富士で、本名を岩手山、巖鷲山とも云ふ。案内記に徴するに、此山、盛岡市を距る北方九里、海面を抜く六千八百尺の休火山なりとあり。これより數里特に記すべきものなく、談笑の間に過ぐ。驛夫の八戸と叫ぶに驚き、起つて見れば岩手縣有數の市街地なれども、車中にては何事も分らず案内記に就て南部氏の舊城市なることと、義經の高館を遁れて此地に來りし頃は、蝦夷人のみ住みし三家村であつたことを知るのみだ。沼崎停車場に着して思ひ出したのは、壺碑の事であつた。碑の所在地は此附近の西北、坪村に在るのだ。沼宮内を過れば、茫々數里にわたるの牧場あり。これは岩手縣唯一の名所とも云ふべきもので、所謂南部馬の産地である。川

崎の語るを聞けば、かの満目天鷲絨の如き綠草は舶來の牧草で、草間に散在するは柏樹で、あつて、樹皮は靴其他の革を染める料となる故に、岩手縣は近頃意を用ひて培養すると云ふ。尻内は盛岡、青森間の幾んど半途にある處で、盛岡よりこゝ迄の地勢を總説すれば、多少の勾配ありて始終下りなり、又尻内附近には特にトンネルの多きを覺ゆ。乙供より野邊地間には軌道に雪覆ひをなしある所多し、冬時降雪の多き所と見えたり。野邊地は海に瀕する所で心氣爽快を感じた。

これより又數里の牧場を見る。さきの牧場には馬を見ざりしが、こゝには群馬の遊ぶを見て興味を覺えた。午後五時青森に着。鹽屋と云ふ旅舎に入り、今夜十時の汽船で函館に向はんとし、船中の準備を爲す内、強雨到り、一時は發船如何と氣遣つたが、幸ひに晴れた。偶此縣の同志代議士徳差藤兵衛氏が同じ旅舎に在つて、予の到るを聞き訪ひ來り、暫時談話を交へた。小雨の後、定刻東海丸に投じた。

東海丸は日本郵船會社の所有船で、噸數千百五六十噸、余は翁と室を同うし、上下二架の寢臺に臥たが、枕衾共に清潔なるを喜んだ。船中蒸暑くしばらく甲板に出て涼を納れ、今夜

は寢酒を廢して早く寝ぬ。海上波靜かに船の動搖は却つて睡氣を誘ひ、壹里程も馳せたらんと思ふ頃、はや無何有郷に入り、天明に達する頃ボーイに呼びさまされて起床した。

下 篇

七月廿四日

結束して甲板に上れば、函館港目前に在り。五時小蒸汽船の來り迎へるに、一等船客一同乗り移り、間もなく港に着。直に旅館勝田彌藏方に投ず。今朝の氣温七十六度。

けふ一日滞在と決し、東京に發電安着を報す。朝食後早稻田の校友齋藤和太郎氏訪ひ來る。氏は函館日々新聞の主筆なり。湖月翁に紹介し、且つ氏に市中游覽の案内を請ふ。齋藤氏曰く、市内特に見るべきものなし。公園、水道、五稜廓或は一覽の價あらん。之を外にしては唯監獄あるのみと、自分は監獄に多少の經驗あるを以て、聊か心動き、齋藤氏に問ふて云

く、此地の監獄、結構他と異なる所あるや、氏曰く、余と同縣の人典獄たるを以つて、常に一見を勧められ居ると未だ到り見ずと、湖月翁一覽をと望まるとに任せ、典獄に紹介を請ひ、午前十時氏の先導で、先づ公園に到る。公園は青柳町より谷地頭町に接し、地積一萬四千六百坪、東西山を負ひ、山上に函館要塞を置く。北は函館港を望み、東は津輕海峽より大平洋に對し、風景雄大なり。園内に物産陳列所等あり。

監獄は公園を距る十八町、刺を通ずれば典獄懇懃に迎へて樓上に導かる。自分は典獄に種質問する所あり。一々その答を得た。此間時移り、兼て準備があつたらしく、午餐を供せられたのは全く案外であつた。食後監内を見るに先ち、典獄は失禮ながら獄規なれば着袴を要すと、出し與へられたるを見れば、擊劍稽古用の盲縞の古袴也。一笑、之を穿ち、典獄看守長に伴はれて各監を巡覽す。構造は一般監獄と異なる所なかりしも、全監悉く檜材を用ひたるは、贅澤に感じたり。余は往年筆禍に罹り、監獄に起臥した事もあれば、監内の事敢て珍らしとも思はざりしが、初めて見るものも無きにもあらざりし。即ち閤室に入りたること女監を見しこと、女囚入監の時、祕部を検する器を見しこと等にて、注意の行届き居りしは

信書認所の構造なりき。又土地柄とて内地の獄と趣を異にし、囚人の勞役は魚網を編むを専らとせり。最後に伴はれたるは炊事場で、特に囚人の午食を出し、久し振り一箸如何と云はるゝに、予は食後なれども、四分六飯と餅を試食し、湖月翁も亦喜んで箸を取られた。

監獄を辭し、五稜廓に向つて車を馳す。凡そ十五六町行き、寂寥たる野原に濠を圍らしたる石壘あり。橋あり、「無用之者入る可らず」の標札を掲ぐ。偶々一士官の出て來るに會し允許を得て見る。廓内雜草亂離、僅かに一二小屋を存するのみ、榎本等據守當時の狀尋ぬるに由なく、悵然たらざるを得なかつた。

歸宿の後、湖月翁より今夕當地の第一樓に飲まんとの勸議出で、宿の主人を召して圖るに眺望の佳なるは徳田屋ならんと云ふに従ひ、一行四人直ちに行く。前樓眺望まことに佳なり。既にして齋藤氏も來り校書も又來る。酒次例の如く縦談、翁云く圖らざりき、北海道に於て監獄を見んとは、恐らくこれ旅中の最大珍事ならんと、深く齋藤氏に謝された。痛飲十一時に及び、翁と他の二人去る。余は齋藤氏の誘ふに任かせ、蓬萊町の武藏野に轉飲、深更宿に歸れば翁と大竹あらず、川崎に問へば武藏野に在りと云ふ。余は前刻同じ樓にありながら知らざりしを遺憾とした。

七月廿五日

今日は市中を遊覽し、夜に入り汽船にて室蘭に渡るべき豫定の處、生憎朝來雨ありて外出にもうく、斯る日は一日酒に親しむがよしと勝手な理窟を附け、酒次昨夜の談が出で、翁武藏野に在りと知らば、吾も早く歸宿せざりしものと云へば、翁云く君は知るや知らずや。あの樓こそ我にも多少の縁あり、君には最も深い縁故なりと、仔細ありげの言に、何故と問へば、翁曰く、今は八十餘の老人となりつらん、島金藏と云ふものあり、此者予が家にも君が家にも仕へ、君が家の回船業を営みし頃、金藏は血氣時代で、船に乗り回り當港へは屢々往來せしが、實體のもの故島の姓をも許す事となり、其後多少の資本を以つて此地に貸座敷業を始めしに、幸ひに繁昌し、一時は大厦高樓を築き三階に庭まで作り、函館第一の娼樓と云はれたのが即ち昨夜の武藏野で、今は他人の手に歸したれど、尙扉に君の家の紋と君の家の市の記號を塗りたるもの存すれば、君に關係なしとは云ふ可らずと、意外の縁起話に自分

は驚き、斯る縁因ありと知らば、意を注いで見る可りしを、翁と共に行かざりしは不覺なりしと云ふを、翁は戯れて左まで遺憾に思はゞこれより行くべきやと云はるゝに、余の語塞がり、果ては金藏を招き寄すべしと決し、樓主に問へども其人を知らずと云ふに、是非なく其儘となつた。

朝より正午まで飲み續けたる酒に酩酊して、夕刻まで眠るべしと枕に就きしが、連日の疲労に前後不覺に眠つて、夕刻目を覺せば、六時に近く發船まで僅かに一時間を剩すに過ぎざれば、そこゝに旅装を調べ、七時端船にて函館を辭し室蘭行の敦賀丸に投じた。此船、長さ二百二十尺、噸數千五十噸、元治元年購入の老船なり。

乗船の際は微雨未だ収まらず、殊に風さへ加はりたれば、一等船客皆不安を感じ、一同接伴掛りを圍んで口々に發した質問は、前程の安否如何に在つた。接伴掛りの云ふに、個様の天候には海面瓦斯の起るを保し難し。併し當船長は永く此航路を往復し最も熟し居れば、斷じて危険の虞なしと保證したるに、一同初めて意を安んじた。船は八時を以つて錨を抜く。雨天なれば甲板に出ることが出來ず、寢室で書見などして居ると、風力は漸く加はりたるこ

とく、船體は動搖を初め、戸外に椅子などの倒るゝ音が聞えて來た。試みに寢室を出でて見れば、船は左右に動搖して人の佇立を許さないで、稍々不安を感じたが、斯る場合に一杯を傾けたらば、或は催眠の媒ともならんと、物數奇にも同室の翁に圖つた所、翁もそれよからんと同意され、船のボーイを呼んで食堂へ麥酒を齎らし來れと命じた處、其の命に應じたが、ボーイは兩脚踏躡として幾んど立ち兼ねる様を見て、ナカゝのシケと氣が付いたが、漸く食卓に就くと、激浪高く捲き來り船體遽かに大動搖を生じ、卓上の麥酒もコップも、一齊に揺り落されて、微塵に毀れた殺風景には、吾等も呆れて匆卒寢室に這込むだ。これは勿論旅中の一失敗であつたが、自分が案外船に強いことを感じたのは、此時であつた。船は幸ひに、無難に翌朝午前四時半室蘭に着した。

七月廿六日

室蘭は海軍々港の一で、西南に繪鞆崎を控へ、北に輪西山を繞らし、四時風濤の患ひなしと云はれてゐる。港口には大黒島ありて燈臺を設く。憶むらくは清國事變の爲め、軍艦の碇

泊を見ることが出来なかつた。

室蘭より札幌まで三十三里餘、急ぐ旅客は六時の汽車に乗るを便とすれど、吾等は敢て急ぐ必要あるにあらず。一行中船暈に悩むものもあつたので、十一時發の汽車に乗ることに決し、十時過ぎる頃旅舎を出で、十三町の悪路を経て停車場に到る。此のステーションは炭礦鐵道會社の經營に係り、流石に規模大なり。

汽車は二等室満員にて一等室に入る。處變れば品も變るので、此地の汽車は構造其他内地のと同じからず、坐席の幅狭き爲め通路廣く、窓は幅も丈も内地のより大きく、室の一隅に暖爐の装置あり、上端に鐵槽を設け、暖爐の烟突其中腹を穿つて屋上に出づ。暖爐の熱を藉り、槽中の水を熱する工夫なり。横に細き鐵管を裝し、之を厠に通じ手洗水となす。厠の構造も内地のと異なる。燈は蠟燭を用ゆると覺しく、柱に四五燭臺の設けあり。又坐席を挟んで作りつけのテーブルあり、讀書并に食事の用に供す。概して構造は粗なり。車中に萌黃の帽を戴ける客夫と云ふものあり。始終客席を往來す、これはボーイにあらず、警察的の職務を帯びるものと思はれた。

室蘭を發して先づ停車せしは輪西驛で、これより以西は空漠たる曠原なり。樹木の目を遮るものは蝦夷松、ト、松、柏の類にて、就中柏樹多く、總じて松と杉を見ず。隨つて風景内地と同じからず。曠原中點々小屋の散在するものあり。中に就て形式一定體裁のやゝ整ふものは屯田兵の住宅で陋小見るに忍びざるは愛儂の家である。住宅附近には多少の新開墾地あれども、何れも未だ手入れ充分ならず見受けられた。一里計り行くと、天鷲絨を敷きたらん如き、満目一碧の草原を見る。ここに丘陵の起伏するものありて、十株二十株の柏樹の點綴されたるさまは、得も云はれぬ風景にて、特に野馬が自在に駆け回る光景は、一段の風趣を添へ、内地の畫家に見せたい思ひをなした。

幌別を経て登別驛に停車中、濃霧の一紳士入り來る。刺を通すれば、即ち植物學專攻の三好學博士であつた。

三好博士は暑中休暇を利し、大學の命を受け、本道の植物探險に來たのである。昨夜は登別温泉に泊したと云ふから、先づ其温泉を問ふたが、温泉はこゝを距る一里有半の處に在り。噴火坑温泉で其實伊香保の湯に酷似し、旅館も案外整頓し居る由を語る。余は本道の風景に

關する所感を陳べ、大陸的なりと話するに、三好氏も同感を表し、廣漠たる際限のない平原が、ひとり大陸的感想を起さしむるに止らず、樹木雜草も大陸の産と同じいものが多い。即ち内地に最も多い松と杉との絶えて此地に見る能はざること、アルプス山麓にある雜草の、こゝに叢生するが如き、皆風景を大陸的にする所以で、米人の此地を漫遊するものが、本國の原野を横ぎる思ひありと云ふも、此故であるなど語られた。

苦小牧を経て少しく行くと、中津沼と云ふ大なる湖沼あり、此邊すべて草生で、樹木が甚だ少ない。追分は鐵道線路の要衝で、これより分岐して夕張に到る一線あり。岩見驛に至るまでの諸驛、別に記すべきものなし。岩見驛は砂川と幌内太兩鐵道支線の起點で、百貨輻輳の地である。行く／＼札幌に近づくに従ひ、地味益々豊沃、一望千里、新田たらざるはない。同乗の客に、此邊の新開地の賣買値段を問へば、三十圓内外なりと答へた。午後六時札幌に着すると同時に覆盆の驟雨あり、旅館山形屋に投ぜんとすれば、支廳長會議の爲め虚室なしと斷はられ、豊平館に到れば、亦同じく室なしと斷はられ、已むなく某旅館に投じ、郷人辯護士齋藤亨氏を招き、明日山形屋へ轉宿の交渉をなさしむ。

七月廿七日

朝來微雨あり。午前九時氣温七十二度、一日此地に滞在と決し、街頭を散策して本道の物産を購ふ。江戸庵と云ふに入りて飲む。齋藤氏も到る。酒次、湖月翁觀劇を發起さる。自分は事に托して辭せんとせしも許されず、終に共樂館と云ふ劇場に壯士劇を観る。此日山形屋に轉宿す。札幌隨一の旅館とて結構壯大、頗る余等の意に適つた。

七月廿八日

旅館の萬端行届き居る快よさに、朝より酒を始め、午後小樽見物に行かんと廊下に出づれば、圖らず原嘉道氏に出會した。氏は兩三日前爰に來り、今歸東の途に上らんとするなりと云ふ。倉惶別れを告げて停車場に到り、小樽行の汽車に投ず。札幌間の行程八九里、富田、輕川などの驛を過ぎ錢函驛に達すれば、これより以西は海岸にて、磯近く昆布の漂ふさま眼界に入り來る。朝里を經、長いトンネルを潜つて小樽の宇住吉に着した。

小樽は本道西海岸の要港で、灣廣く海深く、他日、本道第一の要港たるべき氣象を有してゐる。陸に小高き山あれども、地區は函館に比すれば廣く、以つて大市を開くを得べし。但し此港開けてより多くの年所を経ざるが故に、諸般の經營、尙襁褓中にあれども、他日函館を駕するに至らん歟。此港萬般の事多く創始に屬するが故に、未だ門閥の情弊なく、各々力次第で何事をもなし得べく、亦之を阻止するものもない。これを門閥既に成り情弊多き函館に比すれば、實に自由の港市で、有爲の商家の彼を棄て、これに就くもの比年相踵ぐは、決して偶然でない。

余等の札幌を發する時、早大の鳩山、高田の一行、小樽の越中屋に在りと聞き、之を訪はんとしたが、途中一高樓の海に臨んで風景の佳なるに、湖月翁先づ意動き、暫時入るべしと云ふて玄關に至れば、「鳩山博士一行歓迎會」の標示あり、余覺えず手を拍つて曰く、これ甚だ妙也。此樓風景を賞するに便なるのみならず、又同人に會し得る便ありと、樓主人に鳩山等と我等の關係を語り、眺望最も佳なる高樓に席を占むれば、隣席が乃ち歓迎會場で百餘の蒲團は既に兩側に並べて在り、余等は酒を呼んで風光を賞す。翁は灣の兩端に小嶼の點々す

る光景を面白しと、手帳を取り出してスケッチを取らる。余は鳩山、高田に會せん事を期し夕景迄待ちたるも何故か兩人來らず、大隈英麿氏獨り來る、乃ち久濶を叙して別れ、札幌に歸る。

七月廿九日

今日旭川を訪ふ豫定なりしが、事故あつて一日滞在と決し、朝餐後札幌市街を見物せんと旅宿を出づ。博物館、物産陳列場、本願寺別院等を歴訪し、終に公園に遊び、池中の一亭に小酌して歸る。

此地は全道の首府として經營されたものである。蓋し石狩は、全道の中央に位するが故であらう。首府であるから規模が大きく、街衢の區劃などは西京に擬して、井然碁盤の上にあるが如くであるが、人口未だ稠密に至らざる故に、往々街上雜草の繁茂を見るは、容器大きく物足らざる故と感した。

七月三十日

好晴。午前七時五十分の汽車で旭川に赴かんとし、一行四人の外、齋藤も加り、停車場に到れば、偶々三好博士に會す。傍らに矮身肥軀の一紳士あり、三好博士の紹介により農學博士宮部金吾氏（札幌農科大學の教授）と知れた。宮部は余が東京英語學校に在りし頃同室で、別後相見ざること二十年、三好博士の紹介なかりせば、兩人相識らざりしならん。二十年前熟交ありし人、却つて前日初めて識るの人に紹介さる。世事も亦妙なる哉と感じた。宮部と久情を叙し終らざるに、汽車は早く發した。札幌より岩見澤の間は、過日經過の地である。岩見澤より汽車を乗り換へ、北方を指して行く、相變らず廣漠たる大陸的の景色は我等を送迎して、心氣の爽然を覺へしめた。

義延以北は原野最もよく開け、人家も亦多きを認めた。此内、屯田兵の住宅最も多く、其の構造は鹿末ながら一定の形式を具し、土蕃の居と趣を異にするは、政府の保護の然らしむる所と思はれた。十一時砂川に着す。此處は人家三四百もある大邑で、炭礦鐵道はこゝに盡き、以北は官設鐵道なり。之より瀧川、妹背牛、伊内等の諸驛を経て朝川に達す。瀧川は、

旭川の開ける迄は、此邊の首府として人貨輻輳の處たりし。妹背牛より以北は土地の開墾殊に行届き、全道到る處に散見する耕地内に、伐木の跡を留めず、田畑共に立派に耕されてあつた。伊内附近に至れば、石狩川我を送迎し、巖石突出して其下、潭をなし、風景佳なり。土人此處をカムイコタンと云ふ。カムイは蓋し神居、コタンは古潭か。大概風景絶佳の處、カムイと云ふも道理ある事と思はれた。午後一時四十五分、旭川に着、丸福旅館に投ず。

此旅館は鹿造ながら、裝飾品は應舉、蕪村などの贗物屏風を立て回はすなど、大袈裟なる上に直徑二尺五寸もある大火鉢を、夏時を構はず坐敷の中央に置くなど、流石に大味なり。午餐後、第七師團の經營を見んと旅舎を出づ。師團新設地は旭川を距る一里ばかり宇近文ウソクフミにあり。近文にて先づ感ぜしは、地區の廣さ十數里に涉り、大都會たるべき形相を具へ居るの一事であつた。元來上川の地は本道の中央に位し、東は釧路、南は十勝、北は天鹽、北見に接し、石狩、美英、忠別の三川は平野を貫通し、水運備ふるのみならず、鐵道は既に空知太に達し、北見の道路は己に網走に達して西の方増毛に出づべく、眞に四通五達の要地である。況んや十數里に涉る沃野は、大都市を營むに足り、一帶の連山屏立して、天然の城壁を爲す。

陸軍省が此地を、師團設置の處としたるは故あるかなと思はれた。

兵營は山を背にし、延長約二里許りの所に、今建築最中で、半ば工を竣つたと云はれてゐた。師團地に連なる幾千萬坪の平原には、僅かに市街の地割をなしあるのみで、まだ家屋建築の運びに至らざれど、兵營成るの日は、必らずそれに附屬する大市街を見るに至らん。そしてそれは近いことであらうと思はれた。

自分は本道に來らばアイヌの生活状態を見んと欲し居りしが、此邊に彼等の住するを知り酒樽を齎して訪問したる記事は、較々長ければ、別稿を立る事にして、こゝに省略した。(アイヌ訪問記と云ふが乃ちそれで、此紀行の附録とした。)

此日旭川の宿に歸れば日は既に暮れた。

七月三十一日

午前五時三十分の氣温六十二度、今日は夕張炭山を訪はんと、七時二十分の汽車に投ず。偶々富山縣代議士、大矢四郎兵衛氏に會し同車して語る。今日の行程岩見澤までは昨日經過

の地、岩見澤より追分までは前日經過の地なれば共に興味なく亦記すべきことなし。追分より大矢に別れて乗りかへ夕張線に移る。これより夕張に至るの間、川端、瀧の上、紅葉山、清水澤、鹿の谷等の諸驛あり、概して此一線は特に炭礦の爲めに設けたるものなれば、沿道の原野は自然の儘で、鋤犁を入れた所は絶えてない。併し原始の地には原始の好風景がある。紅葉山と云ふあたり、鐵路は夕張川に沿ふてゐるが、川を隔て、鬱翠の林ありて、得も言はれぬ風趣がある。睡中の翁を起して同じく賞す。同乗の客は語る、此邊紅葉の候に入れば、前岸一帯錦を織り、風光絶佳なりと、今自分は地名より紅葉山人を想ふて、車中筆を抽いて風景の一端を叙し、遙かに山人に寄せた。清水澤邊より山は益々深く、水聲鳥聲物淋しく、一行をして坐ろに寂寥の情に堪へざらしめた。六時近く登川停車場に着す。登川は炭山の所在地で、驛は七八百戸に餘る大邑なれども、地僻にして宿るべき旅館なく、余等は本社より紹介状を齎し來りたれば、直ちに會社附屬の家に投ず。これは社員若くは來賓の爲め特に設けたものと同行の齋藤は語つた。日暮れて、本山の技師長松宮重三郎氏來訪、宴を張り一行を款待し、酒次技師長の語る所左の如し。

現今炭礦鐵道會社が採掘しつゝある炭山は、夕張、空知、幌内、幾春別の四あり、就中豊富なるは本山なり。

本山は海面を抜くこと約千八百呎、鑛區坪數は參百八十二萬八千五百餘坪なり。

本山の沿革は明治九年、開拓使雇米人ライマン氏先づ此地に石炭鑛あるを報告し、明治二十一年、北海道廳技師坂市太郎踏檢の上、初めて炭層の此附近に露出せるを發見し、二十二年四月、村田堤其一部試掘の許可を得、同年十二月炭礦會社創立の際、同人より其試掘權を讓受け、同年より開坑に着手し、二十五年十二月鐵道の成ると共に、炭礦の營業を開始したり。

本山炭層の特質は單層なるに在り、則ち炭の性質は單一なり、而して炭層三枚あり、則ち本層は厚さ二十五尺に達し、之より下部、凡そ三百尺を距て、厚さ四尺の炭層あり。又本層の上部、凡そ百八十尺を距て、厚さ四尺未滿の層あり、何れも目下採掘中なり。

炭層の厚二十五尺に達するは、外國に於ても幾んど無き所の厚層なり。

炭の性質品位は最も佳良にして、灰分は百分の四、硫黃分は幾んどあるなく、質堅緻な

るを以て粉碎の虞ひなく、何れの用途に對しても、其良炭たるを失はされども、汽船用及瓦斯、或は骸炭製造用に最も適當なり。

採炭高は一日平均千二百七十餘噸、三十一年十二月の調査に據るに、一ヶ月採炭高は、平均二萬六千噸なり。而して未來の設計は、一ヶ年凡そ六十萬噸を採掘するに在り。此の設計に基き山の壽命は凡そ五十年繼續する者と見做し、未來三十萬噸を採出するの豫算也。本山より毎日汽車にて輸送する石炭高は七噸積百八十臺なり。

本山に使役する労働者(勞鑑札を所持するもの)は四千人にして、坑夫の重なるものが、一ヶ月收入するは四五十圓の多きに及ぶものあり。總じて本山に於て、一ヶ月仕拂ふ給料は三萬圓なり。

本山の概要は此談話にて知られる。明朝、松宮氏の案内にて、本山の現況を観ることを約し氏と別る。

八月一日

今日の日程は正午迄に炭山を見終り、直ちに札幌へ歸らんとする豫定なれば、早起準備をなす。九時頃松宮技師案内せんとて来る、乃ち發す。炭山は旅宿を距る約二十町、炭山事務所までの間に、選礦運炭の諸設備あれど、一々録する能はず。聽て事務所に至る。技師長坑道に入るや否やを問ふ。余等云く、坑道に入るは願ふ所なり、然れども之が爲め時を多く費し、汽車の時刻を失せんことを恐る。依つて先づ坑道の延長を問ひ、且つ幾許行けば坑夫の勞働狀況を目撃し得べきやを問ふ。技師長曰く、本山坑道の數は二十一にして其總延長は三十一年十二月の調べにて四萬三百二十五尺なり。但し今入らんとする坑道は、約三千尺位を行かざれば坑夫の勞働を見る能はず、今は快速の空氣汽車あれども、往復一時間三十分を要すべしと、時器を検すれば既に十時に近し、已むなく坑夫勞働の實況を割愛し、坑内の狀況の一斑を見て已むに決した。技師長は空氣汽車の用意を命じ、余等に與ふるに、兜形の山帽子、筒袖の山ぎもの、並びに安全燈一個づつを以てした。余等支度調ふて汽車未だ發せず此間技師長余等を壓搾器のある一室に導き、説明して云く、近年この機械を得てより、諸般の事著しく敏活を加へ、大いに改善を見るに至れり。則ち鐵管を坑内に通じ、壓搾空氣をこ

れにて送り截炭器を自在に運轉せしめ、石炭を容易に採掘するに至りたるが如き、空氣機關車を使用して運搬を迅速ならしめる如き、扇風機、捲揚機の使用を一層便ならしめし如き、坑内乾燥の場所に撤水し、以て粉末炭爆發の危険を、豫防する装置を改良したる如き、皆此機の設備に依つて得たる改善となすと語らる。

聽て汽車の準備整ひたりと報じ来る、則ち行く。空氣汽關車は、長さ一間半程の小形にて、壓搾器より鐵管を通じて、先づ壓搾空氣を注入し、石炭運送の四輪車に接続せしめ、然る後運轉するなり。客車の大きさと装置は、貨車と異なる所なし。唯一座二人を容るゝ腰掛を差向ひに装置しあるが相違なり。技師長發車を報じ且つ云く、これより入らんとするは第一番坑なり諸君坑中に喫烟する莫れ、又車中頭を擡る莫れと。坑中支柱の垂下するものあり、それに觸れん事を慮るなり、汽車はゴ〱の聲と共に發し、端なく陰々たる坑道に入る。余は前年足尾の銅山に入りたる經驗あれば、敢て奇を感じなかつたが、一行は初めて入る事とて、氣味わるく感じて、皆々黙々たりしが、漸く眼が冥暗に慣れると、四圍の風景を辯じ得るやうになり、燈を捧げて坑内の結構を見るに、鳥居形の支柱三方を圍み、其狀足尾の坑道と異なる

けれども、炭質堅硬にて崩壊の懼れなき所は實に見ものなり。是ぞ本山特有の景にて、他の鑛山に見る能はざる所である。此處支柱を用ゆる要なければ、炭層は上下左右に露出し、天井も障壁も道も、すべて炭礦にて他に一物もなく、燈に照せば火光、炭に映じて閃々光を放ち、炭質の美は燦然として現れ、自分は初めて炭層の厚きに驚いた。技師長の談に據ると道下尙數尺の層を剩すと、炭量の豊富想ふべし。汽車は漸く進んで、一大岐路に達した時、技師長曰く、こゝに下車して暫らく返りの汽車を待つべしと。技師長又曰く、坑口より此處まで一千三百餘尺なりと。待合せの間に種々説明したれど、事専門に渉るもの多く、一々記憶する能はず、佇立十五分間にしてゴウ／＼の聲遠く聞ゆ、これ空氣汽車の石炭を載せて坑外に搬出するなり。乃ちこれに乗り舊路を馳せ坑口を出れば、微雨、山帽子を撲つ。時器を檢すれば發程の時刻已に迫り居れば、匆々辭して前夜の宿所に歸る。途中雨漸く甚しく満身濕ふ。旅舎に就て勘定を求むれば、會社附の合宿所なれば仕拂ひを要せずと云ふ。乃ち若干金を工夫學校へ寄附し倉惶停車場に至れば、松宮技師長見送りの爲めブラット・フォームに在り、慇懃厚遇を謝して別る。車中午餐を喫し、他客なければ、各々睡眠を貪り、六時半札

幌着、直に山形屋に入る。

八月二日

好晴、本日函館に歸らんことを決し、朝來湖月翁と市街に出で、土蕃の製品を購ふ。北門新報主筆伊東正三氏訪ひ來る。暫時話し十二時四十五分室蘭に向け發す。川崎は主家の用を辨ずるため留る。室蘭迄の道、記すべき事なし。輪西驛に達すれば日は全く暮れ、遠く室蘭灣を望めば、明月高く灣を照し、銀波溶々風景佳なり。八時三十分室蘭に着、旅舎丸市に入り晚餐を喫する間もなく發船の刻到るを報ず、乃ち倉惶田子の浦丸に投ず。七百四十噸の小汽船なれども、海上波靜かに船は疊の上を駛するに異らず、船中晚餐を認め、一睡覺めれば、船は早もく函館の埠頭に在り。

八月三日

午前六時三十分着港、前日宿泊の勝田に投ず。一日滞在と決し、一浴の後朝酒を始む。間も

なく一客来る。延て見れば郷人遠藤吉平氏（北浦原郡中村濱の人）にて市内の有力者なり。曰く、先頃來られし時は知らざりし爲めお尋ねもせざりしが、御發程後新聞にて知り、在函の越後人皆遺憾とせり。此地には同郷の人甚だ多けれども、咄嗟に一同を會すること難し。已むなく二十名許りの、重立ちたるもの今夜兩君の歡迎會を開かんとするにつき、托げて一日の御滞在を願ひたしと云ふ。余は其厚意を謝し、歸京を急ぐを理由として辭退したれども聽かず、遂に諾して會に臨むこととす。遠藤と談話中、北辰新聞社員廣谷柁來り訪ふ。此人余が新潟新聞在社中、選舉應援に來りしことあつて舊あり。函館の事情を語るに詳かなり。廣谷去る後、遠藤に伴はれ、ひとり市内見物にと出づ。先づハツ頭と云ふ處に至り、淺田屋に入る。こゝは幽雅なる所にて、海景を故ら避け、山野の景物を中心として亭榭庭園を設けたる市内には一風變りたる料亭なり。朝夕海景に飽く市人は、却つてこの幽鬱の別天地を喜ぶと見えたり。麥酒數杯を傾け、出でて水道貯水場を見、工事中の船渠を見、埋立工事等を見て薄暮歡迎會場、勝見屋に至れば、會員十四五名既に在り。間もなく湖月翁も來會され、宴會席上余は起つて謝辭を陳べると共に、越後人の當市に勢力あること、隨つて責任の重きこと、

函館に門閥の弊漸く起り、商運の漸く傾きつゝある事、札幌の繁榮遂に上川に移ると同じく努力せざれば商權、或は小樽に移らんと郷人を警戒したり。列席の會員は悉く生面なれども其姓を聞き其郷關を聞けば、流石に懐しく、主客共に郷國に在るの思ひをなして歡情湧く。會飲中、圖らず島金藏の訪ひ來るに會す。此人前日湖月翁より余の家と關係あるを聞き物色して終に得ざりしものなり。別室に延て見れば齡古稀を越せども、矍鑠五十臺の人の如く、其の談話は皆肺肝より出で、情あり理あり、七十年來市島兩家を思ふて嘗て舊恩を忘れず、話中聲涙共に下るの状を見せ、余は深く感激し古忠臣の概ありと賞した。金藏は余等兩人を自宅へ誘はんとしたが、會衆許さず已むなく湖月翁のみ行き、余は席に止り、十一時過ぎ辛ふじて圍を解き旅宿に歸つた。

八月四日

早朝より余等の出發を送らんと、遠藤吉平、相馬理一郎を始め昨夜の會衆續々來り、金藏の家族五六名も亦來り、旅舎は一室を設けて接客の處としたが、一室にては辨じ兼ね、更に

又一室を設くるに至り、大雑踏大繁昌にて、眼を回す程の繁忙を極めたが、衆と共に旅館を發し、埠頭に別れを告げて東海丸に投じ、八時を合圖に抜錨した。幸ひに天氣晴朗海上平穩にて甲板に上り海景を賞す。偶々三好學博士も乗り合はせられたれば、旅行の所見を互ひに交換し退屈を覚えざる内、船は午後二時半青森港に着した。三好博士と別れて吾等は中島本店に入つた。晚酌中同宿の一客余に刺を通するものあり、延て之を見れば、福島縣大沼郡本郷村遠藤平太と云ふ人なり。客は容を改めて云く、閣下は私を御存知ながら、君の御幼少の頃を承知し居るものなり、不肖こそ戊辰の戦争に會津の參謀萱野に隨ふて閣下の家にしばらく御厄介になりたり。今回亡弟の展墓に此地に來り、圖らず同宿して宿帳に貴名を見、懷舊の情禁する能はず、無禮を顯みず卒爾の推參をなせり。幸に恕されよと、余は邂逅の奇なるを喜び、湖翁に紹介すると、翁の感慨されたも道理自分こそ當時國難を辨ぜざる程の小兒なりしに、翁は其頃年既に長じ國難の状を知るのみならず、會津の重臣上田某は翁の家に宿して翁は始終其坐右に侍し、諸般の周旋をなせし人なるものを、翁と遠藤との間に懷舊談湧くが如く起り、之を傍聽して旅窓の無聊を破りしも時に取つての一興であつた。

八月五日

今朝八時青森を發す、朝來むし暑く、氣温の北海道に比し、大いに異なるを感じた。これより仙臺までの行程、往路に記したればすべて略す。仙臺に着したるは夜九時にて、陸奥ホテルに投ず。ホテルの婢告げて云ふ。午後二時頃激震ありしと、吾等は車中に在つて知らなかつた。余は明日の行程につき一案を立て、曰く、一たび經し道を再びするは興味なし、仙臺より東京迄の歸路は、宜しく濱街道を取るべしと、乃ちそれに決す。

八月六日

好晴。昨日の申合せに従ひ常盤線にて歸東の途に就く。午前七時三十分なり。沼岩驛より常盤線へ分岐す。吉田驛に至り海岸に出で、これより海に沿ふて行く。中村町は元相馬氏の都邑にて、郡役所區裁判所等の所在地なり。此東岸に長汀あり。雅人十二景を選び、遊人絶えざる勝區なりと聞く。之より以南は一望千里の水田にて、丘陵點々其間に起伏し、風致あ

る樹木點綴し、風景最も佳也。此の曠野に在る一小驛は原町なり。總じて此邊トルネル多く同乗の客より聞けば、仙臺と水戸の間三十二所を數ふと云ふ。浪江、長塚、富岡、木戸等の諸驛を経て、久の濱に達すれば、翠松白砂の間に漁家點々烟の颯るさま風景喜ぶべし。之を伊勢の阿漕浦に比するも遜色あるなし。一行快哉を叫び一杯を傾けて、且つ飲み且つ賞す。時已に正午談笑の間汽車は早く平町に着す。此地は濱街道の要衝にて、もと磐城平と稱し、維新前に安藤氏の采地なり。維新後一旦平縣を置きしも後廢して福島縣と合併せり。平町を去れば、二三のトンネルあり。綴、湯本の附近には炭礦多し。一時半車掌の高く勿來と呼ぶに驚き窓外を望めば、鐵路は翠松白砂の間に設けられ風景極好し。こゝは磐城茨城の縣境なれども古の關址は何れに在りや訪ふ由もなく、空しく源義家の東征を追憶するのみ。これより海岸數里の間風光明媚にて車中懶臥を許さず、幾たびか翁を起して共に觀賞し、三時過ぎ水戸に着、窓外に水戸城、千波沼を望む。北方に流るゝは那珂河にて、梅樹林をなす所は常盤神社なり。高濱驛に到り始めて霞浦を見、神立を経て土浦に達す。土浦より千住まで十餘の驛あれども一々記するに遑あらず、七時三十分、上野に着すれば家人迎へて停車場に在り。

アイヌを訪ふの記

旭川の師團設置を見物に出かけた日、茫々たる原野を過ぎ、車夫が此邊にアイヌが居ると云ふを耳にして、兼ねてアイヌの生活を實見したいと冀望を抱き居たる自分は、此機逸す可らずと湖月翁にも勸めて、遽かに其居を訪ふ事になつた。幾丁かの原野を過ぎ、車夫にアイヌの居は何れぞと問へば、此邊の藪の内にありと云ふ。誰かアイヌを知るものあらば案内に頼みたしと云へば、車夫は此邊にアイヌ婦人を妻にして居る男がある筈と云ふから、それを頼まんと車夫を走らせたが、生憎不在と云ふので、已むなく車夫を案内とし、一樽の酒を擔はせ、本道を左に折れて行く。これより小徑は通じながら、等身の雜草茂つて前程は見わけがたく、七八尺計りの鬼ウドの美事な大きな花を着けたのが、矢鱈道を遮るなど、流石に蝦夷の光景は異つたものと感じた。吾等が草叢を推し分け歩む聲に驚かされてか、突如草間に突立つたものがある。吾等も驚いて之を見れば、被髪黒面の婦人にて、口角に彫りものがあ

り、手には何か携へ居た。これぞ問はずしてアイヌ婦人と知れた。車夫に彼女は何をなしたつあるかと問へば、畑仕事をなしたつあるのだと云ふ。あたりを見渡すに、満目草藪にて畑らしいものは見當らず、何れに畑ありと問へば、車夫は指し示せども其邊は矢張り草藪なり。不審に堪へざりしが、車夫は笑つて、都の殿方にはアイヌの畑は見別け難からん。これ見られよ馬鈴薯、唐モロコシは植付けあるにあらずや、と云はれてよく見れば、知らしくはあれど雑草は植付けあるものより遙かに繁茂しをれば、見分け兼ねしも道理なり。これに就て先づ感じたのは、彼等の懶惰性なり。彼等は雑草の植物に害あるを知らざるにあらずれども、之を抜き去ることを爲さないのである。さらに四五町行くと小高き所に、笹の葉で葺いた小屋があつた。これがアイヌの家と分つたから、車夫をして訪はしめると、全家畑へ出てをるらしく、誰も居らず、その中の様子を窺ふと、最貧の家と見えて、家の中央に火爐の設けあり。二三食器あるのみで見ると、貧世帯であつた。車夫は何れよりか少女を連れて一婦人を伴ひ來る。依つて來意を告げると、此邊のアイヌは、日本語に通じ居り、此方の話を解したらしく、頗る聞き取り難い言葉で、「今主人も不在なれば他の家に案内せん。」と云ふ。吾等

は之を聞き、アイヌは日本人を恐るとも聞けば、或ひは事に托して吾等を避けんとするのでなからうかと思つたが、此推測の誤つた事が直ちに分つた。何となれば、婦人は先きに立つて、吾等を或方面に導いたからだ。四五町行くと、果して一字の家があつた、この家は前に較べると三倍も大きく、宅地も廣く、家前には流れもあり、流れには獨木橋が架してある。高く四脚の柱を以て支へた物置もあり、富饒の家と見えたが、果して此邊三十數戸一部落の酋長の家で、もとは村長を勤めたものだと思はれた。

獨木橋を渡れば少しく高き處に家あり。屋根は笹を以て葺き、四圍は木皮で覆ひ、すべて綱や蔓を以つて結び、絶対に釘を用ひず、家屋の一半は高く、一半は低く、高きは母屋で低きは所謂さけ屋と判ぜられた。「蝦夷風俗彙纂」を案するに、家の右の方に、小さきさけ屋を作る、これをチセムといふ。チセは家、セムは本屋につゞく小さき家のことなりとあり。これはアイヌの建築法と見えて、先きに見た家にも、同様のさけ屋があつた。

人聲に驚いたか一婦人が出て來た。此家の妻らしく、被髪垢面口邊と手に黥した、二十六七歳の女子である。土蕃の風俗を見慣れない吾等には、一見異様の感もあつたが、つくづく

見れば柔和の氣、おのづから眉宇の間に現れ、客を見て臆しもせず、懇ろに禮を施したさまは夷俗とは思はれぬ程であつた。多分此家に日本人の訪ひ來るもの多く、家族は人慣れて居るのであらうと推した。吾等は來意を告げ、先づ携へた一樽の酒を贈りたるに、婦人は喜んで室内へ案内した。

此家の入口はさげ屋に在つて、凡て土間である。こゝには窓がなく、四面薄暗くしかとは見定め兼たが、飲食の調理アツシなどを織る場所と見え、機具や桶などを見受けた。母屋に入るには別に入口あり、下駄ぬぎとも云ふべき處に一枚の板を敷き、そこに古草履二三足ぬぎ棄て、あつた。彼等は内地人に倣つて、最早跣足を廢したらしい。母屋は疊十枚ほど敷くほどの廣さで、中央に大なる火爐を設け、入口の左側には一尺四五寸程の高さに棚を設けて一疊程の寢臺があり、之に隣りて髹漆描金の具桶七ツ八ツを列ね、其上に木を架して鉋屑の如きビラ、を幾片となく吊したるは、彼等が神に献ずる幣束(イナウ)と知られた。天井には縦横材木を架して、筵席には弓箭農具の類を置き、火爐の上には天窓ありて、網で開閉の出來るやうになつてゐた。又客坐とも云ふべき所の壁にも小窓が穿つてあつたが、日光を入るる

爲めと思はれた。總じて室内は板敷で、筵が敷きつめられ、流石に酋長の住居と肯かれた。婦人は接待に忙がしく、架上より大なる筵をおろして客坐に敷くを見れば、内地の蒲筵のやうなもので、白地に二三色彩の縞を染織し、彼等の自製としては甚だ趣味あるものであつた。是はキナと云ふ草で作つたもので、染料の内、鼠色は沼泥にひたし、茶褐色は赤楊の皮であると聞いた。暫くあつて、半白濃髻被髮深目の一老父入り來り、踵いて十歳位を頭とせる四五の子女入り來る。車夫に問へば老父は此家の主人で、子女は何れも老父の孫であると云ふ。婦人は夷語にて老父に何事か語りしが、老父は俄かに容を改め、小兒等を叱して慇懃に挨拶をなし、前刻贈つた酒の禮を述べた。老父は内地語に通じ、只今忤も參つて御禮を申上げ、お酒を頂戴いたしますと云ふ内、長身濃髻の一男子、三人の男を伴ひ來る。これ此家の忤が友人を連れ來りたるなり。つら／＼此長身の男の相貌骨格を見るに内地に在つても美丈夫に數へらるべき風采を有し、顔色のあさ黒く眼光の炯々たる所、豪傑的風姿あり。老人は齡古稀に近く、風骨すべて蝦夷タイプなるに、其忤の甚だ趣を異にするは、内地化したる故にも由らん歟。男子は四人共内地製の木綿の單衣を着け、兵兒帶をしめ、何れも内地語に通じてゐた。

廳がて寢臺近く老父を主として四人の若ものは相並んで端坐し、老父が起つて具桶より酒器を取出し、四人の前に配列するを見れば、凡そ五七合の酒を盛るべき大杯で、蓋も臺もあつて、皆精巧の髹漆を旋し、杯には描金の紋章あり。個程のもの内地の通例の家には、一個を有するすら稀なるに、客の數に應じて幾個も出すを見れば、此家の富裕も推測に難くなかつた。尙酒器の外に、膳あり酒注あり、匕あり、總じて器具の髹漆を施したるものゝ多きを見れば、かねて聞く如く、土蕃の漆器を珍重することがうなづかれた。

宴會が彼等の間に始つた、吾等は其狀を見んとて特に宴會を促したのであつた。彼等飲酒の式はなか／＼振つてゐる。酒を飲まんとするに先だち、杯上に鬚を揚ぐる匕を架し、左手に杯を把り右手に匕を執り、匕にひたして上下左右に酒滴を散布する。此間肅然として語らず、散布が終ると、吾等に向つて一禮し、而る後初めて飲む。蓋し酒をまくは、先づ神に捧ぐるなり。彼等は杯を改むる毎に、必らず同様の事をなす。大醉に至ると雖も、嘗つて之を廢せずと聞いた。

彼等の宴會を傍觀して面白く感じた吾等も一杯無かる可らずと齋らした行厨を開いたが、

老父は例の具桶より陶製の小杯を取り出し、内地風に恭しく吾等に獻じたのも愛嬌があつた。余は酒次老父に名を問ふた所、川村モノクテと答へ、其伴はイタシロマと名乗つた。種々物の名も問ふたが、大概風俗彙纂にあると同じく、多少異同あるは部落の相違に依るのであらうと思ひ、一々こゝに擧げない。段々酒が回つて室内は陽氣が満ちたが、獨り妻女は薄暗き片隅に屈んで語を發せず、顔を酒席に向けず、小兒等も年不似合におとなしく、絶えて喧噪せざる殊勝さに、氣の毒の情が起つて、齋らした肉の罐詰を妻女に與へ、菓子を小兒等に與へた。

斯くて日も漸く暮れんとするので別れを告げんとした時、吾等の従者の云ふには、折角アイヌを訪ねた記念として、何か一物申受け、東京への土産となしてはと云ふも道理なれば、室内に敷きたるキナ藎を、若し譲りなば價は幾許にても與ふべし、と老父に交渉を試みたが老父は沈黙して後に云く、「それは嫁の作つたものだから吾等のものでない、嫁に相談されたい。」と。吾等が婦人に相談するのは如何はしければ、卿より相談して呉れよと頼む。老爺は婦人を顧み夷語もて稍々暫らく一向分らぬ應答をなし居たるが、漸く協議が纏り、老爺は

恭しく吾等に向つて「この庭は嫁が數月苦辛して織つたもので、譲りがたいものだが、今日は圖らず御馳走にあづかりたれば、枉げてお譲りする。」と云ふた。吾等は喜んで試みに其價を問へども、これはなか／＼決しかねたと見えし／＼促せども云はず。漸くにして申出した價は僅かに二圓であつた。吾等は其價の餘りに低きに驚き倍額を贈つた。家族は顔見合はせて、たやすく受取らなかつたが、強ひて老爺に渡すと、老爺は押し戻し、「此品は嫁のものだから價も嫁に渡されたい。」と云ふので、吾等は此社會に權利の確立しあるに驚き、恥らふ婦人に強ひて貨幣を取らせ、此家を立出れば、家族一同は家前に整列し、内地風の禮を施して見送つた。

夜に入り旅宿に歸ると間もなく、平村良造と云ふ人訪ひ來る。此人アイヌ種ながら、師範學校修學中にて、漢語交りの内地語を縦横に語り、相貌風格も内地人と異なる所なく、余等のアイヌ訪問を感謝し、わざ／＼禮に來りたることが知れ、酒を饗して別れた。

丹那のトンネル

自分が丹那トンネル掘鑿に關心をもつたのも久しいことである。毎年一月熱海に遊ぶのが例で、或數年は坪内逍遙方に宿泊したが、自分の居室に充てられた二階の書齋が、丹那から吐き出す土砂の山を築いて、丘陵状をなしてゐるのに面してゐる。深更に及ぶと、土砂を運ぶ車輛の音が聞えてくる、土砂を落す音も聞えてくる。嘗て熟知の來の宮附近の谷は、土砂で埋められて地形が變り、坪内は土砂の丘陵を熱海富士だなど云ふて、他日富士に倣ひ、その周邊に趣味的の景勝を案すべしなど云ふてもゐた。いつ熱海へ出かけても、相變らず掘鑿をやつてゐる。いつ貫通するかと問へば、もう四五年はかゝらうと云ふ噂で、毎年々々同じ噂のみで、うんざりさせられた。七年位で竣工を期したものが、滿十六年にも及んだのだから、吾等がシビレを切らしたのも無理はない。

何事も同じことだが出來上つたものを見ると、平凡に見えるものが多い。丹那トンネルも

出来上つて見ると何の變哲もない、日本では清水トンネルに次ぐ長いトンネルとは云へ、通つて見れば、暗黒のジメ／＼した所を汽車が走るのみで、普通のトンネルと少しも變りがない。工事の實際を毫も知らないものがこゝを通ると、何故七年の豫期が十六年かゝつたか、ただ不思議に思ふに過ぎない。出来上つて間もない今日既にそうであるから、時を経たら、誰もが此トンネルに特別意を注ぐことも無くなるであらう。

此工事は日本開闢以來の難工事で、西洋にも類例のないほどで、その原因は主として地質がわるく、六回ほど難所に觸れて、殆んど絶望的の困難に屢々遭遇した。斷層に出遇つて、折角鑿つた所を崩壞の土砂で埋めたこともあるが、それよりも激烈なる空水に出遇つて、一年ばかり中止を餘儀なくされたこともある。この空水量は並大體なものでなく、形容して云へば、箱根の湖水の水量の三倍にも當るものが出たのである。丹那盆地の農家が、渴水で耕作が出来なくなつたほど、出水したのであるから、非常なものである。これ等のために工夫の斃れたものは、すべてを合はせて六十數人に及んでゐる。

素人考へではトンネルを鑿るの難きは、堅硬の磐石を鑿ることにあるやうに思ふが、堅硬

の磐石は爆發藥で碎くから案外樂なもので、すべてが磐石の地質であれば、苦もなく工事が進行するが、丹那のトンネルには、種々の地層があつて、矢鱈に崩れたり、水を空出す斷層があるので、中にも水には最も困しめられた。山をくりぬくの宛かも水中で仕事をせねばならんやうな始末であつたから、西洋でドーバー海峡の海底に、トンネルを作つたと同じやうなことであり、水を防ぎ水を避けるに、幾んど人智のあらん限りを盡したのだが、どうしても簡單に目的を達する名法がなく、水を逃がす爲めにトンネルの本道に沿ふて、逃がし水の爲めに水路を作るより外に名策もなかつた。此水抜坑の掘鑿延長は二萬五百呎で、之を掘つた日數は熱海口が五年半、三島口が七年八月と云ふから、トンネルの延長より幾倍も大きく、そして結局、水を排除して仕舞へばそれを埋めるのだから、この勞も大變なもの豫期より工事が九年も延びたのは、此事が最も大なる原因となつてゐる。

工事が難所にブツつかる毎に、局外者はしば／＼絶望を叫び、工事を續けるの愚を鳴したと云ふが、當事者は少しもひるまず、氣永くネバリ強く、飽くまで奮闘したのは見上げたもので、此成功は如何に日本人に忍耐力があるかを世界の工業界に示したものである。其成功

までの歴史を讀んで見ると涙ぐましいものがあり、よくもやつてのけたと驚歎に値ひするものがある。トンネルなど云ふものは貫通すればこそ用を爲すが、途中に廢しては何にもならぬのは言ふまでもない。中途の廢絶は長く譏りを後世に貽すに過ぎない。

何分未曾有の難工事だから、機械其他の設備で、これ迄會つて經驗しないことを實驗し、機に應じ、變に投じて工夫したものが少くない。此トンネル一本の爲め、學ぶ所が實に少くなかつた。水と闘ふ爲に或る時は鐵製のタンクの中に工夫が身を容れて仕事をしたこともあり、遂には壓搾空氣を坑内に通じて、斷層より漏れ出る空水を防止するまでに至つた。

丹那トンネルの工費はザット二千五百萬圓位で一呎當千圓足らずであるが、これは平均の額で、地質のわるい處は此倍もかゝつた譯だ。隨分巨費には相違ないが、併し考へて見ると戰艦一隻の建造費用にも足りないのである。熱海線は最急勾配が百分の一だから、後押機關車の必要なく、普通の速力の汽車だと、四五十分早くなり、機關車の牽引力は、現在の箱根線よりざつと二倍半乃至三倍増すと云ふ。又機關車を使ふとして、石炭消費量は、ザット三分の一に減じ、一年の運轉費の節約額は約九十萬圓となる。大體今後の線は、現在の線より

七里も短くなるから、運賃も隨つて下らねばならぬのだ。

自分は妙に地中の祕密に興味を有ち、二三の鑛山の坑道に這入つて見た事もあり、地下鐵道にも興味をもち、某會社創立の時株主ともなつた。丹那トンネルのやうな難工事には何としても關心をもたざるを得ないので、從來此工事に關する記事が新聞などに現れると必らず切抜を保存した。鐵道省の熱海事務所で編纂された『丹那トンネルの話』が工業雜誌社で出版されたのを幸ひとし、兩三日熱心に讀んで見た。よく素人解りのする様に書かれ、甚だ興味を感じたが、實は悲愴の奮闘史で、涙無くては讀めない所が多かつた。以上録したのも、此書から材料を取つたのだが、私を中心とする同人會が、一同打連れ初めて此トンネルを通つて見るこゝとなつたので、私は三島驛の會食の時、トルネルの概要を語つたのが、則ち此筆記である。

身正雜記

郷 土 自 慢

郷土自慢は郷土愛から發する自然の情で、一概にけなすべきでない。併し片田舎の狭い郷里で誇るべき何物もないのに、強ひて自慢するものがある。ヤレ俺の村の代議士は偉いか、某將軍は俺らが郡の出身だとか、俺らが村には某の神社があるとか、甚しきは食物までも自慢の種とする者がある。邊土に於て強ひて誇るべきものを求めると、偉くない人物や凡庸水までも擧げることになるが、實は自慢に値しないものが常に多い。上方は京都を始めとして、歴史に富んでゐるから、僻陬の地でも自慢に値するものが随分あるが、自分の郷國越後などは、北陸の僻土だから、上方邊と同一に語る譯にはゆかない。併し自分の舊里、敢て廣く新潟縣とは言はない、亦何郡とも云はない、僅かに一町村に過ぎない水原に於て、自慢すべきものがないでもない。

自分は此やうな事を、曾つて特別に考へて見たことはないが、咄嗟に擧げて見ても、相當

に誇りとするものがある。先づ水原と云ふ地名で思ひつくのは、上杉景勝の驍將、杉原常陸介親憲がこゝにゐたので郷名が起つた。水原は實は杉原の轉訛である。親憲は景勝麾下の隠れなき武勇の人で、當時難攻の新發田を征服した功に依り、こゝに鎮坐したのである。吾郷土は斯る強勇の人を祖先に有してゐる。

此郷は徳川時代には天領で、一時富豪の淵藪であつた。全國で最も殷富の天領と云へば、この郷の右に出るものはなかつたので、代官連は此地に祇役することを競ふたと云はれてゐる。越後には由來大地主が多いが、此地は別して多く、天領時代の所謂五人衆と云はれた五家は、越後中で屈指の大地主であつた。

此地には維新の當初越後府が設けられ、踵いて水原縣が置かれて、越後の政治上の中心となつた事蹟がある。其政廳の置かれた處は、自分の宗家の邸宅の址で城の如き丘陵狀をなしてゐる地形で、里俗之を天朝山と稱してゐるのは、政廳の置かれたことを語るものである。當時長官として此地に來た人々には、參議格の前原一誠を始め、歴史中の人物が少くなかつた。即ち水原は越後に於ける近世の一史蹟である。

富饒の土地に學者や藝術家の起るのは自然の數で、自分から云ふのはをかしいが、私の家祖岱海は、一郷の孔夫子と仰がれた有徳の學者であつた。徳龍と云ふ學僧は十二三歳で詩文を以つて時の大儒を驚かした程の天才であつた。著述家や畫家などでも擧ぐべき者があるがそれは略して數學者にスバラシイ人を出した。それは石川坎山と云ふ人で、俗名倉八後に七右衛門と稱した。此人江都隨一の算學者、長谷川西幡に學び留學十七年、歸郷してから其門に入るもの四千人の多きに及び、師が歿するとその學統を繼いだ。此人の門下には越後の人で『圓理三臺』を著した佐藤解記がある。此圓理は西洋人の未だ工夫し得ないことを先づ工夫した名譽を荷つてゐる。

藝術家では吾郷人すら忘れてゐるが、刀劍の鍛工に非常の人を出してゐる。それは星秋水と云ふもので、名は秀興大作と稱した。此人貧しき鍋釜の鍛冶屋に生れたが、學問に志が篤く、私の祖先岱海に就て經史を修めた。其父が家業を失はんことを恐れ、學業を廢せしめたが、秋水は天下第一の刀工たらんと志し、初め會津の劍工秀國の門に入つた。秀國は當時の名工水心子正秀の高足であつた。秀國藩命で薩摩に赴き、奥大和守元平の門に入り、業成つ

て名を元興と改めて會津に歸つたが、此人何人にも其研究を秘し、嗣子にも傳へなかつたのを、秋水は三年師家に在つて、其秘法を受けず自ら會得した。師はその熱誠に感じて許狀を與へたと云ふ。師の歿した頃は秋水家に歸つて貧家にクスブツてゐたが、或時會津藩から鑓を立てた堂々たる重役が來て、秋水を召し抱へようとしたが、秋水は従はなかつた。併し會津に赴き、先師の子に秘法を傳授したと云はれてゐる。會津から堂々たる使者が來たので、郷人は初めて秋水の眞價を認めるに至つたと云はれてゐる。

私の郷里は、前に言ふた通り代官所があつた爲め、江戸から學問のある代官もやつてきて、しきりに學問を奨励したので、文學は早くから開け、明治の初年には弘業館と云ふ學校が設けられた。これは畢竟代官連の薰陶に據るもので、越後には學者が私塾を開いた例は澤山にあるが、斯く公共の學校を設けた例は柏崎の外に全く無い。これも又誇るに足る一事蹟であらう。

吾家の發祥地

誰の家でも大概先祖は知れてゐるやうなもの、遠祖となると朦朧なのが多い。文書などが残つてゐても、それが一概に信ぜられない。文書にはなかなか偽作がある。氏族を貴ぶ日本の様な國柄では系圖が重んぜらるゝので、隨つてそれを贋造する専門家もあつて、誠にやかに立派なものを作つて賣買したことがあるから當てにならぬ。自分の家などは、天正以降のことは確然と分つてゐるが、その前の事が曖昧である。その曖昧である頃を知りたいと、可なり長い間苦心をしたが、どうもハッキリしない。家祖岱海翁が、その文集中に書き残したのに據ると吾家は丹波から起り、天正年間溝口氏に従つて越後に來たと簡單に記されてゐるのみで、それより外になんの記載もなく、亦口碑も無い。吉田東伍博士が『大日本地名辭書』を編纂中、ある時訪問して書齋に通ると、机邊に活字本の『丹波志』があつた。博士はその本を翻して「市島」とある所を自分に示し、貴家の發祥地はこゝだと云はれたので、自

分は飛び立つ思ひで喜んだ。この『丹波志』は誰の著であつたか忘れたが、昔は寫本で丹波邊りに僅かに傳はつたものに相違なく、家祖は恐らくそれを見なかつたであらう。自分の長い間の思索に一條の光明を與へたものは、實にこの書である。即ち自分の姓と同一の地名が、上田と云ふ條下に録されてある。その全文は左の如し。

上田(丹波國水上郡)上田村の支村、市島は上田村上垣村の出戸兩村の境なり、廿五軒あり。市島西ノ山に水上峠と云ふ、加茂郷境なり。市島より西へ勅使村まで、十丁計り、牛馬道あり、竹田郷より三輪庄への道とす。市島と云ふ所は、地入組の所故、公儀の事には四ヶ村立會なり。右四ヶ村を吉見の庄といふ。又は鹿聚の庄といふなり。今も兩名を稱す。往古は加茂郷の中とす。○市島に仕立屋吉見平十郎と云ふものあり、吉見一黨は屬の内たり。吉見氏古の紋、一文字桐のトウ、中古より一に酢漿(カタバミ)の紋なり。吉見系を按ずるに、蒲冠者範頼公の次男吉見三郎資重より丹波國鹿聚郷に居り、資重廿七代の孫、式部少輔則重、天正十年明智光秀と戦ひ討死す。是より城池破壊す。

この記載は極めて簡單ではあるが、吾家祖の發祥地がいくらか分つて來た。即ち吾姓の本源

たる市島の地は、今兵庫縣に屬し氷上郡吉見村字上田に在つて、福知山を距る數里の處に、阪鶴鐵道の停車場、市島と云ふがある。それが即ち吾祖先の發祥地である。前年山陰の旅行をした時、初めてこの驛を過ぎ、故郷を目前に見る心地がして、ひどく懐し味を感じ、下車して踏査を試みたいと思つたが、時間の都合でそれが出来なかつたのは遺憾に堪へなかつた。その際匆卒車窓から四方を眺めた丈では、土地の様子も知りかねたが、附近の山は高くもなく、風景は先づ凡庸水と想像せられ、町も殷賑の處とは思はれなかつた。但し自分の頭腦を刺戟したのは、停車場附近に吉見運送店と大書した倉庫の目に留つたことであつた。その地名が吉見であるから地名を運送店の名にしたとも解されるが、『丹波志』にある吉見の一族の系統が、或ひは今も存在して、此運送店主も吉見姓でありはせぬかとも思はれ、吉見の二字は深い肝銘を與へたのも道理、自分の家祖は吉見一族とは、切つても切れない因縁があるからの事だ。唯再游、篤と踏査したいと期しながら、未だにその機會がないのは、自分の怠慢に據るもので、心切かに慙然たらざるを得ない。

『丹波志』の記載に據ると、市島の地は、吉見氏の古くから領した所で、吉見氏は蒲冠者範頼の次男、吉見三郎資重の時から丹波に居り、資重の二十七代の孫に當る、式部少輔則重に至つて、天正十年明智光秀と戦つて陣歿し、城池亡ぶとあるのみで、何等吾等祖先に就て云ふ所はないが、吾等祖先がその領内のものであつたとすれば、吉見家に從屬したものと推測するに難くない。それが溝口氏に投ずるに至つた譯は、光秀の爲め城池が亡びたので、亂離の揚句、身のよせ所を定めた結果であらうが、どうして溝口氏に身を托することになつたのか、その委しいことは分らないけれども、溝口氏はもと尾張にゐたのが、丁度吉見の亡びた頃、若狭に移つて高濱にゐた。若州は丹波に隣る近い所だから、溝口家に身を寄せたのも自然の徑路で、無理な關係とは思はれない。唯當時の吾家祖は如何なる身分であつたか、恐らく士分では無かつたかに思はれる。假令士分であつたとしても、吉見と重い關係のある主従では無かつたと推測せざるを得ない。何となれば、若し譜代の重臣であつたとすれば、當時の君臣關係は、容易に他の武家に仕ふる事を許さなかつたであらう。余が家に藏する一卷の系圖には、織田信長時代のもので、最後に市島帶刀の名がある。これは士分で、森蘭丸外

二人がこの系譜を信長に披露に及び、信長の裏書があるけれども、恐らく當時流行の系圖屋の偽作であらうと自分は信を措いてゐない。

偕て家祖は溝口氏に寄つたことは事實であるが、溝口氏に取立られて士分となつたが、資産のあるに任せて今の所謂御用達をしたものゝやうに思はれる。當時の武家には斯るものが必要とされたのである。これに就て『丹波志』に「市島に仕立屋吉見平十郎と云ふものあり云々」と云ふに氣がつく。仕立屋と云ふは恐らく御用達と云ふ意であらう。その仕立屋の平十郎が自分の家祖に何等か關係があるかにも思はれるが、遺憾ながらそれを判するの材料がない。姓なども地名を名乗つてゐるが、或は吉見姓であつたのが、溝口家へ投ずる場合に舊姓を避けたのであるまいか。舊姓は矢張り吉見であつたかも知れぬ。妙なことには家祖も所謂仕立屋として溝口家に隨從したので、何となく吉見平十郎に縁故があるやうに思はれてらぬ。それは兎に角家祖が溝口家に投じてからは常に進退を與にし、溝口氏が封を加賀の大聖寺に移された時も、家祖は隨從して加賀に移つたに相違ない。これに就ては家に傳説も存してゐるが、その外に曾つて能登の政友に會した折、その人は「あなたの祖先の遺跡が吾郷土に

ある。」と云ふた。能登は大聖寺に近い風景地であるから、別荘のやうなものを營んで、そこに住したこともあるらしく、つまり大聖寺にゐたことの傍證になるのである。亦吾家の昔から一向宗を奉じてゐるのも、恐らく加賀にゐた頃歸依したものであらう。當時北陸殊に加賀に本願寺の勢力は日の出の勢ひであつたことを思ふと、斯く推測せざるを得ないのである。越後に於ける同宗の蔓延はその後の事である。乃ち溝口氏が越後に移つてからの事だから、吾家などは越後では最も古い信者と云ひ得るだらう。

楮又溝口氏が、大聖寺より越後新發田へ轉封の時も、吾家祖は隨從して移つた。これが吾家の越後に基礎を置いた始めである。斯く溝口氏と始終去就を與にしてゐるが、君臣關係はどれほどの程度であつたか、委細は分らないが、家に存する記録には、家祖が子孫の未來を案じ、士分を脱したとある。兎に角越後に移つてからは、關係が追々薄くなり、初めは新發田領の五十公野に住したが、後には天領の水原に住し、福島潟の開墾に就ては、何かの行違ひで溝口氏と訴訟までやつてゐるから、濃厚な君臣關係があつたとは思はれない。前にも云ふたごとく、昔諸大名には相當の資力あるものが、諸般の物資を供給したり、その他の用

を辨する爲めに隨伴することが例であり、丁度今日の事業家が、射利滿々たる滿洲などに見込みをつけて移るごとく、有力なる大名に隨伴することが、貨殖の方便であつたに相違ないから、吾家祖も恐らくこの徑路を踏んだものであらう。傳説によると、溝口氏の新發田に移つて來た頃は、今の北蒲原一帯の地は、沮洳たる沼地であつて、溝口氏もこれでは困ると、當時石田三成の檢分に來たのを機として、その去る時彌彦まで逐ふて加増を懇請し、三成は西蒲原郡内の若干の地を加増したと云ふが、當時の福島潟は今日に比すると、幾百倍も廣い渺々たる沼地であつたことを思ふと、確かに溝口領は沮洳の地が多かつたに相違ない。それが開墾されたのは北蒲原郡に後に大地主の起る所以で、家祖も其開拓には與つて力あつたのである。斯様に己が私家に屬することを談ずるは、烏滸の沙汰であるが、實は不明の史實を大方の先覺に問はんとするものである。

市島入道に就ての書簡

越前の吉田郡五領ヶ島村の平慶寺住職が、私と同姓であり、この寺の所在地は、元御陵島と云ひ、南北朝時代に市島入道と云ふ貴人が来り、平慶寺で薨去された。住職は今は一島を姓としてゐるが、元は市島と書いたといふが、大正十五年十一月十六日、此寺の住職から市島入道と自分の家に、何等かの関係があるかと問ふて来たことがある。私の家が越後に移つたのは天正年間の事で、南北朝時代の市島入道とは関係がないけれども、爰に同姓縁因から、平慶寺住職より寄せられた書簡の全文を掲げる。

(前略) 却説當寺中古享和年中國主松平公へ呈上の山緒記寫に、往古市島帝王入道平泉寺(御流罪(當越前大野郡にて泰澄大師開基)被成御座候處、平泉寺白山權現より毎度の御夢想にて、平泉寺に難成御座候に付、兼定島(當區)へ移住被遊、遂に當地に崩御被遊候。云々と有之、御行在の跡、御陵墓の佛も今にかすかに認められ、特に帝王三味の稱ある地と存候。

維新後まで御陵ヶ島と稱したるも、何帝に在すか不明の爲め、五領ヶ島村と改めたるも、學校名は今猶御陵小學校と申居候。

是等の諸方面につき考ふるも、當寺皇室に關係ある様に思はれ、且全然無根の記録を偽作して國主に呈する理由も無之と存じ、是が事實を明かに致度、多年苦心致居候も其端緒を得がたく候。市島の姓(中古まで市島と書す)につき各方面注意致居候も、是亦餘り例の無き姓に候。然るに貴位が同姓に被爲在且つ越後市島徳次郎氏と深き關係あらせらるるやに傳聞致居候。就ては同姓を稱せらるゝ由來又市島入道と稱せられたる法師が、御先祖時代に在らせられし記録又は傳説等無之候哉。

拙寺記録に付小生數年前よりの愚考は、帝王御流罪の文字は、史實に暗き中古住職の誤りと云ふべく、而して當地を御陵地とすれば、御陵不明の天子で無くてはならぬ。又陛下が御流罪にならせられ、尊體を邊鄙に忍ばせ給ふ様な御方は南北朝時代を想像する外なし。又平泉寺には桶正利なるもの出家して、惠秀禪師と稱し、西念寺を建立して一生を果し、同寺は于今存して桶を姓と致居候。

御陵不明の陛下は長慶天皇であらせられはせぬか。同天皇が南朝復興の雄圖を抱かせられ靈社靈寺に隱に御祈願被遊たることに思ひ到ると、或は御身を入道にやつし、重臣と諸國

に語らせらるゝ思召より、楠氏の血統正利等が、平泉寺にあるを聞召され、同寺に潜幸なりたるにあらざるか。

一方越後新潟の東方、某禪寺に楠氏の一族出家して隠れたる由に承り候。或は是等とも征討の御謀をしめし合はされん爲め、越後に下らせられ、其間に何等かの由來ありて市島の姓を稱さる御一族を生ぜしにあらずやと空想致候。御繁務中失禮を願みず御伺申上候譯は、全く皇室に關する記録の不明を不問に附するの恐多きを感じ、愚札を以て伺候次第に候。御姓の由來、御差支のなき限り御洩し被下度伏而奉願候頓首再拜。

追白、長慶天皇の尊號何時頃より初り候事か、當寺號には關係無之存候へども、爲念御指教を仰候

越前國吉田郡五領ヶ島村

兼定島平慶寺住職

一 島 義 成

(舊記市島と稱す)

吾家の回漕業

私の家の曾祖父時代、乃ち嘉永頃に回漕業を営んだことがある。案外大規模にやつたらしいが、關係書類が何故か家に一紙も存してゐない。ただ當時を語る記念物は、新潟の白山社に献じた繪馬額のみである。この額には新潟の港灣に船舶の満ちてゐる圖が描かれ、雲を隔て、城廓が現はれてゐるのは、多分新發田の溝口氏の居城であらう。此額は幼少の時から毎度見るものであるが、某年歸省の時新潟新聞社の友人に請ふて寫眞を撮ることを頼んだが、額が餘りに大きく取り外しが困難だと言ふて、掲げてある儘撮影したから成績がよくない。其折額の寸尺を取つて貰つたのを見ると横一丈一尺、縦七尺とあるから、取外しの容易でない事を知つた。額縁の右側には、願主差配人市島次郎吉正光と刻してある。乃ち私の曾祖父である。左側には宿、近江屋利左衛門加宿室屋文右衛門の名が刻されてゐて、其上頭に嘉永五年六月上浣と刻し畫工の名を文昌と刻してゐる。これが唯一の記念物で、火災の頻々たる

新潟に於いて、この額が社と共に無事に存してゐるは、洵に喜ばしいことである。

舊記の徴すべきものが無く、當時の事情の知れないのは遺憾であるが、先考が晩年妻に語られたのを聞くに、最も盛んにこの業を営んだ頃は、千石船四十艘の多きに及び、各船は種類の物貨を積んで諸方に回漕し、歸着の時は千兩箱一個を齎し來るのを通則としたと云ふのである。四十艘全部が千兩を齎したかどうか疑はしいが、假にすべてが通則通りであつたとすると、一年四萬兩の金を得たことになる。當時に於て決して少い金ではない。前述の額を白山社に奉納の時に就き、先考の談を聴くに、新潟の歌妓數十人に盛装せしめて額を載せた車を曳かせ、市中を練り歩いたので、満市時ならぬお祭り騒ぎを演じたとあるが、奉納濟んでのその夜、全市の妓を總揚して盛宴を張つた豪奢振りは、今日でも新潟で故老の言ひ傳へが残つてゐる。多分この額を奉納した頃が繁榮の絶頂に達した時であつたらう。その後何年であつたか、颶風が起つて多くの船舶が覆没した事がある。私の家もその厄に罹つて、一年に廿七隻の船を失ひ、それが爲めに家運が傾いたと言はれてゐる。曾祖父は貨殖の才があつて、頗る持重家であつた。家を繼ぐ嫡子が二十五才で歿したので、曾祖父の晩年は、そ

の妾腹の子に才略があつた所から、萬事をまかせたので若氣に逸つて遣り損じもあつてか、曾祖父は子孫に遺命を傳へて、海運業を決して營んではならぬ、と戒めたのは事實である。私の家名の意外に廣く傳はつたのは、全く回漕業の爲めであつて、船頭などで巨利を博したのもあつたらしく、三十年前函館に遊んだ時には、私方の船頭が營んだ貸座敷を見た。此事は紀行の部、北游紀程にあるから爰には略する。

余の養生説

余に養生の法を問ふものがある。余は笑つて云く、余には養生法など絶対に無い。唯よく酒を飲む、飲む時多く物を食せず、飯は絶対に拒絶す。若し余に養生法などありとせば、酒と共に物を食はない事、或ひは養生法かも知れぬ。併し養生のために飯や下物を食はざるにあらず、酒の入るべき腹部を塞がんことを恐るゝに過ぎずと。余又云く、余は實は病に對して甚だ臆病である。醫戒を守ること甚だ嚴である、四十二歳の頃大患に罹つた時は、喫烟と

飲酒を十年間嚴格に禁じた。これ或ひは今日の健康があるの故かも知れぬ。當時入澤博士は人に向つて密かに云く、あの人（余の事）は案外病氣に臆病である、多分長壽ならんと。病氣に臆する事は一種養生の法であるやうに思はれる。客問ふ、君の血壓如何と余云く、血壓を檢したることなし、血壓高くとも敢て身體に左のみ害あるにあらず、而も神經を刺戟して却つて病を醸すの虞あり、余が血壓を檢せざる所以なりと。余は以上の如く養生に無頓着だが、併し長壽を保つことは人生の重大事で、天恵を全うするは、生を天に稟けたものゝ大なる義務である。長壽を保つことを偶然の結果とすることは誤つた考へである。天壽を全うするのは自愛の結果であることを忘れてはならぬ。自暴自棄など云ふことは自愛の反對で、保ち得る壽命を自ら抛つものである。かの將校兵士の如く、戦場で命を殞すのは自暴自棄でなく、死が報國の爲めであるが、戦闘員にあらざるものは、延壽が國に報ゆる所以である。國家に大切な人であればあるほど一日と雖も長く生き延びねばならん。事業家、發明家、研究家など云ふものは、皆成功を長い歲月に期するもので、半途で死することが、如何に國家に取つて損失であるかは説明までもない事である。志あるものが自愛するのは、ひとり一身

一家の爲めにするのではない、壽命の長短が關する所は、甚だ廣く大なるものがある。

自愛と云へば誰にもある心得の如くであるが、實はそんな簡單なものでない。人間には本能的に種々の情慾が出沒して、人は自然その支配を受けるが、自愛の人は自らそれを牽制する。この牽制は頗る難いもので、非常の力を要する。誰しも自愛の心があるやうに思つてゐるが、その行動は自愛に逆行してゐるものが多い。自分自身の事を白狀すれば、自分が痛切に自愛の大切味を感じたのは、若い時分筆禍で入獄した時である。八ヶ月の繋獄何かあらんと思つたが、實は獄舎は全く別天地で、理由なく殺されても致方がないと思ふと、禍は招くべからざるものだ。自愛の念が足らなかつたと思ふた。血氣の時に自愛を忘れて危道に踏みこむことは、相當思慮があつても有り勝のことで、血氣を抑へることはなか／＼容易な事ではないから、自愛も容易なものでない。

人生七十を無事に経過するも敢て容易でないが、更らに十年二十年を重ねることは一層困難である。斯る高壽まで漕ぎつけることは實は大なる成功である。これを旅行に譬ふると、稀有の長程を旅して、無事目的地に達したと同じことで、凱旋にひとしいものである。自愛

は決して消極的に難きを避け、危きに遠ざかる故でない。兎もすれば己の心を誘ふ悪魔と戦ふて、之を征服しなければならぬから、自愛には積極の奮闘力を要する。そして勝利を博した喜びは、實に大なるものである。

自分は更らに自愛に就て多少の辯なきを得ない。世間延命の爲め概ね説く所の養生法は、曰く禁慾、曰く榮養、曰く醫藥と、要するに小乗の法に過ぎないが、私の自愛は大乗から出發してゐる。自愛の要は己の境遇や體力や智力を知り、それに應じて行動することだ。例へば一年の事をなすに、己が力を計つて豫算を立てることと同じく、無理な豫算を立てゝはならぬ。全體豫算と云ふものは其通りには行き難いものである。人間の行動に於ても、豫期が自然と外れたり、或ひは自ら後難を知りつゝ外すこともある。それが行く／＼大なる悩みを齎らすことになつて、己の力でそれが收拾出来兼ねることがあると、そこに自愛の破綻が生ずる。譬ふれば不渡手形を發行するやうなもので、取りつけの來る時は、即ち絶對絶命の時である。凡そ人生の衛生を損ふものは憂ひよりも甚しきものはない。憂ひは人の意内に潜んで、家族も知らず、醫師もこれを如何ともすることが出来ない。平生健康の人が遽かに斃れ

る其死因が、憂ひにあることは餘りに其例が多く、特に説くを要すまい。畢竟自らの力を超えて無理な事をやり、或ひは力の及ばぬ大きな事を起したり、大なる借金をやつたり、其借金 of 始末に不正行爲をやつたり、横領をやつたり、明るみへ云ひ出せぬ事をやるのは、皆豫算超過の不渡手形で、これが自愛に逆行する自害の法であつて、餘命ある生涯を之により短縮するものが甚だ多い。

賢者は自らの力を計つて、豫算の範圍に居るから危道を踏まぬ。それだから常に綽々として餘裕があつて、長壽を保つのだ。哲人ゴッゴリの言に、生の道は廣いのに、多くの人々はこの廣い道知らずに、死の道を歩み進む、と云ふたが、如何にも其通りで、自愛を知るもののみがこの廣い道を歩むのだ。

隱退不可説

社會の習慣で、人々が老後に入ると隱退するのが殆ど例となつてゐる。それには種々の事

情があつて、人に依つて隠退の理由は自然異なるが、人には全體安逸を欲する念もあるので隠退の習慣があると、それがジャステヒケーションになつて、多くは隠退する。老いて長く仕事にたづさはつてゐると、後進の路を塞ぐなどの非難もあるので、そんなことから愈々隠退を倫理的によいことのやうに考へて隠退するものもある。これを勇退と褒めそやすものもある。餘りに老人が頑張ると子孫の自營力を害すると爲すものもある。いろ／＼の環境や事情もあつて、大概な人は七十を踰へると退却して、隠居のやうな身柄となる。併し人々が隠退を思ふ時が、軍人などが降参を思ふ時と同じやうに、意氣がそろ／＼沮喪し出して、其氣力や人格を恒久的に弱める、左もなくばまだ働き得るものでも、隠退するとなると、別人の如くなるのが通例である。一たび隠退したものを起して、或局面に立たしてみても、前ほどの働きの出来ないのは、多くの場合に實驗する所である。敗軍の將士が再び陣頭に立つて出来榮えのよくないのと同様である。

氣魄と云ふものは人間の行動に最も大切なもので、病弱の人でも氣魄で活き、氣魄で事を爲す例は澤山にあるが、隠退はこの氣魄を銷磨し去るものである。氣魄は俗に云ふ張合から

生ずるもので、何事をか爲さねばならぬと云ふ張合がなければ、仕事も手につかず、それを遣り遂げる氣も起らないもので、隠退は則ち張合ぬけを招くものである。老人も狀況が區々で一概には云へないが、七十位の年輩は、實は仕事の成熟期で、既往に於ける種々の失敗や成功や苦勞や難儀を経た結果の收穫期である。學者などの研究は頗る歲月を要するもので、七十八十に達して、漸く成し遂げる例は少くなく、其研究を續けることは、其人に取つて愉快でそれ、決して堪へないものではない。教授などに停年制を設けるのは、隠退を餘義なくするやうに見えるが、事實は專意研究の時間を與へるものと見るべきである。決して其人が老衰して、思索が出来ないとするのではない。若し然らずとすれば、停年制ほど學界に損失を與へるものは無いと云はねばならぬ。實は收穫期は多く停年以後にあるからだ。

老境は思想の精鍊期である、雜然たる妄想が去つて頭の五える時である。此期にこそ老人に大事業を課し有終の美をなさしむべきである。譬へば草木に見ても、人を怡ばしむる艶麗の色を發するは、その最後にあると同様である。斯く云ふと老人に不可能をすゝめ、苛酷であるかにも見えるが、老人は寧ろ世間から除けものにされて、最早役立たぬと相場づけらる

ることが、寧ろ不快の甚しいもので、隠退と云ふことが、如何に老人の頭腦に悪影響を及ぼすか、餘生を短縮する、これより甚しいものはない。人は半ば氣で生きてゐるものなることを思はねばならぬ。其成し遂げんとすることに邁進せしむるは、其元氣を鼓舞して若返らせる方法でもあるのだ。

人の習慣を持続するは、其健康に如何に大切であるかは、角觥の體力に秀でたるものが、廢業すると案外早く死ぬのでも徴し得らるゝ。乃ち體力の鍛錬を失ふから其健康が持続されないのである。政治家でも文藝家でも、其慣習をつゞけることが、健康保持に大切な關係がある。病ある人を一概に保養せしめて無聊に苦めるよりも、其慣習となつてゐる事をやらせることがよいとは名醫の云ふことで、實際に適する醫療と云はざるを得ない。畫家は畫筆、鍛冶屋は鐵鎚と云ふ様に、其職業的趣味に終始せしむることが健康法であることを思ふと、隠退と共に其趣味より遠ざけることが最もよろしくない。但し老人には自ら其年輩相應に、休養の時間などに注意を要するは勿論であるが、人間の頭腦を働かせるには、決して多くの食料を要するものでないことは衛生科學の證明する所であるから、これは老人の憂とするに

は足らない。

人間の晩年は人間一代の最も大切な時である。これが清算期であるから、成功者の名譽は此晩年に生ずる。勿論清算期に至り、僅かに得た名譽を失ふ事もあるが、それは人事に於て已むを得ない。多くの場合年壽が事を成就するに足らないので、失敗の態をなすものもあるが、それは必らずしも失敗と云へないものもあり、後繼者で其遺業を立派にする事もある。兎角天壽のあらん限り活動することが、人間の大切な務である。悠遊自適と云ふ事は隠退を云ふことだが、實は古風な生活で、悠遊自適から傑作は餘り生ぜぬ。悠遊自適は却つて人を老碌に導く所以である。郷里に歸つて、いつも感ずることであるが、己と同年輩の友人等が如何にもフケてゐることで、隠居すれば斯くも老翁となるものかと歎息する。どうしても活社會に立つて、間斷なく周圍から刺戟を受け、揉みに揉まれなければ活氣を失ふ。揉みに揉まれて生活して來たものは、矢張り刺戟の中に活きるのである。隠退は、此刺戟を拒むものだから、老碌するのも無理はない。故に保健法の爲めにも隠退を非とせざるを得ぬ。

人間は老いて振り返つて、既往を追懐しても悔ゆる事ないやうにしたいものだ。乃ち自分

が何等かの貢献をしたと考へ得る過去を持ちたい。併し個様に行かず何等かの悔ひがあらばそれを改めそれを正しそれを玉成するのは、老後則ち、晩年を以つて其業をなす時とせねばならぬ。晩年は修正の時であり、補足の時であり仕上げの時だからあだに費してはならぬ。

余の酒史

酔餘、隙に任せて自分の酒の經歷を追想するのも一興である。自分の父も叔父も、皆揃ひも揃つて酒を嗜んだ。中にも父は豪酒であつた。自分は幼少の頃、よく父の酒を爛するサーピスをやつた。十歳頃であつたらうか、徳利からこぼれる程つめてある酒を一寸一杯偷み飲むのが幾んど例であつた。温めた酒は嫌ひで、冷酒はうまかつた。二三杯位飲んでも一向顔の色も變らず平氣であつた。酒の飲み始めと云へば斯くも早い、しかし飲めば飲めても、漢學塾時代も、新潟の洋學時代も全く飲まなかつた。謹慎したと云ふよりも、機會がなかつたのである。両親始め私の酒量を全然知らず、全く酒は飲めないと解してゐたらしいが、或

時飲んで親族一同を驚かした事がある。それは後に語るとして、東京大學に學生たりし頃は同窓と可なり飲んだ。其頃友人岡山梧堂と四十日間も旅行した事があるが、岡山は下戸であつたが、自分はどうしても旅舎に酒がなくては濟まなかつた。隨分到着處まづ酒を飲んだものだ。其頃は酒の質の粗悪の時、木會あたりの酒などと云つたら、何とも云へないひどいものであつた。それでも酒が無くては疲れが癒えず、木會道中で細久手と云ふ寒驛などでは旅舎が何故か酒を賣らず、酒を欲する客はみづから買ひに行かねばならんと云ふので、自分は足が疲れて動きがつかず、隣室の客も同じ悩みで、自分に同情を寄せ、買つてきてくれたが、如何にもひどい酒で今考へてみると、よくもあんな酒が飲めたと思ふ位である。浦島太郎云々の傳説のある、寢覺の里の酒が案外よく、タラフク飲んだ時は全く酔倒して前後も知らず、懐中物など取り散らして氣を揉んだが、それは岡山に保管されてあつたので、ヤレヤレと思つたこともある。東海道筋の岡山の親族に、二三日宿泊した時自分は他人の家に泊つて酒など飲むべきでない、自ら制して酒嫌ひと標榜したが、味淋を酒の代りに出されたので辟易し、其家を辭する前夜、送別の席では地金を現して盛んに飲み、四筵を驚倒したこと

もあつた。富士山で大シケに遇つて、薩州出身の海軍士官と石室に一夜を明した時、二升ばかりの焼酎を燗して三分の一ばかり自分が飲んだのも此時で、一向寒氣の爲め酔を發しなかつたが、燗した焼酎を飲んだのはこれが始めてあつた。其頃は書生ながら懐る都合がよく、毎晩自分が勘定役となつてよく同窓を連れ出して、一ツ橋通りの松月と云ふ天麩羅屋で飲んだ。すべて物の賤い時であつた。今日懇親會と云へば、五圓の會費が普通だが、其頃は五十錢の時だから、毎晩飲んでも費用は左したるもので無かつた。ある時同窓の田中館愛橋(博士)が、銀座の十二月の汁粉を平けて凱歌を奏し、賞品に菓子折を携へて來たのを、皆々寄つてたかつて食ひ、其禮にと天麩羅屋へ同行して見ると、此先生酒食共に他人に後れを取らなかつた。つい數刻前、十二月の汁粉を平げた計りであるのに斯の次第で、なか／＼當時は健啖であり酒豪でもあつた。

自分は同窓間で酒客の名を博してゐたと思ふが、親族は一向それを知らなかつた。然るに兩親を郷國から東京へ引上げてくる時に、近親のものが新潟で送別の宴を張つた。その時は自分も遠慮會釋なく豪飲したが、皆々自分に壓伏されてしまつて驚いた。自分は皆々が酔倒

の後も、自ら酒肴を酒樓に隣る旅舎に運んで、餘裕を示したことがある。此行彌彦の旅舎にも親族連が別盃を傾けたが、盗あり、自分の枕の下から紙入を窃み去つた。畢竟自分の酌酌の祟りであつた。自分が其後、世の中へ出てからも志政治にあつたので、政黨だ、新聞だ、遊説だと皆酒に縁のある陽氣な事で、酔乾坤に棲息したやうなものだ。高田新聞にゐた頃は毎晩編輯員を卒めて酒を飲み廻つた。この高田にありし際の経験を語ると、困つたことは、新酒の季節になると古酒を得ることが容易でなく、之を得るのにひどく苦心した。之も一つの経験であつたが、今一つは、ある時友人倉石知藏の家を朝訪問すると、此家は酒造家であるので、主人も酒豪である處から、朝から夜に入るまで酒を飲みかはした。此時は三升ばかりの酒を二人で飲み、案外意氣地がないと倉石の母に笑はれたが、實は一升以上を飲んだのはこれが始めてである。尙今一つの経験は、筆禍の爲め繫獄の身となつて、八ヶ月間酒と絶縁したことである。併し有體に白狀すると、八ヶ月間酒と絶對に關係ないとは言へない。繫獄中、自分は寫眞工場に三四十日ゐた間は、暗室に入つてよく薬用のアルコールを飲んだ。酒の向上時代は柳暗花明の巷に出入した時であらう。多くの酒客は此間の消息を語るを避

けるが、歡樂境の酒を語らずば畫龍點睛を缺くやうなものだ。此境は淫蕩の場と一概に難するが、酒徒はエロには案外冷淡で、往々斯界の叛逆兒と見做される。唯酒徒の喜ぶのは茶屋酒に一種の味のあることと、その環境に特種の興のあることで、この境に往々留連するのは、他にあり得ない酒の興が然らしむるものと云ふの外はない。此境に在つてこそ酒が藝術であることを會得する。社會の機微も多く此境に於て知り得らる。世の所謂分け知りなど云ふ者は、多く此境を潜つたものである。粗豪の人が圓くなるのも、あられづりの人間に雕琢を加へるのも、亦此境であつて、異性と交ることがその多くを齎してゐる。自分などは有體に云ふと、血氣時代には花柳の巷は最も嫌ひであつて、慷慨悲歌を事とし、頗るラデカルで、妥協性などは毛頭もなかつたが、感ずる所あつて、此巷に足を踏み入れたが、實は、社會學の學校に入つたやうなもので、利もあり害もあつたであらうが、然し靜かに考へて見て、悔ゆる所がない。確かに人生一たびは此境を踏むべきだと思ふてゐる、別して酒徒に於てをやである。

花柳に彷徨する頃が、政海に棹して議員となり、記者生活時代であつた。政海の酒は酸味

があり、選舉酒は苦味があり、共に陶酔を許さぬ。唯花柳の酒が調節するので僅かに此を得たと云ひ得よう。自分は明治廿三年の選舉に鹿を逸したが、その鬱を散せんと何用も帯びず東海道に適意の旅行をした。これは純なる酒の旅行で酔所即ち吾家であり、佳酒のある所は留連の地であつた。旅行も酒も斯る場合に於けるものが、最も興味があり、旅行の趣味と酒の眞趣を感得し得るは此様な時である。日清戦役の時議員であつたので、廣島の大本營所在地に議會が開け、之に趨會したが、此時も半ば酒の旅行で、百戦百勝の捷報を聞きつゝ飲む酒は、政治的の酒ながら愉快を感じた。往路には尾道に、歸路には京都で流連したが、千載一遇の酒だから、こゝに漏らすことが出来ない。

自分が四十二歳の厄年に嘔血の病を發した。それは宿年の酒禍であつたので、醫師より禁酒を嚴誡された。これは自分に取つて大なる打撃であつた。自分は酒盡に訣別を告げ、十年嚴に醫戒を守つた。此十年の間には、屢々大阪に出張して、早大の事を處した。攝州は酒の名産地であるのに、一滴も口にせぬ程酒に背いたのは情けないことであつたが、自分の更生したのは、全く十年禁酒の結果と云はねばならぬ。丁度禁酒十年目に、備中の豪家野崎武吉

郎氏を訪ふた。此人は土豪であり亦酒豪でもある。自分を敬待するに酒と盛饌を以てされたのに、禁酒とも言ひ兼ねて、爰に久方振り酒盞を手にし、主人外酒豪の家人五七と對酌痛飲したのは、自分の酒史の劃期的出来事であつて、爾來今日に至るまで酒と親んでゐる。

五十二歳の時酒の禁を解き、二十三年無事に酒を飲み、老を養ふてゐる。段々俗務を離れると、無聊の爲めに杯に親しみ勝で、腹具合がわるいと云ふて散歩で腹を減すと途中で飲み、寢後睡眠を得ないので苦しむと飲む。敢て多く飲むでもないが、老後較々過ぎるの嫌ひがないでもない。強ひて筆硯に親しみ、隨筆を『代醉録』と題して出版したのも實は節酒の爲めであつたが、實際は多く書いた日などは勞を慰せんとて飲み、一冊脱稿したからと云ふて飲み、版が成つたと云ふて飲むやうな始末だから、代醉録は名のみであるの譏りを免れない。しかし近年交際上の酒を飲む機会が大いに減つた。梯酒を飲むなどのことは全然無くなつた。家庭の獨酌は左のみ害をなさぬ。自分は獨酌主義で、料理屋へ行つても、人の家に招かれても、自家の主義を守つてゐる。そして多く飲む時は下物は幾んど要らぬ。これが衛生的によいかわるいか分らんが、自分には確かによいやうに思つてゐる。酒の種類も幾んど白

鷹の一種に限つてゐる。洋酒では好んでビールを飲む。烈寒の時でも飲む。酒渴を醫するにこれに越したものはない。便秘を解くにもよい、他の洋酒は幾んど絶對に飲まぬ。ウキスキーなどはよいものであるが、自分の知人で此爲めに斃れた幾多の例もあり、自分自身もいつぞや酔後腰をぬかした事もあるので、絶對の禁物である。すべて過激の酒は如何なる時でも避けてゐる。

余 と 煙 草

自分は、如何なる動機から喫煙を始めたかは思ひ出せんが、十八九の書生時代には、まだ喫煙を解しなかつた。自分より三四歳長じた大學の同志と、淺間山に登つた時、此友人は喫煙を好み、ある地點に休憩して、一服やらんとマッチを磨つても、マッチが濕氣を帯びてかどうしても發火しないので、看る／＼十數本を棄て去り、僅かに二本残すのみとなつた。その時友人は懸命の態度で磨つたが、幸ひに發火したので、その喜びはをかしい位であつたが

自分はそれを傍らに見て、喫烟慾の如何にも猛烈である一端を知つた。併し、自分は其後二三年位は、まだ喫烟をやらなかつたやうだ。

多分、廿二三歳頃から、ある動機で始めたと思ふが、其頃はまだ紙巻烟草などはなく、勿論、政府の専賣になつたのは、づつと後で、日本烟草を日本烟管で喫する頃である。喫し慣れて見ると、烟管は片時も離す事が出来ず、物を書く時など、片手に烟管を握らねば、どうしても書くことが出来ないやうになつた。自分が、某新聞の編輯局に執筆してゐた時の事、私の次席に座して居る人が、私の烟管を借りたいと思つてゐても、いつも擱んで居るので、一たびも借りることが出来なかつたと、コボシたことを思ひ出す。

私は其頃、薩摩や水戸の刻み烟草を専ら用ひた。私の郷國越後には、郷土産の大鹿烟草と云ふのが専ら行はれ、此烟草は、いくら喫んでも、口中が荒れないと人は珍重したが、一種の臭氣があるので自分は好まなかつた。銀座で岩谷松平が、薩摩烟草のシガレットを賣り出し「天狗」の銘のある或種が出てから、日本烟管を廢して、シガレットの愛好者となつた。亞米利加風のシガレットを村井商會が出したのも此頃だが、これも一時喫した。さて、外國

烟草を喫み覺えると、亞米利加風よりも、埃及や土耳其古烟草の味が、遙かによく感ぜられ、烟草だけは亡國の物に限ると、禮讃したこともあつた。

自分は多量に喫煙するので人は驚くが、實は喉に煙りを通さない喫煙家で、其爲めに餘り害を受けない。實は、眞の烟草好きでないのかも知れない。大隈老侯も、絶えず埃及烟草のシガレットを喫した人だが、あの人も煙りを喉に通さない人であつた。侯の居室には、昔風の長い烟管があつて、時々日本の刻みを用ひてゐられた。又先帝の頃、時々恩賜の専賣局製の菊紋入のシガレットを用ひられ、それを頂戴したことも毎々あつた。自分も長い間烟草の奴隷で、喉まで通さない云はゞ輕薄の喫煙家だが、どうしても之を廢することが出来ない。二十數年前、重患に罹つて、酒と共に喫煙を十年禁じたことがあつたが、實に辛らかつた。旅中や事に倦んだ時など、酒の禁は諦めもついたが、喫煙慾が切りに起つて、之を抑へることがひどく困難であつた。

兎角、常用の烟草が絶えると、一時ひどく困る。支那へ旅行した時、先方に種々よい烟草があつて、敢て不自由を感じなかつたが、別府に着した時、常用のオリエント號がステーション

ヨンで賣つてゐるのを見て、宛かも故人に會つたやうな氣がして、有る限りを買ひしめて、喜んだことがある。實は、支那ではオリエントよりはるかに優る烟草を喫してゐたのだつたが、母の乳は戀しいと見える。

煙草の味ほど向上するものはないので、上級の烟草を喫すると、直ぐその方に轉向が出来るが、價の高いことを斟酌して、常習となるのを顧慮する。ある烟草通人の隨筆に、烟草は各階級のを、かはるゝ順次に喫するがよい。さうすると、しばらく廢してゐた高級のが、一層よくなると。それは全く其通りだが、實際に行はれ難い。數日の旅行をする時、出先で有合せの烟草で濟まして居ればよいわけだが、僻地の旅行には、いつも烟草が氣になつて、多くの烟草を仕入れて行く爲めに、持カバンが一杯になる。

烟草を味ふことが、人間のみの特權と云はれるだけに、もとは、蠻島で教はつたことであるが、それが世界に普及して、如何なる暴虐の君主と雖も、それを制止することが出来ない。烟草を禁止すれば、革命が起るほど、人間の抑へ難い趣味となつてゐる事は、烟草の歴史の證明する通りである。烟草に就ては、古今種々の興味ある挿話は少くないが、私は今それを

説くことをしない。唯一事を擧げる。傑士マジニーが亡命して、英國に潜んでゐると、刺客がその居室を襲ふた。マジニーはそれを知つて、靜かに、君の來意は解つてゐるが、そんなに急ぐには及ぶまい。先づこれを喫して徐ろにやれと、シガーを與へたので、刺客はその落つき拂つた態度に恐縮して、無禮を謝したと云ふ挿話があるが、犬養木堂が致命の一彈を受けながら、婢に煙草を持ち來らしめた話も一對で、木堂は英雄めかしく、殊更に喫烟したのではなく、緊張を解くには烟草が何寄りの好魅劑であるからの事だ。ビスマークが陣中、僅かにポケットに一本残つてゐるシガーを、瀕死の士官に割愛したのも、流石に喫烟家の情であると感じらるる。

私は、日本の專賣局の烟草に就て強ち説がないでもないが、それらを今茲に説かぬ。唯、自分の趣味から云ふと、西洋に於ては烟草のミックステリアを賣ることが羨しい。酒の混合したのは閉口するが、自分の好む烟草の種々の葉を調合することは、最も望ましい。烟草は必ずしも純粹の一種のものがよいに限らない。自分の好むやうに調合されば、それをシガレットにしても、ハイブに入れても、自分の意に最も適ふ。西洋では、番號を云ふてやれば

どんなミックスチュアも賣つて呉れると云ふが、日本でもそれに倣ふやうな將來が、必ずあるであらうと思ふ。

書畫賣立目錄に就て

毎日案頭に落ち來る宣傳書は堆を爲すが、それは概ね塵壺に葬つて了ふが例である。併し中に葬りかねるものがある。それは書畫骨董の賣立目錄である。これも宣傳書ではあるが、近年此種の目錄に費用構はず精を凝すことが著しく、二十年前にはないことである。大名の拂物目錄などになると、其家の藏帳とも見らるべきものがある。二三百頁にも及ぶ大冊に精細の寫眞版が充ちて、堂々たる趣きがある。之を製作するに、大きなものになると、四五圓位はかゝるであらうが、百萬二百萬の物を賣るに、五分や一割の費用を宣傳にかけるは、何でもない事であるから、斯る豪華な宣傳目錄の出るのも偶然でない。自分は此宣傳目錄を受けながら、其賣立場に行つて實物を見ることは幾んど無い。併し閑に乗じて之を展べて觀る

ことが、一時の逸興たるを失はぬ。此等の目錄の内容に就ては、甲乙丙の等級もある。新古の別もある。新古混淆の物もある。藏者の二三人を合したのもあり、其藏者の名に托して、書畫屋が庫の賣残りを交へたりすることもある。勿論、眞實も混入してゐる。いくら精細に寫眞版を作つても、眞實の辨別はこの種の目錄でつくものではないが、名家の藏品で、其賣立に他家の物の混入を許さないのには、安心して鑑賞の出来るものでもない。が、これにも絶対に實物が無いとは限らない。併し買ふ心も、欲しがる氣もない自分は、頗る無責任で何等執着がないから、甚だ氣樂である。兼ねて名物と聞いては居るが、其片影を見る事すらなかつたものを見るのも一興だ。自分の趣味でない流派の畫を見て、多少何か得る所のあるのも此目錄のお蔭である。富豪の藏した書畫には、俗に墮したのものもあるが、同時に高い潤筆に應ずる作や大作もあるのが例で、其作は新人の手になつたものにせよ、それを見るのも亦一興たるを失はぬ。人の趣味や嗜好はさまざまで、何でも構はずゴツチャに寄せたものは錯綜してゐるが、相當筋が立つて系統を追ふて集めたものもある。参考になると云へば此類であらう。敢て買ふでもなく欲するでもなく、實物を見に行くでもなく、居ながら案頭に

目録をひろげて、書畫に親しむほど氣樂なことはないが、併し慾を云へば、賣らない品の目録が見たい。多くの賣立には、藏者が惜んで出さないものがある。これは舊大名などに最も多く、家の寶とするやうなものは抵ね除外するから、賣立るものは、大體第二流のものである。骨董も亦同様である。吾等が其除外された方を見たしと思ふのは其故である。更に大なる賣立の結果を知ること、一興ならずとしない。其結果は必らずしも吾等に報じてはくれないが、新聞や雑誌に現れる目録に就て味はつて見るのも、亦一興である。

田舎隨筆の材料

近年各地に郷土誌料を集めることが行はれ出したので、ヒントを得て材料を田舎に求め、郷土隨筆とか、農村隨筆とか、田舎隨筆とでも云ふものを書いて見たらと思ひ付いた。勿論材料は所謂下手物で、ウブの、磨きのかゝらぬ童貞のもので、埋れて現代人の齒牙にかけないものながら、玩味すればおのすから味があつて、書いて見れば相當ものになるやうなもの

が、草深い田舎に散らばつてゐる。それはどんな所を漁れば得らるゝか、と先づ考へて見たが、昔都會地では、髮結所が一種のクラブとも云ふべきもので、こゝに雑多の人が寄つて、さまざまの評判をやつたり、今新聞に出すやうな出來事を語らつたりしたが、今の理髮所は模様が變つて談話を交へる所ではなくなつた。大體田舎のどんな村でも村はづれに茶屋があつて、それが車夫の立場になつてゐて旅客がそこに立寄る。兎もするとそこに飲食もする。ここに腰を据えて老嫗を相手に、村のことを聞けばおよそが知れる。旅籠屋などもいろいろの話の輻輳する所で、話上手の主人や番頭が居ればその宿驛のことが分る。駕籠舁や車夫などは案外おもしろい話を持つてゐるものである。馬夫も同様である。退屈凌ぎに、いろいろ語らせると妙なことを耳にする。旅籠屋に泊つて寢後相手になるものは按摩で、これが年功を経た老人であると、話柄は豊富にもつてゐる。宿屋の内でも、温泉宿は材料の多い所である。上等の温泉旅館では、客が銘々一室を占めるから他の客と交らないが、田舎のプロレタリア式の温泉宿になると、入りこみであるために、種々の人間と同居し、退屈凌ぎに互ひ々種々の談話が湧く。乗合船なども雑客の互ひに談話を交へる所で、他國の人も加はるから珍



筆 漫 爐 擁

著 者 市 島 謙 吉

發 行 者 東 京 市 京 橋 區 新 富 町 三 ノ 七 齋 藤 昌 三

印 刷 者 東 京 市 京 橋 區 築 地 二 ノ 五 川 崎 佐 一

發 行 所 東 京 市 京 橋 區 新 富 町 三 ノ 七 書 物 展 望 社

電 話 東 京 橋 〇 八 九 七 番
振 替 東 京 六 〇 八 〇 八 番

所 賣 發

東 京 堂 栗 田 書 店 上 田 屋
北 陸 堂 東 京 東 枝 書 店 (都 京)
神 戶 堂 美 屋 (神 戶) 川 瀨 書 店 (名 古 屋)

昭和十一年三月十五日印刷
昭和十一年三月十九日發行

定 價 金 二 圓

談も出る。種を搜がす一つの方は、寺宮の参詣の講中に加はつて歩き乍らにも種々の話を聞くし、同宿してもいろ／＼の話が湧く。今日の團體旅行も講中と同じ様なものだが、老いたる爺媼の交つてゐる講中の方に掘り出しの種が寧ろ多からう。渡船場の船待ちに雑客と語り、火の番の詰所で、夜番から話を聞くなども一法であらう。若しそれ特殊の種を探らんとするには、自ら特殊の處を選ばねばならぬ。山のことを知らんには山小屋に行かねばならぬ海のことを知らんには漁村を訪はねばならぬ。川にせよ、森にせよ、島にせよ、湖沼にせよ皆それ／＼特別の話柄がある。魚を漁する納屋や獵夫の山小屋などに泊めて貰うことは、話を掘むの好適所で、燈臺の如き人の餘り行かぬ所には特別の話が存する。すべて風雪波濤などの難場には、必らず特殊の話がある。名所舊蹟となると、話は最も豊富であるが、茶屋の婆さんから、歴史や寺の縁起や、國寶の講釋を聴くことはどうでもよいとして、俗的口碑を聞き得るは此處である。或ひはスキー場、或ひは碁會所、カヒー店等々、今様の場所は少からずあらうが、そこいらには案外童貞の材料が得難いと思ふ。

— 擁 爐 漫 筆 畢 —

